
青の少年

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の少年

【Nコード】

N8228A

【作者名】

刹那

【あらすじ】

普通に高校生活を送っていた少年、羽間祐二。いつもの通りのつまらない日常。その日もいつも通りに過ぎていく——そう、思っていた。帰宅途中の祐二を襲ったのは——？

0：プロローグ

「——んだよ」

少年は手を見つめる。

「——なんなんだよ」

硬く、鋭く、鎧を纏ったように、強固な双腕。

「これは、なんなんだよ——ッ!！」

髪が淡い青に染まっていく。

少年は頭を抱える。

「ああああああああ——ッ!！」

——時は数時間前にさかのぼる。

0：プロローグ（後書き）

適当命の刹那です。よろしく！

1：壊れる日常

いつものように、ただ平凡な生活を送っていた。

起きれば、俺しかないマンションの一室。

適当にテレビを付けて、焼けたパンをかじる。

制服を着れば、学校に登校した。

それなりの付き合いがある友人に挨拶をすれば、チャイムが鳴る。

そして、退屈で平凡な学校生活が、また幕を開けた。

*

数学の教師が、なにやら数式を黒板に書き、みんなに聞こえるように、数式について説明していた。

ぶっちゃけ、俺にはその数式が子守歌にしか聞こえない。

こんな授業にいたい、なんの意味があるのやら。実際、今出てる数式だって、社会に出て使う奴がいるからさえ怪しい。だいたい、数式やらなんやら、小難しく言ってるけど、そんなの最低限小学生レベルあれば事足りる。

ここまで来ると、単純に愚痴かも知れないけど、学校自体存在なんてしなくても良いと思う。

そりゃ、社会の常識だって必要だとは思っさ。けど、そんなの中

学までで充分だろ。それでも、仕事につくには高校に行かなければいけない。

……鬱だ。

俺は小さく欠伸をする。そういえば、昨日、中間試験の予習してたんだっけ。

愚痴を言いながらも、しっかり勉強してる俺に苦笑する。俺は教師に当てられないのを祈りながら、瞼を閉じた。

*

授業の終わりを告げるベルの音に起こされる。

目を開けると、教師が不満そうにしている。どうやら、やりたかった場所まで出来なかったらしい。教師は適当に切り上げると、教室を出ていった。

休み時間だけあって、教室内は談笑で溢れていた。

見慣れた人間が、俺の机までやってきた。

「よう」

「よう」

相手がかけてきた言葉と同じ言葉で、相手に返す。

こいつは、瀬川章^{せがわあきら}。入学以来の友人だ。

「なあ、お前、さつき寝てただろ」

「よくわかったな」

「寝言呟いてたからな『柚木先輩』って」

途端に、俺の顔が真っ赤に染めあがる。

「嘘だよ」

「言って良い嘘と、悪い嘘の区別をつけとけ」

柚木先輩とは、俺の片思いの相手。長い黒髪をなびかせて歩く姿は、まさに神々しいと言って過言じゃなかった。あのやさしくも、なにか背負っているような瞳に、背中から漂う哀愁。

なんだか、守ってあげたくなるような人だった。きっと、彼女に守ってほしいと上目遣いで頼まれたら、溶岩だろうが津波からだろうが守ってみせる自信がある。

実際、そんなことは天地がひっくり返っても、あるかないかだろうけど。「だって、あまりにも反応が面白いからさ。ホント、お前ってからかいがあるよな」

「ほっとけ」

章は、可笑しそうに笑っている。こいつは友人と言うより、悪友だな。と、ひとり納得する。しかし、こいつは俺がありのまま接することが出来る、数少ない貴重な友人。

それに、みんなは遠慮して俺に接する。別にそれが普通と分かっている。でも、こいつは、章は、本音を俺にぶつけてくる。それが堪らなく、心地よかった。

章が、ああ、そうだ。と思いだしたように、手をたたく。

「なんか今日、この後の授業無いんだってよ」

「え、なんでだよ」

「ほら、最近流行ってるじゃん。通り魔事件」

通り魔事件。ここ最近、この街周辺で流行っている。

なんでも、ここ一ヶ月で五十人は殺られてしまったらしい。高校が早上がりになるのは嬉しいけど、それは尋常なことじゃない。

そのとき、ガラツと教室の扉が音をたてて、開けられる。

「ほら来た」

無精ひげを伸ばした貫禄のある校長と、ハゲ頭から流れる汗を拭くモヤシな教頭が、教室に入ってきた。

校長がわざとなのだろうが、そうとは思えない咳払いをする。これが貫禄と言うやつか。

「もう知っている者もいるとは思うが、今日の授業はもう切り上げ、下校したまえ」

簡潔に要件を告げた校長は、もう用はないとばかりに、すぐ教室を出ていった。それに頼りない教頭が続いた。

ふたりが出ていって、数秒後。ことの次第を理解した生徒たちが歓声を上げた。それに不満を持つ者も数人いたようだけど、特になにも言わない。

章は俺の横で、嬉しそうにガッツポーズを決めていた。

「本当、嬉しそうだな」

「そうゆー、お前だって」

当たり前だろ。誰が好き好んで、つまらない授業なんて受けるか。ただでさえ短い人生のうち、三分の一を学校で浪費できるか。勉強が好きな奴の神経なんて、理解できない。今回ばかりは、教師に感謝。

「あ、でも、柚木先輩は勉強好きなんだっけ」

「先公おおおっ！！」

意見を百八十度変更。先公をすぐさま罵倒した。

章がゲラゲラと笑う。

そんな平凡で、でも平和な日常が流れていた。

1：壊れる日常（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。

文章的にまだまだ未熟ですが、評価とかよろしくお願いします。

2：ボロキレ少女（前書き）

どっちかと言えば、日常が壊れたのはこっちですが、気にしないでください。

2：ボロキレ少女

章と別れ、俺は自宅へ続く道を歩く。

昼時なのか、たまに家から人の話し声が漏れてくる。

仲間内で会話している主婦を見かけると、平日に外を歩いてるんだな。と、実感する。

こう、風邪で学校を欠席した時以外に、平日の外を歩くのは、なんとも言えない気分になる。

でも、しばらく歩くとそんな感情もどこへやら。途中から、太陽の暑さに滅入ってきた。

そんなとき、自販機が目に入る。ちょうどいい。なんか買つか。

俺は自販機に歩み寄り、百二十円を投入口に入れる。ファントを押すと、ガコンとゆう音をたて、ファントが受け口に落ちる。受け口に落ちたファントを取るために、身を屈める。そこで気がついた。自販機の横には、ひとりの少女が膝を抱えて座っていた。しかも、服は布切れと言っていいほどにボロボロだった。

明らかにその少女は異質だった。日本とゆう国は、政治だなんだはあるけど、かなり平和な国のはず。こんなにやつれた少女が、こんな所にいるのはおかしい。

でも、俺はどうかしたのとか、大丈夫、とか言えるようなお人好しじゃない。俺は買ったばかりのファントを少女の前に置くと、少

女の前を横切る。

——背後から、声が聞こえた。

「見つけた」

少女の唇が狐を描いてることに、俺は気づかない。

*

背後の声は

「見つけた」

と言った。ファンタのことか？ それとも、ファンタを置いたお人好しか。

どちらかは分らないが、俺は振り返りもせずに、その場を立ち去ろうとした。

——そのとき、俺の左胸を何かが貫いた。左胸は熱く燃えたぎった。俺のものではない、何かの異物感を得る。

視線を自らの胸に持っていく。そこにあるモノの理解には、数秒を要した。

ドクンドクンと脈打つ何か。それは赤黒く、血管のようなモノが張り巡らされている。

それを鷲掴みにするモノ。それは細い腕だった。

ドクンドクンと脈打つそれは、俺の命。心臓。

見ているだけで、吐き気のする光景だった。実際、口からは鮮血が流れている。

嬉しそくに笑いかみ殺す、少女の声。

「五十人だ。どれだけ人を殺して、お前みたいなのを待ったことか……」

俺の心臓に力を込められる。

「さあ、貴様は俺様の奴隷に成り下がれ」

少女の声はかすれ、五十年代の男性の声ものになる。

それが耳に入るが最後。俺の命が潰された。

2：ボロキレ少女（後書き）

ありきな展開の予感。

3：殺人衝動

——衝撃。

すでにジジイに成り下がっであろう、なにかが飛び退いた。

最高だ！ これほどの力とは！ と、男が笑っている。耳障りだ。

あれ、そういえばなんでこんなことを考えられるのだろう。俺は死ん——、

突然の頭痛に、両手で頭を抱える。

頭が揶揄ではなく、状態抜きで割れそうに痛かった。脳に電極を差し込まれ、直接電流を流されるような感覚。

頭に伝わる感覚がおかしい。手の感触が人間のそれと感じれない。人間の手が触れているのではなく、硬い岩に触れている感覚。

俺は気になり、両手を直視する。

「——んだよ」

俺は手を見つめる。

「——なんなんだよ」

いまにも泣きそうなうめき声を、喉から絞り出す。

目の前のそれは、硬く、指は鋭く、鎧を纏ったように、黒光りする強固な双腕。

「これは、なんなんだよッ!!」

髪が長く延び、淡い青に染まっていく。

足も漆黒の鎧をまとったように、強固なものに覆われる。でもそれは、人間のものではない。

「うわああああああ——ッ!!」

男の高笑いは止まらない。頭の痛みが引く。でも、なんだよこれ！ この体はなんなんだ！

曲がり角に設置されているミラーで俺を写す。

それは紛れもなく人の形。俺の顔もそこにある。ただ、体にある黒の鎧だけは異質。

男の高笑いが耳障りだ。

「いやはや、ここまでとは思わなんだよ。さあ、オレの忠実なしもべ。そこらへんにいる人間を殺せ」

五月蠅かった。調子に乗るな。

俺は常人を遥かにしのいだ力で、打ち抜く勢いで地面を蹴る。まばたきひとつの間に、男の懐にもぐり込むと拳を振るう。

男は驚いたようにうしろに飛び退くが、遅い。

俺の両腕が男の左腕を捕らえた。俺は迷わず男の腕を引きちぎる。

赤い血が噴水のように吹き出て、辺り一帯を赤く染め上げていく。その血は俺にも大量に付着する。臭い以外に、特になにも感じない。

男は右手で傷口を覆うと、憎悪の感情を醜い顔に貼り付けてる。

「貴様あ……っ！ オレに殺されたくせに、何故！？」

殺された？ なにを言ってるんだ、このジジイ。俺は生きてるじゃないか。

俺は呆れたように、肩をすくめ、生きていることをアピールするように、手を軽く広げる。

「餓鬼が……散れえええいつ！」

男の手の中に、片手剣が現れるとそれを手に、俺へと接近していく。間近で見た剣は、柄下にされている美しい装飾が、こいつにはもったないくらいに不釣り合いだった。

男は剣を振り下ろすが、しかし、俺を斬りつけるには至らない。

俺は剣の腹に裏拳を叩きこみ、刀身をへし折った。

あいつはなにかを叫び、俺に殴りかかる。が、それらすべての行動は、まるでスロー再生しているビデオがごとく遅い。生きている時間が違う。

俺は男に特大の拳をお見舞いする。

拳は肉を貫き、男とこの世を断絶した。

*

手に残るのは、柔らかな肉の感触。むせるような血の臭い。俺の腕に貫かれて、足が地面から離れている男。

「——ッ!」

俺は男を腕から引き抜く。宙に打ち付けられた杭がなくなったことによって、男の体は血の広がった地面に力なく落ちた。

俺は……なにをしたんだ？

真っ赤に染まる俺の両手。手に残る肉の感触。すべてがリアルだった。

「バカな奴。大天使ごときが、魔王級に勝てると思ったのかしら」

突然の背後の声に旋律する。

「うわああああっ!」

俺は後になって思えば、同様していた俺は、なにもかもに敏感だったのだろう。

背後に振り返ると、なにも分からず、拳を声の人物へと打ち出す。

手に残るのは、柔らかな肉の感触。……ではなかった。

「え？」

拳は片手で受け止められていた。

「いきなり攻撃なんて、物騒ね。羽間祐二くん」

俺の名前を呼んだ人物。柔らかな物腰に、強い意志を秘めた女性。

「柚木……先輩？」

3：殺人衝動（後書き）

うわぁ……ごめんなさい。ありきな上に文字数少ないっ！（汗）
自サイト同時進行なので、続きはなかなか書けませんが、どうぞご
ひいきに。

P S ・ ツッコミどころ満載な小説なので、指摘歓迎。

P S 2 ・ 髪の色はもちろん、シャナです。

P S 3 ・ 主人公は・h a ・ k のハセヲとでも、思っけてください。

4：柚木先輩

そこにいたのは、俺が憧れていた女性だった。

意味が分からない。なんで先輩がここに……。

そんな俺の顔を見て、柚木先輩は微笑する。

「どうしてって、顔ね。それより、自分の格好を見てみたら？」

その言葉で、俺の姿がおぞましい物になっていることを思い出す。

俺は柚木先輩に掴まれていた腕を払い、体を隠すように先輩に背を向け——掴まれていた？

そこで疑問が生まれた。掴まれていた。女性の柚木先輩に。

確かにそれはそれでショックだ。差別的かも知れないけど女性に力で負けるなんて。

でも、今は訳が違う。柚木先輩に背を向けたため、目の前にある死体。血を流すそれは、俺の拳に打ち抜かれた。それで、動かない肉塊に成り下がったのだ。その拳を受け止めるのは、ありえない。

スツ——と、背後から細い二本の腕が伸び、俺の首に絡まる。

動けなかった。少し力を出せば、簡単に振り解けるはずなのに。

それをしてしまったら、俺の世界が終わってしまうような気がし

たから。

甘いリンスの香りが漂ったかと思うと、人の吐息が俺のうなじをくすぐる。

「ねえ……」

甘く誘惑するような、艶やかなソプラノ。

「自分のこと、知りたくない？」

自然と早鐘になる鼓動。

「それとも、知りたくないの？」

知り、たい。

「なら――」

――わたしの奴隷になりなさい。

「――はい」

*

首に絡まっていた腕の片方が、俺のあごに触れる。三本の指があごを固定すると、俺の頭を肩の方まで持っていく。

そこには、目を閉じた柚木先輩の顔。

瞬間、柚木先輩と俺の唇が重なった。

ゆっくりと柚木先輩の舌が俺の中に侵入する。

「んっ……」

俺の口内を陵辱する柚木先輩の唇から、わずかに吐息が漏れる。

柚木先輩の甘い香りが俺の鼻を刺激し、唇を柚木先輩に半ば犯される二重、三重の快楽に酔いしれる。誰かがキスはレモンの味がすると言っていたけど、そんなのは嘘っぱちだと、酸素不足の頭で考えていた。

そつと、柚木先輩が唇を俺から離す。

柚木先輩の表情に変わりはない。ただ少し、笑っているようにも見えた。

酸素を取り込んだ頭は、だんだんとクリアになってくる。すると、俺の頭はある事実を認識した。

——先輩とキスをした。

「えええええあああういいいいいい！？」

思わず、背後に飛び退く。簡単に柚木先輩の腕から抜け出せたけど、そんな些細なことはどうでもいい。

俺は混乱する頭を両手で抱える。そこら辺を歩きまわりながら、あからさまにうろたえる俺の頭には、人と会ったらどうしようとか

言う通常の思考など塵も浮かばず、たださきほどの事実を思考する。

「せせ、先輩とキスウ？ 俺の初めては先輩に奪われた！？」

とうの柚木先輩はと言うと、自分の唇を人差し指でなぞっていた。それで妖艶な笑みを浮かべる柚木先輩は、世界の誰よりも美しく、そして怖かった。

「あら、初めてだったの？ それは失礼」

いじめっ子のように無邪気に笑う柚木先輩は、さきほど妖艶さと変わって、かわいいとゆう形容詞が似合う雰囲気になっていた。

「それより、自分の格好を見てみれば？」

そう言われて思い出す。俺の置かれた状況を。

人を殺して、変な体になって――、

だが、俺の体は人間の体だった。

「……あれ？」

体がふつうに戻っていた。制服の胸元には風穴が空いているものの、それ以外はまったくもってふつう。

たった数分の出来事だったはずなのに、今の格好がひどく懐かしく感じた。

「あなたは明日からわたしの奴隷ね。それじゃあ、また明日」

ひらひらと手を振りながら、柚木先輩は走りだす。俺は柚木先輩を引き止めようと声を上げるも、柚木先輩はすでに遠くにおり、声は虚しく虚空に溶けていった。

気づけば、死体は血もろとも、そこには何も残っていなかった。

4：柚木先輩（後書き）

ごめんなさいすいません奴隷とか俺の趣味ですゲフウウウ！

さて、なんだかんだで更新してます。

これから、柚木先輩との関係は！？

祐二の力はいつたい……っ！

乞うご期待。していただく

PS・とある魔術の禁止目録はいいです。

PS2・PS2はプレステ2じゃないよ。

PS3・この後の展開考えてねえっ！（爆）

5：嗚呼、悲しきかなパシリ人生（前書き）

更新、遅れてすいません（汗）

詳しくは、あとがきをチエケラアツ！

では、嗚呼、悲しきかなパシリ人生。始まり始まり〜（パシられて
又エー！のツツコミは無しの方向で（爆）

5：嗚呼、悲しきかなパシリ人生

俺は、その日はふつうに帰宅し、いつも通りの時を過ごした。

制服の風穴さえ除けば、まるで今日あったことが嘘のように思えるほどの日常。

ただし、その日常は翌日に完全粉碎と書いて字のごとく、完膚無きまでに叩き潰されるのだった。

*

風穴の空いた制服を予備のに変え、いつも通りに学校へと登校する。

欠伸をかみ殺しながらも、教室のドアを開ける。

章が陽気に、ようと挨拶するので同じように返す。

自席に付けば、鞆を置く。

ああ、なにも変わらない平凡な日常――、

「祐二」

透き通るような女性の声が俺の脳天を、クリティカルヒットした。

グオンと効果音がなるかと思うほどの速度で、声の主がいる入り口に視線を移す。

柚木先輩だ。

……でも、何故に呼び捨て。と、考えていると、

「呼ばれたら来い」

命令口調でお呼ばれました。拒否権は無いようだ。拒否する理由はないけど。

まあ、憧れの柚木先輩に呼ばれたとあらば、即参上な俺なので、柚木先輩のところまでダッシュで駆けつける。

「遅い」

厳しい！ なんだろう。いつもの優しくて、けしてクールとゆうわけではなく、それでいて神々しい気品溢れる柚木先輩はいつたい何処へ。

機嫌でも悪いのだろうか。

「えーっと……なにか、用ですか？」

俺は社交辞令のようなセリフを返す。

でも、わざわざ三年が二年のクラスに来てるのだ。用がない方がおかしいわけで、俺のセリフは的を射ていると思う。

しかし、柚木先輩から返ってきた言葉は、

「別に」

「無いんですか!？」

「奴隷が五月蠅い」

ど、奴隷……。そういえば、昨日奴隷だと言ってたような。

ああ、あれは夢じゃなかったんだな。

昨日のこと（主にキス）を思い出しつつ、俺は顔を赤くする。

しかし柚木先輩は、そんな俺の様子を歯牙にもかけず、柚木先輩は俺の言葉に眉をひそめる。

「用がなきゃ会いに来ちゃ行けないの？」

なんとという言葉だろう。破壊力はさながらプロボクサーの一撃が、人体急所に命中したなみの言葉だった。

そうね、じゃあ、と柚木先輩はなにかを考える。

「昼に購買で限定プリン買って、届けて」

柚木先輩はそれだけ言い残すと、踵を返し行ってしまった。

俺は章にわき腹を小突かれつつ、柚木先輩の背中が見えなくなるまで、憧れの先輩を眺めていた。

*

ぜえぜえ……。

俺は酷使した肺に空気を送り、ゆっくりと吐き出す。

だんだんと息が整ってきた。プリンは……無事のようなだ。しかしまあ、なんだあの限定プリンは。あそこまで入手困難なプリンが購買にあるのは、世界広しと言えどウチの学校くらいなんじゃないだろうか。

柚木先輩の教室、31Dにプリンに届けるために階段を登り始めた。

俺は階段を鼻歌混じりに登っていく。

これを持っていけば、柚木先輩は喜ぶだろう。本当に買ったの、ありがとう。笑顔で受け取る柚木先輩を想像して、思わず顔がにやけてしまう。すれ違う生徒たちが不信げに眉をひそめるが、知ったことではない。

今の俺の様子を客観的に評価すれば、尻尾を振りまくる犬さながらなんだろうなー。

そんなこんなで、31Dの教室に到着した。

俺は近くにいた女性に、柚木先輩はいますか、と聞くと女性は教室の中へと走っていく。

ほどなくすると、柚木先輩が現れた。

「なに？」

柚木先輩はまだ不機嫌そうで、声が低い。

なんか威圧的な態度だけど、今の俺には、この顔が笑顔になることしか想像できない。

俺は笑顔でプリンを柚木先輩へと差し出す。

だが、柚木先輩はちらつと俺を見て、

「これなに？」

と言った。

「なにつて、限定プリンですけど……」

「ああ、本当に買ってきたんだ。ありがとう」

そう言つと柚木先輩は、俺の手の中からヒョイとプリンを取り上げる。

お礼は言われたけど、特に表情に変化はない。柚木先輩の笑顔が見れなかったことに落ち込んでいると、柚木先輩は彩子、と言つてプリンを投げてしまった。

投げられたプリンは明るそうな女性——彩子って人だろう——が受け取った。

彩子さんはプリンと柚木先輩の顔を見比べて、うれしそうに言う。

「え、これ貰っていいの!？」

柚木先輩はさも当然のように、頷く。

「いいわよ、彩子ってプリン好きでしょ。私、プリンとか甘いもの嫌いな」

そのあと柚木先輩は、俺に見向きもせず席に戻って行き、コンビニ弁当を食べ始めた。

一分くらいそのままにいるも、他の生徒が奇異な視線を向けてくるだけで、柚木先輩は俺に一瞥もくれなかった。

……… いったい、俺がなにをしたんでしょうか？

*

そんなこんなで、今の俺は意気消沈と言う言葉が似合う足取りで教室に戻り、休み時間を棒に振ったわけで。

と、気付けばもう下校時間にさしかかっていた。

俺はつい数時間前の柚木先輩の行動を、俺を試すための愛の鞭だっ！ と、自分でも見苦しい自己暗示（現実逃避とも言っ）を数時間かけて行っていたため、授業は左から右に流れていたりする。

明日必要な教科以外は、鞆にぶち込むと俺は立ち上がり、教室の入り口へと歩を進めた。

教室を後にした俺は、汚い木製のげた箱の前に到着すると、上履

きを中に放り込む。変わりに中から取り出したシューズ（学校の規定で白）を穿き、とんとんとつま先で地面を軽く蹴るとグラウンドへと歩きだした。

いつもは、毎回三回戦敗退の強いかわいからない野球部と、自尊心だけが高い選手が異様に集まるサッカー部が練習しているはずなんだけど、人影は下校者以外は見当たらない。通り魔事件のせいで、部活が中止になっているのだ。

そういえば、と昨日のことを思い出した。あの少女（おっさん？）が通り魔だとか何とか、自分で言ってたような。言ってた人数も合っているし。

まさかね。と半信半疑ながらも、否定しきれない。きっと今の俺は、他人が見たら不振そうに眉をひそめるであろう、引きつった笑みを顔に貼り付けているに違いない。

まあ、少し経つてもその殺人が繰り返されるようなら、違うつてことになるから良いか。いや、あれが通り魔なら、傷つく人間がいなくなつて良いのだけれど。

校門まで行くと、壁に寄りかかっている女性が目に入った。服装はうちの学校指定の紺色をしたブレザー。

それは、こんな気分の人に、幸か不幸か、いや多分、今はあんまり会いたくなかった人なので、不幸なのだろう。それは憧れの柚木先輩だった。

柚木先輩が俺の方を一瞥すると、壁から離れる。柚木先輩は何故か、俺の方へと歩いてきた。

うしろを確認しても、そこには誰もいない。つまり、柚木先輩が歩いてきている方には俺以外はいない。

えーっと、つまり先輩は……？

「祐二」

（予感的中ううっ！！）

この状況は間違いなく、もう遅いじゃない、待ってたんだからイベントッ！

俺のボルテージは最高潮、さきほどの陰鬱気分はどっかに捨てましたよ、先輩！

「なんでございましょうか柚木先輩殿！！」

「なんで敬称をふたつ付けてるか分かんないけど。まあいいわ。暇でしょ、暇よね、暇にしか見えないわね。一緒に帰りましょう」

「はい、もちろん喜んでマドモアゼルッ！」

もう遅いじゃない、待ってたんだからイベントの王道通り、一緒に帰ることになった俺のボルテージはもはや、メーターを振り切ってます！

なんで柚木先輩が待ってたんだとか、なんでいきなり帰ることになったのかなんて、んなモンどうでもいい。一生分の運を使い果たしたんじゃないかと言う幸運満たされた俺は、マドモアゼルとか結婚してないし、とツツコミをいれる柚木先輩のうしろについて行っ

た。

5：嗚呼、悲しきかなパシリ人生（後書き）

更新、遅れてしまいすいません。

いやあ、今（06/8/20）は田舎にいるわけですし、落ちついて書けなかったと言うか、10巻まで買いだめたところ魔術の禁書目録を読みあさってたと言うか、そんな感じです。

さらに、プロットなんて組んでねえ！ と、明らかに途中放棄しそうな理由を忘れてたりで。プロットを少しでも作るために、次回更新は遅れる可能性があるのでご了承ください。

PS：プリンは某アグネスプリンをモデルにしました。

PS2：柚木先輩はスクー・オブ……。ツドの睦月先輩をモデルにしてる節があります。

PS3：ここで言わせてもらつと、更新毎に感想くれたあなたは神です。ものすごい感謝してます。

さあ、とある魔術の禁書目録10巻でも読んでいただけますので、これにて。

……あ、そういえば、今まで一番量が多いな。本編もあとがきも。

6：状況説明（前書き）

ごめんなさい生まれてきてごめんなさい。どうも刹那です。

更新遅れて、マジ申し訳ねえ。田舎から無事、東京に帰宅しております。

しかしあれ、ぼくと魔女式アポカリプスは面白いですよ。早く新刊でないかな。

あ、速攻で書き上げたんで、所々の文章が荒いです。御気を付けを。気になるようでしたら、文句上等でござるよ（むしろ歓迎）。ただし、批評と中傷の違いを理解できる奴だけだぜ。

さあ、青の少年。始まります。

6：状況説明

俺は柚木先輩について歩いていった。

ただいま俺は、幸せオーラ絶賛放出中であります。いや別に、楽しく会話とかをしているわけではないけれど。

しばらくそうして歩いていっていると、柚木先輩は唐突に歩みを止めると、くるりと俺に振り返る。

「どうかしたんですか？」

「愚問。ここがどこか分からないの？」

「質問を質問で返すのはどうかと思いますよ」

柚木先輩と帰れたことで有頂天な俺は、ふだんは絶対に言えない軽口を叩く。そして、言われたままに、ここが何処かを確認するため辺りを見回し、

「——ッ」

息をのんだ。

ここはいつもの通学路。見慣れたコンクリートの道。自販機。つぶれて、中身がこぼれているアルミ缶。

学校に行くときは、気にもとめなかった光景。しかし今ここは、一種の異次元のようにさえ思えた。だってここは、

「わたしがここに來た理由、分かった？」

「え、あ？」

柚木先輩の問いには、答えられなかった。意識が混濁した俺は、意味のない単語を口にするしかできない。

目の焦点さえも、どこにも合わさってはいないのだから。

柚木先輩がふう、とため息をつくのが分かった。

次の瞬間、腹部に衝撃が走った。

「ガッ!？」

突然の衝撃に、俺は体をくの字に曲げる。

と、上から柚木先輩の叱咤が降ってきた。

「改めて見ただけで、錯乱しかけないの。……ほら、いつまでも呻めいてないで、ちゃんと立つ」

「え、あ……」

痛みが引いてきた俺は、柚木先輩に言われた通りに、なんとか体勢を立て直す。

俺は、柚木先輩に殴られたのか？

まだハッキリしない頭で、そんなことを思考する。気づけば、さきほどの気持ち悪さはなくなっていた。

「もう大丈夫？」

「えーっと……多分。あ、いや、大丈夫です。はい」

柚木先輩の眼力により、最後の方は尻すぼみになってしまった。どうやら、柚木先輩は曖昧な言葉が嫌いらしい。

「それじゃあ、わたしの言いたいことも分かってるわね？」

「いえ、まったく」

「……」

「……すみません」

なんか今日は、異様に怖いですよ柚木先輩サン！

途端に柚木先輩は諦めたように、表情を曇らせ、ぼそりとつぶやく。

「……昨日のこと、知りたいでしょう」

今度は、さほど驚かなかった。ここに連れて来られたり、回りくどい言い方を散々言われたのだ。分からない方がおかしい。

「知りたい、です」

それでも何故か緊張してしまう。

でも、なんで俺は素直に聞こうとしているのだろうか。ふつうなら、適当なことを言ってはねのけそうなのにな。

自分自身の言動に首を傾げながらも、柚木先輩の言葉に耳を傾けた。

「長くなるのはわたしも嫌だから、手短にかつ、必要最低限のことだけ話すわよ。あれは一部の人間だけが持つ……力って言えば簡単ね」

「力？」

「そう。力っていうのは、本当に一部の人間しか発生しない。力には種類があって、例外なく力を使うとその人の身体能力が向上するの。あなたの力は、その身体向上を極限まで高めて、打撃戦に特価させた力。わたしの力は、」

柚木先輩が、おもむろに自分のブレザーの背中に手をまわし、服の下に手をかける。と、背中が見えるように服を幕仕上げた。露わになった柚木先輩の背中は、きめ細かく、陳腐な言い回しだと、雪のように白かった。その白い雪の上に正反対の（ブラジャーのだるう）漆黒の紐が浮き上がって――

「って、なにやってんですか!？」

「うるさいわね。恥ずかしいんだから、黙って見てて」

「恥ずかしいなら、やらないでくださいよ! いったいなにやらか

す気――」

俺の言葉は、淡い光によって中断される。

その光は、なんと柚木先輩の背中から発せられていた。

ブラジャーの紐が上にズレると、そこからふたつの白い綿毛が姿を表した。

いや、例えるなら綿毛より羽毛か。

それは、柚木先輩の背中を掻き分けるように現れ、上へ上へと伸びる。ある程度伸びると、途中で折れるように下に伸びていくと、そこでその動きは止まった。

柚木先輩の背中に生えたそれは、人間には消して現れるはずがなく、人間が幾度と無く欲し、しかし人間は機械に落ち着かせることしか出来なかったもの。

白銀の白。羽根。

一応は、なにかがどうなるとかは覚悟していた。しかし、こんなものが出てくるとは、微塵も思っちゃんなかった。

俺が水面で息をする金魚のように口をぱくぱくしているなか、羽根を出した本人は事も無げに説明を再開。

「これがわたしの力。天使の羽根、エンジェルフェザー。クラスは智天使」

柚木先輩は言いたいことだけ言うと、早々に羽根は光の粒子のよ
うに消滅した。羽根の消滅を見届けると、柚木先輩は服を元に戻す。
柚木先輩が服を幕上げたのは、服が破けるからだろうと納得してお
く。

しかし俺は羽根が消えても、まだ呆然としていた。が、また柚木
先輩に殴られるのは、まっぴら御免被る。

そんなわけで、無理やりに脳をフル稼働。そして、なにか気にな
る単語を見つけた。

「あの、クラスって？ それと、えんじえるふえざー？」

「ああつ、だから説明とか嫌いなのよ」

「すみません。」

「クラスは強さをランク付けしたものよ。下から順に、天使↓大天
使↓力天使↓権天使↓主天使↓能天使↓座天使↓智天使↓魔王。分
かった？」

「いや、数、多すぎ……。あれ、なんでみんな天使なのに、最強が
魔王？」

「知らないわよ。魔王みたいに狂暴で、がさつなクソ野郎になるか
らでしょ」

「うわ、魔王、凄い言われよう」

「あんだ、自分が魔王クラスだって理解してる？」

「マジで!？」

「つーわけは、あれですか。俺って、最強人間サイコシヨッカーってことですか？ いや、サイコシヨッカーってなによ。まあいいや。」

「あれ、つまり、俺は柚木先輩より強いと言うわけですか？」

「自惚れると消すわよ」

「すみません、調子こいてました」

柚木先輩怖え。

「言っとくけど、今のあなたじゃ、世界がひっくり返ってようやく、わたしに勝てるレベルよ。それとエンジェルフェザーは、あの羽根。それくらい、理解しなさい。理解力を働かせるように」

「……以後、気をつけます」

「なんだろう。たった一日で、奴隷が定着しちゃった気分だよ。天国のお父さんお母さん！ あ、まだ生きてるか。」

「はい、説明終了。解散。奴隷の分際で手間かけさせないでよ」

あれ、おかしいな。悲しくないのに涙が出るよ。

「そんな俺はアウトオブ眼中な柚木先輩は、とっとと帰って行っちゃった。」

なんだろう……凄く寒いや。

6：状況説明（後書き）

みなさん、毎度ありがとうございます。この度立候補預かったってか、なんのだよ！

今回はタイトル通りです。しかし、説明とか難しいなあ。どうしても、キャラをお笑いにしてしまう。

ちなみに今後やる話の予定は、

派手なドンパチ
後輩登場

の二本です。ウフフ。

7：三年目の片思い（前書き）

なんだか、今までで一番の量になりました。ノリノリになった俺は怖いね。

感想をくれた方は、ありがとうございます。むしろすいません、強制してみたいで（汗）

それでは、第七話『三年目の片思い』どうぞ。

7：三年目の片思い

うーん、あれだ。こうゆう状況はどう対処しようか。

制服と、校章の近くに学年が書かれたもの取り付けられてるのを見た限り、俺より一学年下の後輩にあたる、縁なしメガネをかけた少女。

それが三人の男（見るからに不良）に、塀を背にして囲まれていたら。

なんだろう、何年か前に同じような光景を見た気がする。いわゆるデジャブか？

それはさて置き、朝っぱらから俺の通学路でなにしてやがんだらうね、あいつら。目障り極まりない。

さつきから数人ここを通ったが、全員、触らぬ神に祟り無しといった具合にスルーしていく。ひとりくらい、止めるよ。

しかし、かく言う俺も傍観組。一對三なんて、一方的にやられるに決まっている。昔なら、当然のように助けに行っただらうけど。

そんなことを思考していると、不良のひとりが少女の背後にある塀に手を叩きつけていた。

少女はビクリと体を震わせる。

不良野郎が御下劣極まりない罵詈雑言を撒き散らかす。まったく、

離れているのにハッキリ聞こえるなんて、よっぽど大声なんだな。

そのうち、他のふたりも口を開き、御下劣三重奏が辺り一帯に響いていく。

少女は今にも泣き出しそうに、否。既に目尻には、涙が浮かんでいる。

気づけば、俺は不良に向かっていた。

御託を並べても、結局行っちゃうのが、俺なんだよな。

それに、捨てられた猫みたいに怯える人間を、見捨てられるはずがないだろ。やれやれ、俺は意外と正義感とやらが強いみたいだ。

俺が不良の肩を叩くと、不良達が一斉に俺に振り返った。

「んだゴラ、邪魔してんじゃねえよああ？」

「るっせいんだよ、腐れ外道がつ!!」

俺は不良の頭を掴むなり、自分の膝を顔面に叩きこんだ。ベキリ。鈍い音が響く。……鼻、折っちゃったかな？

案の定、不良は鼻から血をまき散らしながら、地面を転がりまわる。

「んだ、テメエ！ 脳天揺らすぞオラァ！」

不良ふたりが、俺に襲いかかってきた。一対二もキツイが、まあなんとかなるだろ。

片方の不良の攻撃を屈んで避けると、下から肘を鳩尾に打ち込む。これで、ふたりめ。

崩れ落ちていく不良は視界から消去。唯一立っている不良を視界に収める。しかし、反応が遅かった。俺はものの見事に、不良の拳を顔面にもらった。――意外と重いパンチ。

少女が、あつ、と声を上げるが、気にしてはいられない。俺は相手の追撃を紙一重でかわし、股に蹴りをお見舞いした。

最後の不良が地面に膝をつく。

最初に鼻を折られた不良がゆっくり立ち上がると、覚えてろよ！お決まりの負け犬セリフを吐いて、三人共逃げていった。

口の端がヒリヒリする。どうやら、不良の拳で切ったらしい。

「あ、血が！ 大丈夫ですか、羽間先輩！？」

さっきまで不良に襲われていた少女が、ハンカチをスカートのポケットから取り出す。

「いや、平気。唾つけとけば、治るし。それより、そっちは？」

「あ、わ、私は全然平気です！」

何故か少女は顔を真っ赤にして、両手を目の前で振った。なんだ、

熱でもあるのか？

「あ、えっと、本当にありがとうございました！ それじゃあ！」

少女は慌ただしく、走り出した。騒がしい奴だなあ。

「――って、早く行かないと遅刻じゃん！」

携帯で（規則では禁止にされてるけど）時間を確認すると、急いで走り始めた。

あれ、そういえばあいつ、なんで俺の名前を知ってたんだらう？

*

教室に飛び込むのと、チャイムが鳴るのは同時だった。

「ギリギリセーフッ！」

俺は自分の雄志に敬意を称えつつ、自分の席についた。

「ん、その怪我どうしたんだ？」

席に着く前の章が聞いてきた。

「美少女を守るために戦ったのさ。名誉の負傷というやつだ」

「懲りねえなお前は。お人好しすぎんだろ」

章は呆れたように言った。ああ、ちなまに懲りないとは、毎回、

女の子を助けるとかじゃないぞ！ 章は、俺の言葉が冗談と分かっているからこそ、あえてつつこんでいないのだ。我ながら、理解力のある友人を持ったな。

ガラリと、前の引き戸が開けられ、教師が教室へと入ってきた。

*

昼休み。それは飯を貪り喰う時間！

あ、今日は学食のうどん一品無料券を持ってたな。んしゃあ、今日はうどん食うか。などと思いつつ、教室の引き戸を開けると、

「あれ、今朝の」

今朝、不良に絡まれていた少女がそこにいた。

「あ、ど、どうも」

少女は丁寧に、ぺこりとお辞儀をする。

「えっと……今朝も助けてくれてありがとうございます」

「今朝も？」

「え、いや、三年前にも助けていただいたもので」

ん、そうなのか？ じゃあ、あれはマジでデジャブか。

と、少女が困ったように、視線を泳がせていた。

「その、覚えてません、よね」

「あー、ごめん」

「そんな、謝らないでください。勝手に覚えていただけですから…」

そうは言われても、俺の性格上、気になってしまう。

突然、少女がぱんと手を叩いた。

「それで、お礼と言ってはなんですが、お食事御一緒にしませんか？」

「え？」

「あの、だめですか？」

ダメでは、ない。むしろ大歓迎！

つか、俺、女の子に飯に誘われてる？ マジで？

……イヨツシャアアアーっ！！ 生きてて良かった！

ガシッと、彼女の手を掴む。

「行こう。今すぐ行こう！」

手を握ると少女は、ボンッと、効果音になるまで顔を真っ赤に染め上がった。

「は、あああつ！ は、羽間先輩が私の手に……っ！ 田中由里奈、最高の幸せですう」

少女、田中由里奈か？ なんだか、目が痛くなりそうな名前だな。……田中は瞳を輝かせ、半ば昇天しかかっていた。

「って、おい」

親は、田中から離れた手を目の前でぶらぶらと振ってみる。すると、はっと目を見開く。

「あ、す、すいません！」

いや、そんなすまなそうな顔されても、なにに謝ってるか、よく分からないんだけど。

「えっと、じゃあ行くか」

「は、はい！」

俺と田中は、学食に向かい歩き始めた。

そのとき、出端を挫くように、俺の肩をつしろから掴まれた。

いったいなんだ？ 腹が減って、なおかつ出端を挫かれた俺は、不機嫌そうに振り返る。

「——って、柚木先輩」

そこには、柚木先輩が仁王立ちしていた。うわっ、とてつもなく

嫌な予感。

「祐二。ちょっと来なさい」

「え、なんですか？」

「いいから、来なさい」

柚木先輩は俺の腕を強引に掴むと、引きずり出した。

しかもかなりの力で、とても引き剥がせそうではない。

これは昼休み潰れたなど、本能的に察知した俺は、謝るべく田中に視線を送る。

しかし、田中はすでに俺を見てはいなかった。

田中は柚木先輩を見ていた。いや、見ていたの表現するのはおかしい。睨んでいた。その瞳は暗く、とてつもない怒りに燃え、憎悪をたぎらせている。

例えるなら、親の仇でも見るような瞳だった。

俺はなにも言えず、柚木先輩に引きずられて行った。

*

「ちょ、ちよつと先輩！　こんなとこまで連れてきて、いったいなんですか？」

俺は柚木先輩に連れられて、学校の屋上にいた。

屋上と言っても粗末なもので、落下防止用のフェンスが設置されていない箇所もある。

さらに屋上には、鉄骨、鉄筋、アスファルトで作られたレンガ。石膏に、ガラス、エトセトラエトセトラ。いわゆる物置状態だ。しかも、屋上自体、入り口くらいしか作られていないためか、一般生徒は立ち入り禁止になっている（好き好んでくる奴なんていないけど）。

普段は鍵がかかっているんだけど、誰かが屋上に用か何かで来たときにかけ忘れていたらしい。そのため、すんなり入れた。

「祐二。あなた、彼女とどうゆう関係？」

「どうゆうって、ただ、今朝不良から助けた後輩ですけど。ああ、本人が言うに、何年か前にも俺に不良から助けてもらったらしいですよ」

柚木先輩は、そう、とつぶやくと口元に手を当て、なにか考えこめように眉をひそめた。

数秒間の沈黙。

柚木先輩は深刻なことを話すように、重々しく口をひらいた。

「祐二……。多分、彼女は覚醒者よ」

「覚醒者？」

「力を持っている人が、力に覚醒した者のことよ。わたしやあなたのようにね」

と、言うことは、つまり……、

「彼女もわたしたちと、同類よ」

田中も、俺と同じ？

待てよ、いきなりそんなこと言われても、簡単に割り切れるか。だって、今朝会ったばかりの後輩が、俺を襲ったり、俺が持つてるような、あんな暴力的な力を持つているなんて、信じられるか。

そんなの、柚木先輩の勘違いかもしれない。

「言うておくけど、これは确实よ。それに、そんなあからさまに動揺しなくていいわよ」

「え？」

「確かに、わたしも驚いたけど。勘違いしてるようだから言うけど、別に戦ったりするわけじゃないんだし。……相手が仕掛けてこないかぎりね」

どうやら俺の考えは先走り過ぎていたようで、戦うとかはないようだ。そういえば、柚木先輩と俺はそんなことないし。最初に襲われたのがあからさまに堪えてるな。

でも俺は、尻すばみになっていた柚木先輩の言葉を見逃さない。

「仕掛けてこないかぎり、ってどうゆう意味ですか？」

「言葉通りの意味よ。力に覚醒した人間は、力に溺れるのよ。強力な力を手に入れたら、人は誰だって使いたくなるもの。あなたを襲った人のようにね」

「そんな！ 確かに俺はおっさんに襲われた。けど、それだけだ」

俺の言葉を聞いた柚木先輩が目を細めた。

ゾクッ。

背中に悪寒が走った。なんだ、俺は、怖いのか？ 柚木先輩が。

「あなたも例外じゃないのよ？」

柚木先輩は、俺が力に溺れて、人を襲うとでも言いたいのだろうか。ありえない。あの通り魔みたいに人を殺すなんて。

俺は反論を口にしようとして、しかし、口は動かない。それは、柚木先輩には有無を言わせないような威圧感があつたからだ。

これは、なんだ。柚木先輩の目に見られているだけで、酷く居心地が悪い。この目はなんだ？

いや、これは田中と同じような目は。そう、怒りだ。

怒り憎悪憎しみ恨み怨み怨念殺意敵意侮蔑。そのすべてを込められた瞳は、間違いなく俺に向けられていた。

怖い。そんな目で見るな！ 俺をそんな目で見るなッ！

「だったら、先輩だって、覚醒者じゃないかつ！」

「——ッ！？」

柚木先輩が息をのむのが分かった。知ったことではない。俺は罵詈雑言を口にしようと、言葉を紡ぐ。やめろと理性が叫んだ。やめろと心が叫んだ。それさえも、俺の言葉をとめることは出来ない。

「——先輩だって、その力を振るってるんだろ？ いろいろとやっただら？ そうじゃないと、そんなに詳しくないよな。なら、先輩も人を傷つけたんだろ？ 人のこと言えないだろ？ 先輩も同類なんだよ！！」

「——黙れ！！」

柚木先輩が声を荒げて叫ぶ。

それで、俺に体の自由はなくなった。

動かない。指一本、いくら力を込めても、ピクリともしない。さらに、山にでも登っているように、息苦しくなってくる。

心臓の鼓動が早くなる。速く速く速く速く速く速く速く速く速く。おかしなほどに早い鼓動。目の前が蜃気楼のように霞む。しかし、柚木先輩だけは、よく見えた。

目の前の景色に耐えられなくなった俺は、膝を——つかなかった。

いや、つけないの方が正しい。今の俺には、膝をつくことさえ許されなかった。

「立場をわきまえなさい、奴隷風情が！」

怒りに顔を歪ませた柚木先輩が吐き捨てるように言った。

「お前になにがわかる？ わからないだろう？なのに、一丁前に喚くな！！」

柚木先輩は、怒りに震える拳を前に突き出す。突き出した拳を広げ、またゆっくりと手を閉じていく。

それに同調するように、俺の喉が絞められていく。

ガ——ッ！

しかし、俺の呻きが外に漏れることはない。俺には、苦しむ許可さえ与えられないのか。

「奴隷如き、主ならすぐに殺せるんだ。でないと、お前なんかにキスするはずない。まったく、わたしの奴隷条件がキスだとは、まったく嘆かわしい。あのクソジジイと同じように、心臓を握り潰すだったら、清々しかったのに」

柚木先輩の声は鼓膜を伝わらずに、直接脳に響いた。そのため、一字一句違えずに俺に伝わった。

今の俺には、よくわからなかった。すべて聞き取れたのに、意味が理解出来なかった。いや、理解したくなかった。

そりゃあ、いきなりキスされるなんて、虫が良すぎるとは思ったよ。なにか裏があるとは、思っていた。それでも、そんなことないと思っていたかった。

けど、俺の考えは幻想だった。

言ってる意味は、それ以外はうまく理解は出来なかった。けど分かるのは、俺をこんなに苦しめるために、キスをしたとゆう事実だ。

「お前、あのジジイを殺したとき、楽しかっただろ？ 弱かったときは、落胆しただろう？ それがお前の本性だよ、小汚い殺人快楽者がっ！！」

「違うッ！！」

叫んだ。しかし、それは俺ではなかった。もちろん柚木先輩ではない。第三者。でも、俺はその声に聞き覚えがあった。いや、数分前に聞いたばかりだ。

——田中？

屋上のドア、つまりすぐそこで、田中由里奈の声がした。目の動きさえも自由に出来ない俺は、声でそれを判断するしかない。

その判断は正しかったようで、柚木先輩の顔色が変わった。

柚木先輩は、上辺だけと誰もがわかる、取り繕った冷静そうな顔を田中に向ける。

「なにか用、田中さん？　ここは一般生徒、立ち入り禁止……」

「羽間先輩をこちら側に巻き込まないでください！」

田中は柚木先輩の言葉をかき消すように叫んだ。まるで、余計なことはいらなくても言っているように。

それにしても、田中はなんでそんなに必死になっているんだろう？　酸素不足で朦朧となった意識では、答えを導き出すことはできない。

「こちら側？　何言ってるのあなた。力を持った者同士の戦いのことを言ってるの？　バカね。力を持った者、覚醒した者が戦うのは必然よ。今まで、こいつが襲われなかったのが不思議なのよ。それとも、誰かがこいつの周りに来た覚醒者を殺してたのかな？」

田中が驚いたように――音でしか分からないが、後ずさった。その様子を見た柚木先輩は、愉快そうに唇を歪ませる。

「でもね、もうこいつにはカタギの生活はできないわよ。なんたつて、わたしに忠実な奴隷だもの」

「あなたが消えれば、済むことです！」

その言葉とほぼ同時に、田中が俺の視界に侵入した。田中は拳を作り、柚木先輩に向けて突き出す。だが、柚木先輩は腕を下げて、半歩うしろに下がるだけで、それをかわした。

腕を下げたからなのか、俺の首に掛かっていた力は無くなった。まだ根本的な自由は奪われているのか、咳き込むことはできないが、

こればかりは感謝だ。

今度は柚木先輩が脚を持ち上げて、膝で田中の腹部を狙う。拳を避けられた不安定は姿勢では、その攻撃をかわすことはもとより、防ぐことさえできない。

田中の腹部に柚木先輩の膝が——直撃しなかった。

膝は虚しく宙をさ迷う。ただ避けられただけなら、柚木先輩も反撃に移れただろう。だが、その避けかたは普通ではなかった。

柚木先輩の目の前から、田中は姿を消していた。そう田中は唐突に、その場から消えたのだ。

でも、俺からは見えていた。田中が消えた瞬間、柚木先輩の背後に現れた田中を。田中の手に光る白銀の刃を。

柚木先輩が背後に現れた気配に気づき、急いで振り返る。しかし、それは遅すぎた。

田中は刃を迷いなく振り下ろす。

赤い鮮血が宙を舞う。ぴちゃりと、コンクリート剥き出しの地面に鮮血が広がった。

7：三年目の片思い（後書き）

しかし、あれだね。スクライドは面白いね。ビデオ借りて3巻まで見たけど。

改めてスクライドの良さを思い知ったね。かなみがかわいすぎる。ゆかりんボイスが。毎回、OPを少し変える演出がにくい！

「シエルブリットオオオオッ！！」

……え、あとがきじゃないじゃん？ いや、それが俺クオリティーなんです。

鋼殻のレギオスはふつうの作品でしたね。つまらなくはないですって、ああ、すいません調子乗ってました（汗）

それでは、次回更新に（出来れば）期待してください。

PS・コードギアスは必見だね。

PS2・なんか祐二が置いてけぼり喰らってるよ。脱主人公！

8：戦闘開始（前書き）

お久しぶりーふ（爆）

……いや、某あやかしをやってたんです。

さて、まだ見てくれてる方はいったい何人でしょうか。

今回はもう適当になりました、後半。すいません。

そしてこれからは、ギャグ&シリアスで。

それでは、呆れずに最後までおつきあいください。

8：戦闘開始

俺の見えない拘束が無くなる。拘束が解けるなり、激しくせき込む。

俺は一瞬前の光景を思い出し、苦しいのを推して頭を上げた。

ひらりと、赤い血と、その赤い血に塗れた白い羽がコンクリート剥き出しの地面に落ちる。

田中の振り下ろした剣は、柚木先輩の体には届かず、柚木先輩の生み出したふたつの羽根によって、受け止められていた。ただし、受け止めたと言っても、切れていないわけではなく、羽根に刀身の半分ほどが入り込んでいた。

「この、大天使風情があっ!!」

柚木先輩が羽根を大きく羽ばたかせると、地面から足が五十センチほど浮き、一回転。田中の剣を羽根からはじき出す。

羽根から抜けた剣をよく見てみると、田中が持っていた剣は、あのおっさんと同じ物だった。ただ、あの剣の美しさが田中には合っていると言うのが、最大の違いだろう。

「——はあっ!」

柚木先輩は羽根を動かすと、体が素早く横に回転。遠心力とゆう力を与えられた柚木先輩の足は、避ける間もなく、足の裏が田中の腹部にめり込んだ。

「あガッ」

その圧倒的力に、田中の足が地を離れ、吹き飛んだ。鉄骨に背中から直撃し、鉄骨が崩れる壮絶な轟音と共に、土煙がそこを隠すように舞い上がった。

「——先輩ッ！」

思わず俺は、宙に浮く柚木先輩に叫んでいた。

「……………」

柚木先輩は地に舞い降りると、無言で土煙の上がるそこを睨むように見ていた。ぐらりと、土煙の中でナニかが揺らめいた。言うまでもなく人型。さきほど弾き飛ばされた田中だ。

良かった無事が、と俺が安堵するのと、田中が柚木先輩の背後に現れたのは同時。

有り得ないことに、少し離れたここまでひゅんとゆう、田中が剣を振るった風切り音が届いた。

その凶刃、と言っては失礼だとは思うが、いまはそんなことに配慮してはいられない。凶刃は柚木先輩の首を刈ろうと迫る。

「あっ」

俺が何かを言うのは間にあわない。

しかし俺のそれは、杞憂に終わった。柚木先輩は羽根で剣を受け止めていた。しかも、今度は羽根が切れることさえなかった。

俺は柚木先輩が無事なことに安堵する。——と、俺は内心首を傾げた。

なんで俺は柚木先輩の心配をしているのだろう？ そんなの決まっている。好きだからだ。

……でも、柚木先輩は、

俺を殺そうとした。

侮蔑。

憎悪。

嘲笑。

敵意。

殺意。

阻害。

様々なマイナスの感情をぶつけられた。俺を踏みにじった。

だけど、俺は怒りなどまるで感じていなかった。

むしろ、俺は嬉しかった。

柚木先輩の、勝手に片思いをしていた相手の感情を垣間見る事ができたから。

ただそれが、踏みにじるような罵詈雑言なのが、少し悲しかった。嬉しい、悲しい、二律背反の感情。そのアンビバレンスに気を取られてるうちに、ふたりの姿が消えていた。

いや、屋上にいるのは感覚的に分かっている。そして、戦闘を起こそうとしている。

「二人とも止めろっ！」

果たして俺の言葉は届いたのだろうか。

反応はない。

また叫ぼうとした矢先、荒だたく階段を駆け上る靴音が耳に届いた。

騒ぎを聞きつけてきた教師だろうか。だとしたら、ヤバイ。説明するまでもなくヤバイ。

俺の横にある屋上唯一の扉へ、靴音が近づく。考える余地はない。

俺は扉に体重を預けて、外開きの扉を押さえようとする。

しかし、駆けつけて扉の中に駆けつけたであろう教師群は、崩し

た物で塞がっているか、誰かが押さえてる（正解）と思ったらしい。教師のせーのっ、と言葉の次に激しい衝撃が扉に加わった。

「っ……！」

ここは、なんとしても死守しなければならない。そう決心してしまった俺は、扉の重石に俺の意地を加えた。羽間先輩が叫んだ。けど、私はそれに答えない。答えたいけど、声を出したらあの鬼畜女……柚木陽子に居場所がバレてしまう。私はいま、鉄骨や廃材の陰に身を潜めているのだ。

私はなんとしても、あれを殺さなければいけない。羽間先輩は戦ってほしくはない。何故かって？ 中学時代から、かれこれ三年間も片思いしてる相手に傷ついてほしくないから。

たいていこんな力を手に入れたら、恐怖するか、力を酷使したくなるか、だ。他の覚醒者に聞いた話、覚醒者が覚醒者を奴隷して手足のように使うこともあるらしい。

覚醒者になってしまったら、まともに生活は送れない。

たいていは力を使わなければ、バレはしないけど、いろいろと敏感なものにはバレてしまう。それで私も襲われたときがあった。

……相手は殺してしまった。圧倒的な恐怖。なんでこんなことになっちゃったのか、そんなことばかり考えていた。しかも、覚醒者通しの戦いで負けると肉体は消失するようだった。私は怖くてふさぎ込んだ。

そんなとき、茫然自失としていた私を数人の不良から助けてくれ

たのが、羽間先輩だった。不良を倒した羽間先輩は、倒せたこと自体に驚いていたようだった。

そのとき私が感じたのは、この人も私みたいな人外の力を持っているという事。何故分かったと言われれば、あまりに羽間先輩の垂れ流す力が強力だったからで。私はまたか、と憤怒を煮えたぎらせていたが、羽間先輩は何もせずに立ち去った。

羽間先輩が同じ中学だと分かった私は、羽間先輩を監視した。

しかし、羽間先輩はふつうに生活していた。狂った何かもまったく。

そんなときに、羽間先輩を付け狙う覚醒者を見つけた。放置しようと思った。

……私の足下には消えていく覚醒者がひとり。

羽間先輩を見捨てるなんて、私には出来なかった。

——きっと、この頃から私は羽根先輩に恋していたのだろう。

それから私は、羽間先輩を付け狙う覚醒者を屠った。私よりランクが高い覚醒者もいたが、みな羽間先輩に気を取られて、私に不覚を取っていった。

重傷を負うこともあったけど、私は羽間先輩のための怪我なら、気になんてならなかった。

そしてこんな女に、愛おしい羽間先輩を言いなりになんてさせな

い！

羽間先輩が柚木を好きなのは、知っている。だけど、嫌われるのは怖くない。だから、私は柚木を殺す。

私は白銀の剣の柄を両手で、そっと包む。

きっと私の能力。半径十メートル内の瞬間移動、ジャンプも看破されている。ただでさえ、力の消費が激しくて乱発出来ないのに。

でも、大丈夫。羽間先輩を思うだけで溢れる力がある。きっと負けない。

それより、メガネが壊れたりしないように。これの方が気がかりだった。

*

ガンガンと扉を叩く音が、屋上に響く。きっと、羽間先輩が止めてくれているに違いない。ありがとうございます。

その轟音はゴングのように私を奮い立たせる。羽間先輩、いつもありがとうございます。いつも陰ながら助けてもらってます。先輩は気づいていていませんよね。私はこれから、あなたに嫌われます。ごめんなさい。

柚木が半径十メートル以内にいるのを確認。ジャンプ。

一瞬、自分の目の前が黒になり、映画フィルムが入れ替わるように、私の目の前には柚木の背中があった。

「ハッ！」

迷わず、剣を振り下ろす。

予想していたとはいえ、こつもあつさり羽根に防がれると厭な気分だ。

「瞬間移動して、剣戟するしか能の無い莫迦ねッ！」

柚木がこちらに振り返るように半回転。私の体は羽根に弾き飛ばされる。が、地面に足をつけ、すぐさま臨戦態勢へ。

時間にして、一秒。だけど、それでもこれには遅いつ！

柚木の羽根から、純白の羽が無数に射出される。

一枚の羽が腕の肉を削った。

羽は次々と襲いくる。剣でも捌ききれない。羽は次々次々次々次々次々次々次々次々次々と切りが無い。

ついに私は、コンクリートの地面へ膝をつく。

「ほらほらほらほら！ どうしたの？ 弱すぎない。あなたたちみたいな芋虫には地べたがお似合いね！」

羽が降り注ぐなか、私は立ち上がった。柚木の顔が驚愕に歪む。

そんな些細なことはいい。だが、たちつてのなんだ？ きつと意

識せずに言ったのだろうけど、それには羽間先輩が加わっているに
違いない。

私の逆鱗に触れるには、お釣りがくるくらい充分過ぎた。

「羽間先輩を――」

いまの私には、羽なんかで止まりはしない。いくら斬れても、所
詮それは羽でしたかないから。

「愚弄するなッ！」

地面を踏み抜く勢いで、コンクリート剥き出しな地面を蹴る。

刀は水平に。

懐に飛び込み。

「はぁ！」

刃を一閃。

急遽攻撃を止めた羽根は身を守るために、柚木を覆う。

――なら、それごと斬るまで。

手には肉を深く切り裂く感触。

「あがッ！……そんな、コレごと斬るなんて、大天使風情が……
！」

膝をついた柚木が恨みがましそうに私を睨むが、良心なんて微塵も痛まなかった。

でも、こちらは無事ではすまなかった。当たり前前に、体中に裂傷が出来、血を流している。けして、浅くないのも二、三ほどあり、剣は後一撃しか振るえない。ジャンプだって、いま使用すると、取り返しがつかない事態に発展する可能性がある。

ただし、相手だって後一撃、よくて二撃が限度だろう。相手の能力はなにか知らないが、気にすることはない。

いまは、最後の二撃だけを気にしていればいい。

*

踏ん張る足や、腕、背中が痺れてきた。

教師たちはスクラムを組んで、なんども扉に体当たりを喰らわせて開けようとするからだ。流石に、大人相手にひとりじゃ限界がある。ここまで持ったのだって、奇跡に近い。

それに、柚木先輩と田中の争いもピークに達したらしい。そろそろを決着をつける頃だ。

それはつまり、どちらがどうにかなくなってしまおうと言うことだ。俺としては、それを断固阻止したい。

でも、どうする？　いまの俺ではどうにも出来ない。

思考する。……が、すぐに止めた。あまりに無駄。考えては時間がかかる。

俺は小難しいことなんて、考えない人間だろう？

「つべこべ言わずに、体を動かせ——ッ！」

信じられない力で、鉄筋を片手で掴むと、扉の前に置く。なんで、鉄筋なんかを持ち上げられたのかは、この際どうでもいい。これで、扉は開かない。

俺は扉に踵を返すと、感覚的に分かった二人のいる場所へと、走り出した。

走る。邪魔な物は避ける、避ける必要もない物は手で脇へとどかす。目指すはただ一点のみ。

数秒走ると、意外と早く二人を視界に入れた。距離にして、およそ五メートル。

「二人ともストオオッブツ——！」

この声は確かに二人へ届いた。田中がピクリと反応した。

しかし、田中も柚木先輩も攻撃のモーションに移行している。自分たちの力では、もはや止まらないだろう。止めようと、思うならだけど。

そうゆうときは、第三者、つまりいまは俺が止めるしかない。

それに問題はない。剣は腕を掴めばなんとかなる。羽根は……あれが何をどうするか分からないけど、なんとかなると思う。ただ肝心なことに、

五メートルと言う幅を縮めることができない。いや、出来ないことはないのかも知れない。だが、届いたところで、止めるほどの余裕はない。

それにふたりは——速い！

間に合わないのは明白。

——だけど、知ったことかッ！

「おおおおおッ！！」

雄叫びと共に、俺は地面を粉々に打ち抜く。

そして、コンクリート剥き出しの地面をふたりに向け、疾駆する。

瞬間、世界の音が耳から消えた。

突然の襲来に対応出来ないふたり。

ガキンと言う、左腕の黒い籠手に受け止められた両刃の剣。

眼前で俺の拳が止まって、硬直する柚木先輩。

——青く蒼い長髪。

——黒一色の黒の鎧、ブラックメイル。

「羽間、先輩……？」

田中は呆然とした様子で、剣を力なく下げる。

剣を下げた田中を見て、ホッと一息。

拳を下ろすと、態勢を直して、柚木先輩を見る。

狼狽気味だった柚木先輩は、すぐに感情を露わにした。

「退け！」

「厭です」

俺の答えがよほど予想外だったのだろう。柚木先輩は一瞬、言葉を失う。が、すぐに気を持ち直した。

「退けと言っている！」

「厭です」

「退け」

冷たい声だった。ただし、それだけ。

「厭です」

またも、ありえないという表情を浮かべる。

「そんな馬鹿な……。主の命令が、効かない……。？」

と、柚木先輩はボソツと、つぶやくように言った。

「まあ、いい。兎に角、そこから退け。邪魔だ」

「断固、それを拒否します」

「邪魔だと言っている。殺すぞ？」

「出来るのなら御勝手に」

自然とそんな言葉が口から漏れた。

あれ、俺ってこんなに自信過剰だったか。

だけどその言葉は、とても自然な言葉のように思えた。

柚木先輩は、ちつ、と舌打ちする。構えを解くかと思ったら、喧嘩腰のまま。

「……柚木先輩」

「黙れ！」

「構えを解いてください」

「貴様に言われる筋合いはない！」

「だぁーっ もう!」

ガシッと柚木先輩の頭を掴む。

「ふんっ」

頭突き。

「はうっ」

柚木先輩が可愛い声を発すると、額を押さえ、膝をつく。

かなり痛いようで、なかなか立ち直らない。そんなに痛くしたかな……。

心配してた矢先、柚木先輩が頭を上げた。目尻に涙を浮かべつつ、

「なにをする!」 すつと息を吸い込む。

「どーしたも、こーしたもない! 自分がなにをしたのか、分かってんのか? 自分中心に世界が回ってるとでも思ってたんですか、あぁ!」

いきなりまくし立てられ、目を丸くした。柚木先輩はの顔はすぐさま真っ赤に染め上がり、怒鳴ろうとする。俺は柚木先輩の罵声をかき消すように叫ぶ。

「調子に乗って、喚ぐな騒ぐな粹がるな! なんだか知らないが、世界中の不幸はわたしが背負ってますみたいな面しやがって」

柚木先輩の顔が憤怒のものへと変わる。

「五月蠅い！ 知ったような口を――」

「知らなかったらどうしたよ。アンタに気づかって生きていけるほど、世の中甘かねえんだよっ！」

だけど気にしない。今は物凄くイラついている。怒鳴るついでにストレスを発散してやる。

「何時までも馬鹿やってんなよ。そんなのは、俺の好きな柚木陽子じゃないッ――」

……あ。

なんだか、ヤバいこと言った気がする。

よ、よしっ。なんて言ったか、整理しよう。

……はい。私め羽間祐二は、柚木先輩に告白しましてでございませう。

ノオオオオオオオオツ！！

こんなロマンティックとはかけ離れた状況で、恥ずかし過ぎる台詞を言ってしまったっ！

恐る恐る柚木先輩を見る。

口を半開きにし、目を白黒させていた。数秒で再起動完了。

自らの美しい顔を柚木先輩は下に向けた。そのせいで、その美貌はコンクリートが独り占め。俺には、後頭部しか見えない。

いや、正確に言う。重力に従い下へと髪が落ちたために見える首筋。自然と鼓動が高鳴る。

「……てる」

そちらに気を取られていた俺は、うつかりその言葉を聞き逃していた。

もう一度聞き直す。すると、柚木先輩は少し紅潮した顔を上げた。

「知ってたって、言ってるの!」

……は？

「ナンダッテエエエエツツ!!」

大・胆・事・実!

「そのことを知ってて、先輩を利用しようとしてたんですね!」?

背後にいた田中が、俺の背中からひよっこり顔を出す。柚木先輩に怒り心頭と言った具合に憤怒と侮蔑の表情を浮かべている。

……わざわざ、俺の背中に体を任せながら言う必要はないと思うんだけどな。

眉をひそめて、気まずそうに視線を逸らす柚木先輩の声は、消え入りそうに小さい。それでいて、その声は喧騒の中でも聞き逃さないようにハッキリしていた。

「仕方ないでしょう。……こつちも事情があるのよ」

「あなたの事情なんて、知ったことじゃありませんよッ！」

その言葉が気に障ったらしい。田中が烈火の如く怒る。とりあえず、耳元で怒鳴るのは止めてくれないか。

ふう、俺は軽く息をつくと、田中の目の前で軽く手を振る。

「いいって。そんなに怒鳴んなくても」

「でも！」

「だからいいって。柚木先輩にも何か理由があるはずだろ？」

無かったら酷いけど。

「……じゃあ、柚木先輩。理由、言ってもらえますか」

「……………」

「先輩？」

「ごめん。話せない」

「アナタって人は……」

「なら良いです」

「羽間先輩!？」

「良いんだよ」

——話せないってことは、話せるようなことじゃないってことだ。
わざわざ聞くものじゃない。

「ま、それに、柚木先輩も落ち着いたしな」

さて、これからの問題は、どうやって教師たちをやり過ごすかだ。

8：戦闘開始（後書き）

いかがだったでしょうか、この適当ぶり。

この作品は、20部くらいで完結しますね。

9：楽しくも苦しい日常（前書き）

1ヶ月以上放置してました（爆）

終わってもいないのに新連載物を考えだして、なおかつ半角15000文字くらい書きちゃったからですすいません！！

今回の話は微妙にハーレムな日常と非日常へのいざないってかんじで。固有名詞が間違ってたらつっこんでください。今回はいつも以上に推敲してないので（汗）

9：楽しくも苦しい日常

あれから気づけば1ヶ月の四分の一、まあ一週間が経過したわけである。

……その一週間は無限地獄を味わっていた気分だったけれど。

「……………」

「……………」

「……………」

その無限地獄は絶賛続行中なわけで。

「………… 田中さん、なんでついてくるのかしら？」

「自意識過剰もいいところですね、柚木先輩。私は羽間先輩について行ってるんですよ」

「何故かしらね。あなたの家は祐二の家より、学校に近い位置にあるはずだけど？」

「それは私の勝手だと思いますよ？ それと羽間先輩を呼び捨てにするなど何度言えば分かるんですかこの雌狐」

「……………」

「……………」

バチバチバチィ。

…… 难道でしょうか、この状況。

一週間前から、毎日のようにこんな状況になっているわけだけど。

あの日、柚木先輩の翅^{はね}で屋上から脱した翌日から、毎日ふたりが自宅前で睨み合っていたのだ。

柚木先輩曰わく、俺の監視。

田中曰わく、その柚木先輩の監視。なんで俺が監視されなきゃ行けないのかは、まだ話してもらってはいない。俺が訳を聞かないと言った以上、柚木先輩にそのことは聞けない。田中が柚木先輩を監視と言うのは、田中はこの数日で優しい奴だとわかった。だから、この間みたいなことを起こしたくないのだろうと思う。

そのぶんはまったくもって、問題ないんだけど、

「……………」

「……………」

毎朝、俺を挟んで睨み合つのはなんでだ？

そんなこんなで校門につき、やっと「朝の地獄」を乗り越えられた。

…… あくまで朝の、なんだけど。

*

チャイムの音がなり、全校生徒に昼休みが訪れたことを告げた。

そう、無限地獄‘昼の部’がもうすぐ幕開けるのだ。

「鬱だ……」

「美人と美少女に毎日ひっぱりだこな親友を見て、鬱だ……」

真横に立っていた章が、俺並に陰鬱な声を吐いた。

「真似んなアホ」

「誰がアホだよ。つーか、俺は鬱なんて言うお前がアホじゃないかと思うんだが」

そりゃあ、端から見ればハーレムのように写るだろうさ。俺が章の立場だったら、同じようなことを思っただろうと言う悲しい自信もある。

この一週間を振り返りため息をつく、外から聞き覚えのありまくる足音がふたつ近づいてきた。

……ついに足音まで区別できるようになったか俺。

地獄のカウントダウンまで後、五、四、三、二、一、

スパーンッ！

「祐ニイイーーっ」

「羽間先ばああいつ！」

ああ、ふたりとも入り口で睨み合わないでくれえ……。

耳をそばだてなくても周りのひそひそ声が頭にはいつてきた。

「今日で八日目だね……」

「あの羽間くんが女の人をいきなりふたりねえ」

「三角関係のもつれか」

「羨ましいな羽間の野郎オ……」

もう嫌になってきたので、脳から声をシャットアウトすることにした。

*

昼の部のことは、話さないことにしよう。いやむしろもう、忘れたい！

それでも昼の部のだいたいは話しておこう。

一週間前までは、もっぱら昼飯は章と男通し侘びしく食べていた。けど、最近は強制的に柚木先輩と田中と一緒に食べることになっている。

で、今日飯を食べる所は、学生のデートスポット花壇側のベンチだった。なんでデートスポットなんかで食うことになったかは、まったくもってわからなかったけど。

まあこんな綺麗なところなら、ふたりも喧嘩しないかと思ったら、期待に反して見事に喧嘩勃発。

柚木先輩に焼きそばパンを口にねじ込まれ、田中には手作り弁当を押し込まれた。田中、手作りはものすごいありがたいんだけど、俺的には丁寧に食わしてくれることを推奨する。

そのあとは殴り合いになって、校長が育ててる花壇を荒らしまくったりと……。

もう話たくないから、ここで切り上げるが、こんなのが繰り返されたわけだ。はつきり言って、毎日心労が溜まりまくって死にそうです。

そして、放課後のチャイムがなると同時に、自由への飛翔のためにげた箱へと駆け出した。

*

柚木陽子は同級生との雑談も早々に、教科書類をカバンに詰めていた。

彼女がここ最近、特に祐二を監視するようになったのにはわけがある。田中は……まあ、祐二に何か変なことをしないかを監視しているのだろう。柚木のそれは田中とは理由が違う。

それは奴隷契約の一時的無効化にある。

覚醒者にはある一定条件をクリアする——柚木の場合はキスで魔力を送り込む——と、おなじ覚醒者を奴隷。つまり自らの意のままにすることができる。これには得手不得手などの例外があるものの、奴隷化させた者に対するある能力だけは皆公使できる。

奴隷化した者の身体能力制御。

これは主となつた覚醒者が奴隷化した覚醒者にならず使用することができる。内容は文のごとく、身体の制御。

たとえば、身体を自由を利かせなくする。臓器の機能に以上を起こす。それはつまり、殺すことさえ可能である。

その絶対的制御を祐二ははねのけた。これは精神、肉体の問題を超越したことだ。

やはり、ルシファアの力が身体を浸食仕出したのだろうか？

バックに教科書を詰め終えた柚木は、思考を巡らせつつ教室の引き戸に手をかけ、

「——ッ!？」

弾かれたように背後に振り返った。

そこはいつもの教室の風景と、談笑する生徒たちしかない。柚木が感じた気配は遙か彼方。それは同族の、覚醒者の匂い。

気が緩みすぎていた。柚木は奥歯をかみしめる。

祐二の力にばかり目がいき、さらに重要なことを見誤っていたと気づく。

一週間なにも無かったのは、まさしく奇跡だった。最強クラスの力が覚醒したら、勘のいい者は気づいて当然なのだ。

それに、ルシファーが再覚醒した今、あのサタンがなにもしないわけがないのだから。

自分の失敗を悔いるより先に、柚木は祐二の教室へと走り出した。

窓の外には、嫌な曇り空が広がっていた。

*

鼻歌まじりに、俺は帰り道を進む。

ついに俺は自由への飛翔を果たしたのだ。

柚木先輩と田中には悪いが、ストレスが溜まりまくって正直ヤバかったからな。こうするしかない。

さて、と。この一週間は帰宅時に心労が溜まって外出する気力は残らなかったけど、今は不思議と満ち溢れている。

俺はこの熱いパトスの発散方法を考えると、久々に悪友の章とカラオケに行くと言う結論に達した。無論、男ふたり侘びしく……なんてのは御免被りたいが、俺には柚木先輩と言うマイアイドルがいる。贅沢は言えない。

さつさく章に連絡をとろうと、ズボンのポケットに手を突っ込み、携帯を取り出そうとする。

ポツリと水滴が頬に落ちた。

ついに地面にも雨粒が落ち始めたことで、雨でも降り出したか、と言う結論に達し、眉をひそめる。

これはまず一旦帰らないとな。俺が鞆を傘代わりに走り出そうとしたとき、ふと違和感を見つけた。

雨粒の数滴の色が赤黒いのだ。

気づけば、最初に雨粒が落ちた頬が熱い。俺は頬を手の甲で抜くった。

ねとりとまとわりつく、気持ち悪い感触。

拭った手の甲に紅がまとわりついてた。

これは――

俺はその酷く遅い思考がなにかにたどり着く前に、頭上を見上げていた。

電柱の上、赤黒い塊があった。それはなんなのか、遠目からはわからなかった。いつもなら、わからないはずだった。

しかし、不思議と鋭敏になった視力はそれを高画質なカメラのよ

うに、それを捉えていた。

肩まで伸びた染められた金髪。軽装のタンクトップにジーンズ。服装を見る限り、それは俺とおなじ年くらいの女子だったのだろう。

しかし、

露出した白い眼球。

不自然に折れ曲がった手足。

めくれあがった腹部。

それは、肉の塊としか言えなかった。

「まっじーなあコイツ。常人以下の魔力しかねえーし、肉もマズいしつまらねえし。所詮、一般人はこんなものかあ」

それを抱えた男が言った。

「——でも、覚醒者はどれも格別だよなあ」

男は、ピアスをいくつも空けた舌をだらんと力なく垂らした。

9：楽しくも苦しい日常（後書き）

どうだったでしょうか？

今回はルシファー、サタン、再覚醒、その他もろもろ。複線を仕込みました。

今回は急展開と言いか、微妙な話でした。

今回は祐二がまともにひとりで戦う話です。期待してくれてたら重畳。

……この調子でいくと、田中告白&祐二との合体技の話がボツになりそうで怖い刹那でした（笑）

10：豪雨の対決

柚木が祐二の教室にたどり着いた時には、すでに探し人の姿はなかった。

最悪の状況が浮かび、それをすぐに打ち消す。まずは祐二を探すことを優先する。

教室の中には、祐二とよく仲良さそうに会話していた瀬川章の姿があった。

柚木は迷わず教室の中に踏み込み、章の前へ移動した。

「……へ？」

突然の登場に章が戸惑っている間に、柚木が口を開いた。

「羽間祐二がどこに行ったかわかる？」

「え……もう帰りましたけど」

「ありがとう」

素っ気なく言葉を返すと身を翻し、さきほど入ってきた扉へと向かった。

そこで血相を変えた田中がちょうど到着した。田中も気配を感じたらしい。

「先輩！ 羽間先輩は……」

「祐二は帰ったそうよ。……早く追っわよ」

頷きかえす田中を見ずに、柚木は駆け出した。

*

頭上には異様な物体があった。

物体と形容詞したのは、俺がそれを人と認識したくないからかもしれない。

なのに、異様な物体を抱えた男は笑っていた。

もうそれには用がないと、抱えた物体から手を離れた。支えを失った物体は重力に逆らえずに落下する。それは僅か一秒にも満たなかった。

地面に鈍い音とともに激突したそれは、血を辺り一面にまき散らした。

衝撃で潰れたそれは、同じく潰れた赤いゼリーを連想させた。その物体からは、生物が腐ったような腐臭が漂い、俺は口を手で覆う。

——理解したくない。

目の前の光景を、

それを違うなにかだと認識しようとして、思考を閉ざす。だが、

それは否応なく俺の視界に入り込んだ。

折れてひしゃげた人の腕。

「――アアアアアアアッ！！」

それは死体だった。無残に引きちぎられた死体だった。もはや原型を保てないほどに破壊しつくされたそれは、元は人間であるはずの者。

けたたましい嘲笑だけが、鼓膜をつんざく。

気持ち悪く、ねちっこい笑い声が俺の肌に雨と一緒にまとわりつく。

吐き気をこらえながら後進すると、どこかの家の塀に背中がついた。

「ヒヤアアアハアッ！　いいねえ、その恐怖の顔！　愉快痛快愉しいねえ」

その声と地面を叩く雨音だけが俺の耳に届く。

「いつとくが、助けあ来ねえぜえ？　助けどころか、人っ子一人としてなあ。オレ様の雨ちゃんのお陰でよお。残虐ショーを邪魔されたかねえんでよおお」

間延びした声が俺の真っ白な思考に恐怖だけを刷り込んでいく。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！

ピシヤリと雨を弾く音がしたと思ったら、あの男が音の発信源にたっていた。

「オレ様をよお、ただの力天使だともうなよう？」

口が裂けているのではないかと思うほど、俺の口は狐を描いた。

ブカブカのシャツに、地面につくほど長い裾のジーパンを穿いた男は腕を力なく垂らす。長い腕と獲物を狙うようにひかる目は爬虫類のそれだった。

「ヒイイイヤアアウツ！！」

奇声を発した男が地面を蹴り、水が地面から弾かれる。その速度はまるで榴弾砲のようだった。そこから繰り出された拳を俺が避けたのは、奇跡と言っしかない。

拳は人体ではありえない力で背後の堀に突き刺さる。裂けた俺の頬は、寧ろ抉れたと言い換えた方がいいほどの傷がついていた。

「ッ！」

迷わずに俺はそこから飛び退き、男と五メートル以上距離をあける。だが正直、五メートルなんて瞬きひとつの間に無くなりそうだ。

「おいおい、もっと愉しませろよ、なあ！？」

男が塀から腕を抜くと、また俺の方へ突撃してきた。五メートルの距離は、やはり瞬きひとつの間に露ときした。

俺の視界には、本来捉えられるはずのない速度で繰り出される拳が目にはいった。

狙っているのは顔面だと理解した瞬間、本来脳からの命令が腕に届く速度を超越して腕が動いた。交差した両腕に、男の拳がぶち当たる。俺は衝撃を和らげるために自然と地面を蹴っていた。果たしてその効果があったかは分からないが。

身体は引つ張られるように吹き飛ばされ、数十メートル先の地面を転がった。

「ガ、ハッ」

胸に溜まった息を外に吐き出す。

腕は——まだ動いた。塀を破壊する拳だ。腕を破壊するなんて、赤子の手を捻るくらいに簡単なはずだろうと思う。

が、よく見ると腕は黒かった。視界の端に青く発光する長い髪も存在した。

いつの間にか、俺の身体は強固な漆黒の鎧を纏っていた。

「やっと、力を出したなあ。お、身体全体が変化してんのかあ、珍しいんじゃない？　愉しめるよなあ！」

男がまた地面を蹴り、こちらに駆けてくる。この力の使い方はま

だイマイチわからない。けど、今の俺は奴の動きについて行ける。

素早く立ち上がり、俺も同じく地面を蹴る。

そして速度は、奴より早い！

「んな——っ」

腕を振りかぶり、右拳を解き放つ。内にたまった力を吐き出すように叩きこんだ拳は、男の顔面に突き刺さった。拳に伝わる肉を殴る感触が漆黒の鎧越しに伝わる。

そして、拳を——振り切る。

「オオッ！」

男の身体はありえないほどうしろへ吹き飛んだ。

鈍い音を発し、男の身体はコンクリートの地面を転げる。

殴った方の手を思わず見やった。

格闘術なんてものを習っていたわけでもない。だけど、喧嘩をしたことがないわけじゃない。だからわかる。俺にはこんなに力があるはずがない、と。

この一週間、柚木先輩になにも聞いてなかった訳じゃない。この力のことだって、結構知っているつもりだった。

だけど、改めて力を体感すると、まるで自分が人間以外のなにか

に思えてしまう。

そんなことを思っているうちに、男がよろよろと立ち上がった。やっぱり、本気の拳でも一発程度で黙らせること出来ないみたいだ。

口から血を地面に吐き捨て、怒りを携えた瞳で俺をにらみつけた。

「痛えじゃねえかよ……こん餓鬼がアアアアアッ!!」

なにか切れるような音が聞こえたような錯覚さえ起こるほど、男は怒りにふるえた。

腕をひとふりし、男は地面を駆け出す。目標は言わずもがな、この俺に決まっている。

怒り狂った男の速度はさきほどより格段に上昇していた。そして形もなにもあったもんじゃないが、今までで最速の拳を突き出してきた。

轟ッ、と空気を切る音が鼓膜に届くほどの速度。だけど、

——今の俺には見切れる！

またも顔面狙いの拳。だが速くても、今の身体能力に攻撃のくる位置が分かっていれば、避けることはあまり難しくはなかった。

右腕を引き、反撃を加えられるようにし、相手の拳を左腕で捌き、

そこで異変が起きた。

「なッ！」

男の捌いた腕の肘から先が無くなっていた。

男は笑っている。

そのとき、背筋を這うような悪寒に襲われた。

地面を渾身の力でうしろへ蹴り、後退しようとする。

その判断は後々正しいと知るが、しかし少し遅かった。

消えた男の肘から先が正面の空間から突然現れた。

その拳は俺の腹部を的確に捉え、見事にめり込んだ。

「ガッ」

鈍い音が身体の中で響いた気がした。

このまま身体が吹き飛ぶと思ったら、拳は斜め下から突き出されていて吹き飛ぶことはなかった。変わりに、男のすぐ近くで倒れ込むことになった。

10：豪雨の対決（後書き）

ギリギリ2日連続投稿成功です！

思いついた戦闘を二時間ちよつとで書いたので、無理があるかもしれないせん^^；

しかも、吹き飛ぶとかそんな描写ばっかです（爆）

こんな戦闘シーンでも面白いと思ってもらえれば、幸いです。
次話でこの戦闘は終了です。

……毎回戦闘がこんなに長かったら、大変だなあ。とか思っていたりします。今後はこんなに長い戦闘シーンは割合しますので、ご容赦を。

感想待ってます。

11：はじけた果実

頭上から男の心底愉快そうな笑い声が降ってくる。

「どうだあ、ビビったか？」

男の言葉に耳を貸せないほどの激痛が、俺の腹部に居座る。噛み締めた口の中には熱い塊がこみ上げ、吐き出さないように堪えるので精一杯だ。

「俺の力はよう、指定した空間に身体の一部を移動できんのよ。まあ、使いすぎると魔力も使うし、たいした距離は飛ばせねえんだけど、よお！」

語尾が荒くなったと思ったら、次の瞬間、男のつま先が胸板を叩いた。そのあまりの衝撃に息が詰まり、喘ぐことさえできない。

苦しむ俺をあざ笑うように、何度も何度も踏みつける。

「テンメエよお、さっきのよ……奥歯折れたじゃねえかヨオオオオッ！！」

蹴り飛ばし、叩きつけ、踏みにじる。

圧倒的な暴力が加えられる。頭をどこかに打ち付けたりするなかで、意識が薄れていく。

意識が朦朧としていくなか、ついには痛みさえも感じなくなった。痛覚が無くなっていくなか、なぜだか思考だけが澄み切ってクリ

アになっていく。そうしたら、今の状況が客観的に思えた。けれど、それは自分のことで、この状況への打開策を考えなくてはならない。

地面をのた打ちまわりながら、現状を整理する。

敵のランク。力天使。たしか力天使は、下級ランクのはずだ。

相手の身体能力は俺よりは下と、さきほどの戦闘で分かった。しかし、経験は相手の方が上だと思う。

特殊能力は、身体の一部を転移させる。簡単にいえば、田中の力の劣化版か。

そして俺の状況は、最悪。

身体はボロボロ。

能力はなにかわからない。……いや、無いのか。

だめだ。打開策なんてまったく浮かばない。

本格的に意識もなくなってきた。

男の笑い声が遠くのほうで聞こえる。

意識は闇へと落ちていく。

意識が闇の中に落ちていくなか、俺はふと思った。

——なんでこんな雑魚にやられなきゃいけないんだろう、と。

*

最後に盛大に力を込めて、男は羽間祐二を蹴り飛ばした。

ぶち当たった塀を砕き、どこかの家の庭に身体が投げ出される。それでも、家の住人はこの惨状に気づくことはない。

祐二の身体はピクリともしない。その事実には男は喚起した。

「イイイヤツハアアアツ！ 死んだ殺した蹴散らしたア！」
身悶えするような快感。それに身をゆだね、奇声を発し、身体を震わせる。

肌にまとわりつく雨さえも今は心地いい。

だから気づかなかった。

微かに祐二の指が動いたことに。

男が歓声を上げているなか、祐二の手が壊れた塀にかかった。塀が崩れる音で、流石の男もそれに気がついた。

「ああ？」

祐二はふらふらとした足取りで立ち上がった。

「ウツゼエな、まだ生きてんのかよお！」

男は地面を蹴り、祐二に接近すると腕を振るった。

拳は風切り音を連れ、祐二の顔を潰そうと迫る。

だが祐二はその拳を右裳でいとも簡単に掴みとった。

「！」

流石に男も驚愕のするが、しかし男には能力がある。男は拳を打ち込んだ腕を消し、祐二の顔面に拳を叩き込む。

——はずだった。

「ひぎっ……」

腕を消そうとしたその時、祐二の手が男の拳を握りつぶしていた。

手のありとあらゆる骨は粉々に砕け散り、白い骨は肉と皮膚を突き破りその存在を主張する。

拳からは血が滴り、神経から伝わる激痛が脳内を蹂躪していく。

「アギイヒイアアア——ッ！！」

声にもならない悲鳴をあげる。だが皮肉にも、その言葉は自ら作り出した幻想の雨に遮られ、誰の耳にも届かない。

憎悪の眼差しで祐二を見れば、背筋が凍りついた。

それは本当に人の目なのかと、生きた生き物の目なのかと疑ってしまう。

濡れた青い髪の間から覗く瞳は、死人のように虚ろだった。まるで、世界のなにもものも移していないように思えた。

故にその瞳を見たら、身体を硬直させるしかなかった。

祐二がさらに手へと力を加えると、手首から先が千切れた。

「——アアアッ！」

また声にもならない悲鳴をあげる。

身体が、脳が、理性が命令する。

逃げろと。

危険だ勝てない逃げろ。そんなエマーゲンシーが駆け巡る。

だけど同時に理解している。もう逃げられないと。

祐二が拳を引き絞る。その一挙一動にも、生气など微塵も感じ取れなかった。

引き絞った拳が解放される。そこから先は男の目には捉えられなかった。自分の死因さえもわからず、男は絶命した。

その後に遅れて、空間を引き裂く音。

そして、破裂音。

それは新鮮な果物を潰したときの音に似ていた。

*

雨が降っていた。

しかし、もうすぐ止むだろうと感覚的に分かっていた。

雨は俺の身体にまとわりつき、体温を徐々に奪っていく。

なのに――熱い。

火照った身体は雨を受けてなお、その熱を失ってくれなかった。

もはやこの雨は、身体に付着した返り血と肉片を洗い流す役目しかもたない。いや、その役目だけで充分なのか。

眼下の地面には、頭部と右手がなくなった死体が転がっているはずである。しかし、男の死体はゆっくりと消えていく。

これは死んだと言うこと。いや、頭が吹き飛んで生きてる方が異常なのか。そして殺ったのは俺だと、理解していた。なのに吐き気さえも生まれない。そこに転がっている石ころでも眺めるように、無感動で消えていくそれを眺められた。

バシャバシャと水を蹴る音が二人分、耳に届いた。

目線だけをそちらに向ければ、雨に濡れた柚木先輩と田中の姿がそこにあつた。ふたりの表情は呆然としてるように見える。

雨音だけが耳に届く。

直にこの雨は止むのだろう。

だって、この雨は幻想なのだから。

11：はじけた果実（後書き）

またギリギリで更新！奇跡の3日連続更新です！

故に、推敲もほとんどしてません！（汗）

誤字はなかったと思います。あつたらしいませんorz

文字の打ちすぎで正直、右手の親指が痛いです。このままだとブラツクベリー症候群になってしまうかもしれません。

ちなみにこの話、20話くらいでおわると思います。昨日、脳内限定で組んだこの小説のプロットを文字になおしてみたら、たいした量なかったので（日記参照）。

さて、次の話は海に行きます。実は今夏でした。つーか、夏イベント書きたいだけですすいませんっ！

そんな俺は、今よりも子供のころに一回だけ海に行っただけです。いいよね、海。ちくちく刺されたけど。ちっちゃい生き物に。

……今思うと、この小説ってあとがきとかにまったく関係ないことが書かれますね（笑）

さて、次の話は海と言いましたが、つなげ方はムリヤリです……。

ああ、残り3分で日付がつ！それでは！

12：罪悪の重さ

暗闇の中。ここを照らすのはテレビの光だけ。

テレビの中では、アナウンサーがニュース原稿を読み上げている。

『緊急ニュースです。今日未明、某市内にて殺人事件が発生しました。現場にはが無惨にも引き裂かれたように破損した、女性の遺体が残されていました。さらに現場の住宅街では塀などが破壊されており、それに住民はまったく気づかなかったそうです。専門家の話によりますと――』

アナウンサーの声は、あまりに耳に入ってこない。ただ俺は自分の部屋で茫然自失としていた。

どうやって帰ってきたかは、ほとんど覚えていない。柚木先輩と田中に肩を担がれてきたのかもしれない。

カーテンの隙間から外をみれば、雨は降っていなかった。当たり前だ、あれは幻想なのだから。雨雲ひとつかかっていない空には、まばらに星が見えるだけ。田舎ならもっと見えるし、もっと都会ならまったく見えないのだろう。中途半端だと思う。

そこから視線を暗闇にもどした。

ただただ、虚脱感だけが身体を支配している。まるで、自分の身体じゃないように手足が重い。

制服はまたボロボロになっていた。明日の学校はどうしようか。

明日は金曜……休むか。一日くらい良いだろう。そうしたら、次の日は休日だ。

それだけ考えると、もう眠くなってきた。

アナウンサーの声を子守歌がわりに、俺の意識は闇の中へとまどろんでいく。

眠りに落ちる瞬間、瞼の裏に写ったのは、

花のように頭を開いた男の姿。

*

翌日、祐二は学校を欠席した。

その放課後、田中由里奈は祐二の住むマンションの前で途方に暮れていた。

昨日はあんなことになり、なおかつ今日は学校を欠席した。こうなるとやっぱり心配だ。自分は覚醒者を殺してしまったことは何回もあるけれど、祐二はそうではない。

いくら正当防衛でも、人を殺してしまったとゆう事実に関心を痛めているに違いない。

だから慰めるべきなのだろう。ただ、恋する乙女としては、『ふたりきり』と『慰める』で不謹慎ながらも妄想してしまうものである。

顔を赤く染め、ううと言葉にならないうなり声をあげると、

「こんな所でなに唸ってるの気持ち悪い」

あまり聞きたくない声が聞こえた。

さきほどの妄想はなんのその、すぐに不機嫌そうに眉をひそめる。

「……なんですか先輩」

「なんですかじゃないわよ、わかっているくせに。様子見よ様子見。わたしは祐二を監視してるんだから」

まるで祐二自体はどうでもいいような言葉使いに田中は怒りを覚える。だが、自分が柚木の言動に腹を立てるのはいつものことなので、今はあえて無視する。優先すべきは祐二だ。

こうして不本意ながらも、口実のような物が出来た田中は柚木と一緒にマンションへと足を踏み入れた。

*

学校を休んだ友人の見舞いに来た、と事情を説明して管理人から借りた合鍵を、二〇五号室の鍵穴に入れて鍵をあける。

その鉄扉を開いて、柚木陽子と田中由里奈は部屋の中へと足を踏み入れた。

付けっぱなしのテレビには、ドラマの再放送が映されていた。有名ながら対した実力のないアイドルが下手な演技をしている。

一方この部屋の主は、部屋の隅でうつ伏せに倒れていた。

「先輩！」

慌てて田中が倒れている祐二に駆け寄る。田中は身体をうつ伏せの状態から、仰向けの体制へと変える。

もう一度田中が呼びかける。祐二はうるさそうに眉間にしわを寄せると、瞼がゆっくりと押し上げた。

*

目を開けると、そこには田中の顔があった。正直かなり近くて、息が顔にかかっていたりする。もう少しそれを堪能したい気もするけど、安心したように顔をほころばせて、田中は顔を離れた。

気づけば、田中の後ろには柚木先輩の姿があった。

「あれ……ふたりともどうしてここに？」

当然の疑問に肩の力が抜けたような柚木先輩が答えた。

「見舞いに決まってるでしょう。まったく……もう少し落ち込んでいたかと思ったけど」

なんのこと——と言いかけて、昨日の情景が浮かび上がった。

それは薄れつつはあるけど、まだ思い返せる死体の姿。

一瞬、息の仕方を忘れてしまったように、呼吸という行動が出来なくなった。

「羽間先輩……？」

田中が心配そうに顔を覗いてくる。

「俺は……人を殺したのか」

その一言で、ここから逃げ出さなくなった。わざわざ言葉に出した再確認。それにあたりの空気が重量を持ったかのように、肩にのしかかった。

気まずそうに田中が口を開く。

「……はい」

拳に感触が蘇る。人間の頭を叩き砕くその感触。そして一瞬、心地よく感じてしまったことへの嫌悪。

——キモチワルイ。

「殺し、たんだな」

もはや意味のない言葉。

「そうね殺したわ。いくら悔やんでも、この事実は変わらないわ」
厳しく射抜くのような柚木先輩の言葉が、胸をえぐった。

なにか田中が怒鳴っているように思えるが、それは耳には入らなかった。入っても、鼓膜から脳には伝達されない。

心臓の鼓動が酷く耳障りだった。

「いつまでもいじけてるんじゃないわよ。あんたのは正当防衛。悔いる方がお門違いよ」

柚木先輩の声は鼓膜を伝わり、半強制的に脳へと伝わる。

確かに正当防衛だ、けれど人を殺したのは過剰防衛に他ならない。そんな簡単に割り切れてしまうものではない。

「だけど、人を殺した」

ぼそりと、自分でもなんとか聞き取れるほどの小さな反論。

聞こえないとも思ったが、柚木先輩にはちゃんと届いていた。

「わかってるわよ。人を殺したことを肯定しろとは言わない。けど、殺らなきゃあんた死ぬのよ？」

そんなの、自分優先の汚い理屈じゃないか。

俺は奥歯を噛み締める。

「殺すくらいなら——死んだ方がマシだ」

そう言った瞬間、

「——ッ！」

なにが起こったかわからなかった。

頬に衝撃が走る。ワントンポ遅れて、頬が熱くなった。

そしてようやく、自分が叩かれたと理解できた。

「なんでそんなこと言っんですか……」

叩いた手を震わせ、田中が呟いた。

「なんで死んだ方がマシなんて言っんですか!？」

胸倉を掴まれ、強引に引き寄せられた。俺は驚いて、抵抗ひとつ出来ない。

田中の頬を涙が濡らしていた。

「死ぬなんて簡単に言わないでくださいッ! どうして目の前の障害を排除してでも生きようと思わないんですか!」

胸倉に力がさらに加えられる。首が締めまり、せき込む。

それで田中が弾かれたように手を離れた。

「あ……あの、すみません……私、私……ッ」

謝っている言葉が耳に届くが、咳きのせいで返事が返せない。

田中が身を震わせているのが気配でわかった。だけどそれに返事は返せなかった。

咳きはその後すぐに収まったが、田中は泣き出してしまっていて話かけることが出来なかった。

しばらくして、柚木先輩がいつもの敵対心が嘘のように、田中を立たせた。

「わたしはこの子を送っていくわ」

「……はい」

それだけ言うと柚木先輩はこちらに背を向けて、玄関の方へ田中を連れていく。

ふたりが靴を穿き、田中の肩を抱いた柚木先輩が鉄扉のノブに手をかける。そして鉄扉を開けて外に出ていく瞬間、

「死ぬなんて、簡単に口にするな」

歯を食いしばって、そう言った気がした。

*

そして今、俺は海にいる。

12：罪惡の重さ（後書き）

根性の四日連続更新っ！！

もはや人生初の快挙かもしれません！

……でも、今回は文が乱暴になりました。反省！

で、何故いきなり海に行ったかと言うと、宣言しちゃったから（爆）
いろいろ書いてるうちにタイミング逃しちゃって……。

次の話でそのことについては説明されるのでご安心をば。

人を殺してしまった祐二（実は二回目です）……。次の話でどうなるのか！？

残り二分で日付がっ（汗）

ではでは！

13：沈黙の海

なぜだか俺は海にいた。

空からは陽光が砂の地面を熱している。海は潮が引いたり、波になつて戻つてきたりを繰り返す。あ、子供の砂の城が崩れた。

まあ、俺が海にいる理由は……。

あの騒動から一日たった土曜日。

昨日の失言を思い出し、気分を沈めていたころ、電話がなつた。

単調な電子音が響くなか、俺は受話器を外して電話に応答した。多分、かなり沈んだ声だったと思う。

「予想通りというかなんというか、声暗いなー」

意外や意外……って、ほどでもないか。それは章からだつた。

章曰わく、あの日にむせび泣く田中を慰める柚木先輩を見かけたという。いつも不仲なふたりを見ていた章は、田中が俺にフラれたと思つたらしい。ちなみに俺は断固否定した。つか、それじゃあ田中が俺を好きみたいじゃないか。

それで、フツてあんなに泣かれて意気消沈しているだろうと思つて、俺に電話をかけたらしい。本当にふつて泣かれたら俺も落ち込むだろうが、勘違い電話はかけるな。田中がかわいそうだ。

……泣かせたのは俺なんだけど。

一日遅れで電話をかけたのは、バイトが忙しかったらしい。そういうのはその日にやらないと意味ないと思うんだけどな。

……それで章は次にこういったのである。

「で、俺と、柚木先輩、田中ちゃんとお前で日曜日に海いくことになったから」

おいおい、田中ちゃん、ってなんだよ、ちゃん、って。

……いやいや、ツツコムところが違ったな。なんで明日なんだよ。そう言うのは二日前に行ってもらわないと準備が、って違う！

なんで四人で海に行くことになったんだ？

と聞けば、夏だし。なんてふざけた答えが返ってきた。しばらく無言を通していたら、冗談だと謝ってきた。これが冗談じゃなかったら、早々に受話器を戻しているところだった。

聞くに、章は今後ふたりが気まずくなるのはほって置けないから。柚木先輩はクッション役らしかった。ホントにいい奴を友達にもったと思う。

つーか、ふたりをどうやって誘ったんだろうか。その交渉術は是非興味がある。

かくして、今に至ったわけである。

この海水浴場は、家の辺りから電車で約三〇分ほどの距離にある。

ちよつとは名が知られていて、海水浴場のすぐしるにはホテルがいくつか名を連ねている。

家族連れや恋人通しなど、様々な人々でそこは盛り上がっていた。

「じゃあ、そろそろパラソル建てようか」

章がそう切り出し、ここから少し先に行ったところの砂浜へ向け歩き出した。飲み物の入ったクーラーボックスを抱える俺もそのあとに続く。

俺のうしろにふたり分の足音が続く。もちろん柚木先輩と田中だ。

ここに来るまでの間、柚木先輩と田中とは必要以上に言葉を交わしていない。……なんとなく気まずい。

かくして、前途多難な海水浴が幕を開けた。パラソルの中には俺を含めて柚木先輩と田中の三人しかいなかった。章はパラソルを立てたあと

「お、可愛い子はっけえ〜ん！」

とか行つて、女の尻を追っかけていつてしまった。気を使つたつもりだろうけど、はつきり言つて逆効果だコノヤロー。

騒がしいまわりとは線で区切つたように、パラソルの中だけ重い沈黙がのしかかる。パラソルの外が冗談抜きに天国に見える。

とりあえず、なにか話をするべきだろう。

「あー、田中」

「は、ひゃい!？」

かなり声がうわづってるんですが。

「……ジュース飲むか」

「は、はい!」

クーラーボックスから缶ジュースを取り出す。俺の顔を一瞥すると顔をうつむけながら、缶を受け取った。……やっぱり嫌われてるみたいだな。

田中が缶のプルタブをぎこちない動作で開けると、俺は重い腰を上げた。ふたりに

「少し泳いでくる」

と簡潔に伝えると、海の方に向かった。

……ようやく脱出できたか。と、内心安堵していたのは内緒だ。

13：沈黙の海（後書き）

五日連続！

……前の二話を修正しました。俺としたことが設定の矛盾があったのでorz

えー、なんで今日はこんなに短いかというと、すいません！デスノ見えました！

なので、間に合いませんでした……勘弁っ（汗）

14：揺れる海

水に浸かっても結局することがなく、水面に浮かんでいた。

……結局、俺はなにをしに来たんだろうか。

波に揺られるなか、人のざわめきが遙か遠く感じる。

太陽の暑い日が肌をジリジリと焼いているとき、こちらに水をかき分ける音が耳に届いた。

俺は体制を直して、海の中に立ち上がる。音がした方に目を向ければ、そこには水着姿の田中がたっていた。

「あ……」

シンプルな特に飾り気のないビキニをきた田中は……。うん、田中って結構着痩せするんだね。特に胸が。

「……すいませんっ！」

突然あやまれた。

「いや……悪いのは俺だって。あんなこと簡単に口にするもんじゃなかったし……」

すかさず田中が首を横に振る。

「で、でも落ち込んでる先輩に追い討ちをかけるようなこと……」

「いいんだよ。あのときは俺が悪かったんだから」

でも、と言い出す田中を手で制止する。これじゃ無限に続きかない。

「何度も言わせるなって。あれは俺が悪かったんだ。なにか、お前はこれ以上続けて俺を怒らせたいのか？」

最後のひとことで田中の肩がびつくりと跳ねた。いや、そんなに怖がらなくても。

俺はわざとらしく大きく伸びをすると、

「さーて、せっかく海に来たんだ！遊ぶか！」

「——はい！」

田中は屈託なく笑った。俺は頬が熱くなるのを感じたが、気にしないことにした。

「あれ、羽間先輩、顔赤いですよ？大丈夫ですか？」

なにを勘違いしたのか（してもらった方が助かるんだけど）、俺に手を伸ばしながら足を踏みだし、

「わ、ぷっ」

沈んだ。

「た、田中!？」

俺は抜かるんだ地面を踏んだらしく、沈んだ田中を引き上げることになった。

で、引き上げた後はふたりで大笑いした。ん、やっぱり田中は笑顔が似合うな。と、新たな発見をすることとなった。

*

そのあと、ナンパに見事玉砕した章と合流した。つーか、本当にナンパに行ってやがったのかお前は。

そして仲直りした俺と田中を見て満足そうに頷くと、三人で遊びまくった。

ここのところストレスが溜まりまくってたのか、今日はかなりそれを発散できた。誘ってくれた章にまた感謝する。

気づけば日が西に傾き始めていた。あれだけ大勢いた人々もほとんど残っていない。

俺たちもお開きにするか、と誰もパラソルに戻った。

「……あれ？」

パラソルの中には、誰も、いなかったのだ。

そこにいるべき、柚木先輩がいなかった。

「あれ先輩は？」

「章、知らないか？」

「さっき、一回戻って来たときは居ただけど……」

空を見上げれば、もう紅く霞みがかっている。あと半時もしないうちに暗黒が支配し始めるだろう。

柚木先輩のことだから大丈夫だろうけど……。

「章と田中は片付けでもしといてくれ。俺は柚木先輩を探してくる」

「え、ちょ、羽間先輩っ！？」

背中に田中の声がかかったが、それを無視して俺は走り出した。

14：揺れる海（後書き）

なんとか六連続……。

今回もすいませんです。短い……。

キリがいいところで区切ったせいです。後もう少しで長文になったんですけどね。

次はちょっと、嫌いな人がいる表現があります。あらかじめ謝ってきます。

では、また次回。

……日常風景は書くの苦手です！

15：決意の海（前書き）

すまんギリギリ

15：決意の海

海外の脇にあるわずかな森林から、柚木陽子は沈んでいく日を見つめていた。

ここは地面からすこし上がり、崖場になっている。柚木は崖の先端まではいかずに、敢えて森林の中から日を見つめていた。

木により掛かり、この木は樹齢何年だろうか、なんとなく考えてみる。年輪でも見れば分かるのだろうけど、それは木を切らないとダメだなとぼんやりと思っていた。

今頃は皆、帰り支度をしているのだろう。みんなは自分がいなくなって、どう思っているのか。案外、先に帰ったと思うかもしれない。荷物は置いてきたから、それはないかと自分の考えに自嘲する。

そういえば、なんで自分はこんな所に来たのだろうか、と思い出してみる。

単純にひとりになりたかったのか。あの三人と自分は近そうでも遠くに見えたから。

あの若さも純粹さも自分は三年前に捨てたのだから。

また自嘲的に笑う。そこで人の気配に気づいた。

油断したな、と内心で舌打ち。気配はふたつで、殺気はないもののいやらしい視線は感じる事ができた。

そちらに視線を移せば、予想していた通りのタイプの人間がふたり立っていた。

ひとりめは、下唇にふたつ銀のピアスをあけ、髪を染め上げた男。もうひとりもさして大差はない。

今の自分は水泳用の水着に上着を羽織っただけの格好。こういう輩が寄ってくるのは、半ば予想できたことである。そこまで考えを回せなかったことに、柚木は自らを叱咤する。

男のひとりがいやらしい猫なで声を発した。

「アンタ暇してんの？ オレたちも暇してんだよね。一緒に遊ばない？」

「そうそう。そんな格好でここにいてってことは、誘ってんでしょ？ ここで野外プレイとラブホでやんのと、どっちが好み？」

予想通りの戯れ言に柚木は、今度は隠さずに舌打ちした。

「お前らに構ってる暇はない。連れがいるんだ、失礼する」

木から腰を浮かせて、柚木がここを立ち去ろうとすると、男が柚木の腕を掴んだ。

「待てよ」

一オクターブ低い声で男が言った。

意外と力が強いことに柚木が眉を歪めると、男は木に柚木の背中

を押し当てた。

「ちょっと、君さ。オレら舐めてね？」

「なあ、こいつレイプされんのがお望みなんじゃねえの？」

腕を掴んでいる方がなるほど、と口元に下品な笑みを浮かべる。

流石に舐めすぎていたか……。柚木はここから抜け出す方法を模索しだす。

力は論外。もし使った場合、殺さない保証はない。それにヘタに出せば、後々めんどろになりかねない。

他に模索してみるも、いい案は浮かばなかった。抵抗しても、力なしでは普通の女性と変わらない柚木では勝てるわけがない。

そうこうしているうちに、男の手が柚木の胸を掴んだ。

「あッ、く……触るな！」

手を払おうと抵抗すると、別の男に手を捕まれた。

厄介なことに、柚木の高飛車な言動は男に火をつけたらしい。

「強気な奴は好みなんだよね」

そう言うなり、男の唇に自分の口をふさがれた。

「……ッ！」

男の舌が口内に侵入してくる。抵抗しようにも、酸素不足で四肢に力が入らない。

口内を蹂躪されていき、身体から力が抜けていく。足が震え、力が抜けて座り込みそうになる。

座り込んだが最後、こいつらの慰みものになるだけだ。そんな未来を想像して、柚木は無理やり意識を覚醒させた。

「――離れる！」

渾身の力で男の腹部を蹴り飛ばした。

男が完全に無防備だったのか、よろけたあとに呆気なく尻餅をついた。

この隙に逃げ出そうと柚木は足を踏み出す。未だに酸素を取り込めきれない身体では力が入らず、もうひとりの拘束から逃れられない。

尻餅をついた男が顔を真っ赤にして立ち上がった。

「ザけんな、このアマツ！！」

激昂した男の張り手が柚木の頬に叩き込まれた。パンと甲高い音が森林の中に響きわたる。

男は意味の分からない言葉をはいて、膝を柚木の腹部に叩き込む。

柚木は痛みにも声を発せない。その間に男は水着の紐に手をかけ、一気に腹部辺りまでひき下ろした。

「あ——」

絶句する柚木に優越感を得ただろう男の唇が弧を描く。

露わになった胸に手を伸ばした男は、

横からの衝撃に、地面に倒れ伏した。

さっきまで男が立っていた場所には、違う男が立っていた。

*

いやな予感に従ってみれば十中八九、その予感は見事に的中していた。

倒した男の顔面を力いっぱい蹴り飛ばす。正直、この程度じゃ物足りなさすぎる。この顔をグチャグチャに醜く飾りあげたい気分だ。柚木先輩に手を挙げたのだから当然だろう。

でも今は、自分の欲を満たすのは後でいい。じゃなきゃ、こいつらと同類になっちまう。

ようやく正気に立ち直ろうとしている男を睨みつける。

息を吸い、腹の底から怒声を吐き出した。

「柚木先輩に触ってんじゃ——ネエッ!!」

腐葉土に素足を食い込ませ、振り抜く勢いで拳を放つ。

足から拳まで勢いが力強く伝わり、まるで力を使用したような充実感に包まれる。

俺の一撃は男の顔面に突き刺さり、身体をのけぞらせて地面に崩れ落ちた。

これで柚木先輩に集ったゴミ虫は排除した。俺はくると踵を返し、倒れた男に向き直る。

待たせたな。迷わず、腹部を蹴りとばした。

呪詛の言葉をはき連ねて、ひたすらに蹴りつける。

よくも、

お前なんかが、

柚木先輩に触れやがって、叩きやがって、

調子に乗りやがって！！

胸の中心を蹴ったときに鈍い感触があった。まあどうせ、肋骨でも折れたのだろう。気にする必要はない。

鼻を蹴ると変な方向に曲がり、男が奇声を発する。折れた位で喚くなよ、虫畜生の分際で。

何度も何度も蹴り飛ばす。素足に柔らかい肉の感触がダイレクトに伝わる。

くたばれくたばれ、クタバレ。柚木陽子に手を出した奴は死ねばいい。消える潰れる息をするな。

この行為を続けていると、自然に唇が狐を描いていた。楽しい。楽しい。

もつと悶える。のた打ちまわれ。汚く地べたを舐める。這い蹲れ。ハハハ、アハハハハハハハッ！！

背後からヒイと甲高い声が上がった。

五月蠅いないところなのに。振り返ると、もうひとりの男が尻餅をついて、醜く怯えていた。

「ば、化け物！」

化け物？ ああ俺のことか。そうか、化け物に見えるのか。そりゃいい。柚木陽子を護るのなら、そちらの方が好都合だ。

地べたに這いつくばった虫を蹴り飛ばして、男の前に転がす。

虫の息な同類を見て、奴は失禁しやがった。汚いな。いや、自然には肥料になるのか？ それだったら、自然貢献しているってことか。こいつの尿なんて、自然環境に悪影響しか与えなさそうだけだな。

次はこいつなんだから、自分の末路をちゃんと見させてやるかな。振り上げた足を振り下ろそうとしたら、誰かが俺の背中に抱きついた。その感触に俺の身体は行動を凍結させた。

背中にはすすり泣く声がある。

「止めて……もういいから、もう平気だから……」

弱々しく発せられた声は、紛れもなく柚木先輩のものだった。

なんで泣いているんだろう。

俺が泣かせてしまったのだろうか。

だとすれば、俺はとんでもない事をしてしまった。

振り上げた足が腐葉土の地面に下ろすと、失禁した男は気絶した男の腕を掴んで逃げ出した。

素肌の背中を熱い水滴が滑る。そういえば、水着一枚で探してたんだよな。

柚木先輩の身体が背中から離れた。俺はうしろに振り返る。

柚木先輩の水着はまだ下ろされたままで、俺は慌てて視線を逸らした。

俺の視線に気づいたのか、顔をうつむけた柚木先輩は水着を直した。

居心地の悪い沈黙が、しばらくこの場を支配する。

日が完全に沈み、暗闇が落ちたところに俺は空を見上げた。

「あ——」

そこには、思わず息を詰まらせるような光景が広がっていた。

空を見上げたまま固まってしまふ。そんな俺に柚木先輩が気づき、先輩も空を見上げた。

「あ……」

柚木先輩も息を詰まらせた。

海の夜空には、空を埋めつくさんとばかりに星が散らばっていた。

俺と柚木先輩は、その光景にしばし見入っていた。

「すごい……」

柚木先輩がそう呟くと、俺は地面に仰向けに倒れた。

柚木先輩は驚いて目を丸くする。

「ちょ、祐二!?!」

「そつえば、」

背に腐葉土の冷えた感覚を感じながら言葉を紡いでいた。

「二回目なんだよな……人を殺したのは」

夜空にまばたく星をみながら。

「初めて人を殺したとき……柚木先輩が、俺を奴隷にしたときなんだよな」

柚木先輩は時折、俺に視線を送りながら、独り言ともとれる俺の言葉を聞いていた。

「あのときは、なんで殺しても何とも思わなかったんだろう」

なんとなく、手を空にかざしてみる。指の間からもれる^{ほしほし}星星の輝きは、まるでその光が俺の裳にあるようだった。

「あのときは……」

柚木先輩が何かを言い淀んだ。

何か言おうとして、迷っているようだった。俺はかざした手をみながら、少し続きを待ってみる。

なかなか紡がれない言葉に、苛立ちはなかった。

こんなに綺麗な生命のまたたきとも言える数々の星をながめっていると、時間の流れが遅く感じられたから。風情だな、なんてらしくないことを思ってみる。

ようやく——って、言ってもたいした時間がたったようには感じないけれど。柚木先輩が続きを口にした。

「あのときは、混乱していたから。人は人知を超えたことに遭遇すると、他のことには目を向けられないものよ」

迷うような含みがその中にはあった。遠まわしに、しょうがないと言われてたようだ。こんな所に気を使わなくてもいいのに。

かざした手を下げて、頬を少し緩ませながら俺も胸から言葉をはき出す。

「たとえば、どんなことがあっても、人を殺した事実は蔑ろにはしちやダメだと思う。しょうがないとかで片付けてもだめだ。柚木先輩、俺は正直言っすぎて後悔してるし嫌悪してる。だって、人を殺してのうのうと生きているんだ。たとえばこれが奇麗事だとしても許せない。こんな力を持っている理由だって、わからない」

もうなにも言わず、柚木先輩は俺の目をじっと見つめて話を聞いてくれた。

多分、次の言葉はどうしようもないほどの奇麗事なんだろう。人からしてみれば、逃げているように聞こえるのかもしれない。

もつと良い言葉や、償いとかそういうのもあるはずだと思う。けど、今日ずっと考えぬいて出した結論はこれなんだ。

「俺は殺した人の重みを背負って生きていく」

メチャクチャな開き直り方だな。と笑われているだろうな。

そう思っていたけど、柚木先輩はひどく真剣な眼差しをして俺を

みていた。

「お前は、それをできるのか。これからも殺すことになるのは、目に見えているのに。それを背負えるのか？ 慣れてしまつて、笑つて人の死を見られるようになってしまわないのか？」

すごく難しい質問を投げかけてくる。けれど、今の俺は驚くほどに穏やかな気分ですぐに答えることができた。

「そんなに背負えるか、と聞かれたら……背負える。なんて言えませんが。自分で断言したばかりだけど、そんな自信はないです。さつきだつて、奴らを笑いながら殺しかけました。なんかね、最近破壊衝動つて言うんですかね。それが強いんですよ。でも、それを言い訳にしたくはありません。絶対なんて言葉は言えませんが、背負えるだけは背負つてやりますよ」

やけに長つたらしく語つたな。呆れられたら、それはしょうがない。都合の良いことを連ねただけの言葉なんだから。

なのに、言い切つた俺の心はとても清々しかった。一気に楽になつた気がする。

ひとつ息を吐いた柚木先輩は、また空を見上げた。

「なあ——寝そべれば星はもっと綺麗に見えるか？」

気づけば質問されっぱなしの俺は、間髪いれずに即答した。

「もちろん」

そうか、と言って、軽く空に向かって微笑んだ——と思う。柚木先輩は俺の横に寝そべった。

「上着、汚れますよ」

「洗えばいいだろう」

「そうですね」

「星がきれいだな」

それに素直に頷いた俺は、田中たちが怒りながら乱入してくるそのときまで、夜空をふたりで見続けていた。

「ふたりで寝そべって何してるんですか！」

「まったく、こっちは苦勞して探してたって言うのに」

「ん、ああ。ふたりとも悪かったな」

柚木先輩がそういつて立ち上がると、俺も釣られて立ち上がる。

最後に潮の香りを胸一杯に吸って、

「さて、帰ろうか」

こうして、俺たちの海水浴は静かに幕を閉じた。

*

男は闇夜のビル街を歩く。

ニューヨークの夜は眠らず、つねに街は光に照らされていた。

ビル街の一角に建つひとつのオフィスビルに、男は入っていった。

このビルは使用されてはいるが、人の出入りは異様にすくない。世界に‘覚醒者’など少ないので、訪れる人物の数などたかが知れている。

さらにここ‘覚醒者の犯罪支援’会社の存在を知って、なおかつ訪れる者は本当に一握りしかない。さらにその一握りの人間は異常な人間しか存在していなかった。

この男も類に漏れず、異常な嗜好を持っていた。

エレベーターで一三階まで上がって降りれば、移動する必要もなく社長室についていた。

コの字型の机と、それに囲まれるようにソファに座っている男がいた。

短く切られた金髪と、暗闇で怪しく光る双眸は、ひと目で彼を異常と評価せざるえないものだ。実際、かなり異常なのだけれど。

「よく来たな」

「はっ。……フェーラー様、して様と言うのは？」

フェーラーと呼ばれた彼は、窓から入るニューヨークの光に照ら

される。目を子供のように純粹。

「そうそう。お前って、日本語喋れたよな」

「ええ、人並み程度ですが」

「上等。それで頼みがあるんだ。……ちょっと、日本に言ってくれないか」

「日本、ですか？」

「うん。それがね、やっぱりルシファーが覚醒したみたいなんだよね。力天使の名前は——忘れたけど、そいつが殺られた」

「ルシファー……フェーラー様のサタンと対になる存在でしたね」

「そ。で、君が前に日本に行ったときに痛い目を見せられた女の子がいる所さ」

男の目がその言葉に怪しく光った。

「お礼参りって奴に行ってきたて良いよ。ちょうど、同じ街にいるみたいだから」

「——ありがたきお言葉」

男は怪しく笑う。

ここに集う者は皆異常である。

16：カウントダウン

翌日、俺はある病名を言い渡された。

深刻な宣言を言い渡され、俺の身体の節々はさらに痛みをました気がする。

自由の効かない身体に嫌気がさした。もう布団に潜りこみ、不貞寝を決め込もうと思い、それを決行した。しかしそうは問屋が許さない。

布団をひつpegされ、田中が目を背けつつ柚木先輩が俺を着替えさそうとしたので、痛みを推して自分で制服に着替えた。もちろんふたりは追い出して。

こうして今日の一日が始まる。

ああ、そうだった。肝心の病名は――

筋肉痛。

*

「いつつ……」

机にへたり込み、腰のあたりをさすっていると章が隣で含み笑った。なんだその笑みは。

「いやあ、よつほど腰を酷使する事を……」

みなまで言わせず、すかさず肘うち。

ゲフウと章は崩れ落ちた。

「寝言は寝て言おうな」

言っておくが、筋肉痛は一日中遊びまくっていたからだ。他意はまったくない。断じてだ。

それにしても、力を使って戦った後はものすごい脱力感があるけど、筋肉痛にはならないんだよな。

制服の裾をめくって身体を見てみると、打ち身以外の傷は残ってなかった。筋肉痛も今朝ほど酷くはない。たぶん、明日には完璧に治っているだろう。

このところ、視力や聴力、体力。力を使わなくても身体能力が向上しているのがわかった。

暴力的になるときといい、力に覚醒してからいろんなことが変わっていた。でも、恐怖は不思議とない。

そんな思考に浸っていると、授業開始を告げるチャイムになった。随分と考えにふけていたらしい。

「て、なにやってんだ？」

と、いまだに悶える章に向けた。

「い、いや……お前そんなに力が……ゴフオ」

今度からは加減に気をつけよう。

*

今日の授業も一通り終わった。

特に部活をしているわけでもない俺は、このまま帰宅しようとする。

する……あれ、なんだか今日は物足りない。なんだろう？

うーん……。としばらく考えていると、田中が入り口の前で手を振っていた。

それに手を挙げて答えると、廊下に出て、

「あああああつ！」

思い出した！

「ひゃ、な、どうしたんですか」

俺の絶叫に、身を縮こまらせた田中がおずおずと聞いてきた。

「いやそつだよ。思い出した。朝の地獄と昼飯ときの地獄がなかったんだ！」

「……地獄？」

なんだか不穏な空気が漂ってきた。

理性が俺に命令する。ダメだ！ 田中の方を見ちゃダメだ！

「羽間先輩、朝の地獄とかいったいなんですか？」

「そ、そういえば柚木先輩がいないみたいだけど、どうかしたのか？」

よし、見頃に話をそらした。流石だ俺。その判断力にほれられる。

「柚木先輩は同級生の恋愛相談を引き受けているので、しばらく帰れないって言われました。それで地獄ってなんですか？」

そらせてねえ！

もう一切合切喋らされましたよ。廊下で。地獄呼ばわりしたことに懺悔させられましたよ。廊下で。あの田中にメチャクチャいびられましたよ。廊下で！

廊下で同級生の痛い視線を一心に受けつつ、土下座したよ。……しつこいけど、廊下で。

まあそれでようやく許してくれるようで、田中は強張った肩の力を抜いた。

「たしかに悪かったのは私ですね。でもやっぱり、地獄呼ばわりは悲しいです。もう止めてくださいね」

「りよ、了解」

立ち上がって、へこへこと頭を下げる。

それにしても、柚木先輩の面目がなにやらと、柚木先輩の擁護をしていたのには驚いた。そういえば朝も昼も仲がいいとは思わなかったけど、陰悪な雰囲気はなかったんだよな。女の友情でも目覚めたんだろつか。

「あの、羽間先輩。償いと言ってはなんですけど、お願いを聞いてもらえますか？」

「お願い？ 別にいいけど」

すこしおらしくなって田中が言うので、俺は迷わず頷いた。別に断る理由もないし。まあ女の子からの願いを無碍に断るのとはばかられる。

「明日って、海の日でお休みですよね？」

相づちをうつて、頷く。って、言うか海に縁があるな。

「それで、明日……お出かけでもしませんか？」

顔と耳を薄く染めて、田中が問うてきた。前にも同じような状況があったなあ……。

「ん、別にいいけど」

「ホントですか！？　ありがとうございます！」

さきほどまでの不安そうな表情はどこかに吹き飛び、途端笑顔に包まれた。

う、なんだか頬が熱く……またこのパターンか！

顔の熱さを顔をふってごまかし、すかさず言葉をつけたす。

「それで誰を誘うんだ？　柚木先輩とかか」

「……え？」

さつと、田中の笑顔に影が差した。次に目が潤んできた。

な、なんだその捨てられた子犬のような瞳はっ。い、痛い！　心がっ！

「私とふたりは、いやですか？　そうですね、先輩は柚木先輩が好きですもんね……」

ああ、田中がどんどんちっちゃくなっていく！

「わ、わかったわかったから！　ほら落ち込むなって。ふ、ふたりで行こう、な」

なんだか言葉に卑猥にとられそうな表現があるけど、気にしないことにする。俺が田中をデートに誘う形になっているのにも目をつむろつ。まわり、の陰口が痛いっ。

田中に屈託のない笑みがもどった。

「はい！　じゃ、じゃあまた明日！」

俺見えないように（見えてるけど）小さくガッツポーズを作ると、幸せそうに駆け出した。俺の耳には、いつまでもリノリウムの床を駆けていく足音が残っていた。

*

空港の自動ドアからひとりの男が出てきた。

その人物は荷物の入ったキャリーケースを引きづりながら、通行者の邪魔にならない脇に移動する。

コートの懷に腕を差し入れると、四角い箱を取り出して、一本の煙草をとりだす。懷から取り出したジッポライターで煙草に灯をともすと口にくわえた。

煙草の煙を肺いっぱい吸い込むと、煙草を指で摘んで口から離して息を吐いた。灰色の煙が口から吐き出され、溶け込むようにして煙は闇夜に消えた。

一服し終わると、吸った煙草を携帯灰皿にしまう。

意外と紳士な男は、髪をかき上げると不適に笑った。

「さて、待っている。今行つてやる」

楽しい宴はこれからだ。

16：カウントダウン（後書き）

いつもより早めに投稿。

昨日は残り10秒つてとここで間に合いました（汗）

でも、そのせいで推敲不足に……誤字を直さないで申し訳ないです。

なんだかプロットと違う展開になっつきました。話がもっと短くなる可能性があります。

まあそれでも、ラストまでこの毎日更新していきます。

応援と感想よろしく！

17：嘲笑の天使

さて、今日は海の日。夏休み間近の祝日だ。

今日は田中とふたりで出かける……。やっぱり、休日に後輩とふたりで出かけるとなると、流石に緊張してしまう。

変なところないかな？ 髭は……剃った。寝癖は、ないな。財布、よし。靴下、よし。メガネ、ない。うん、メガネかけてないし。

完璧。なんだか、小学生みたいな緊張の仕方だな、俺。

準備を整え、そのくせ服装はいつもと同じ私服で俺は家を出て、今に至ったわけで。

ここは人通りの多いストリート。バス停、デパートとか、ここでは一番人が集まるところだ。

人通りが多く、辺りはコンクリートからの照り返しなどで、少々蒸し暑い。

さて、こんな所で何故に田中と柚木先輩が俺の目の前で睨みあっている！？

「……なんでここにいますか、先輩」

それは俺としても是非知りたい。

「彩子から昨日の会話を教えてもらったのよ」

プリンの時の方ですか柚木先輩。いや、それは今この場にいることに対しての説明にはなっていないと思うのですけど。

「ま、まあ賑やかな方が楽しいし……。田中も落ち着け……。落ち着いてくださいお願いします」

俺の全身全霊を込めて、楽しくいこうよ。と懇願をしたところ、ふたりはしぶしぶ了承してくれた。やっぱり、ふたりも休日まで喧嘩したくないもんな。

……それと周りからの、あれって三角関係のもつれ？ 二股かけてんのかよ最悪。みたいな視線に気づいてくれたらしい。その視線の七割は俺に集中しているけどな。俺は悪くないのに、すごいいたたまれない気持ちにつ。

出端を挫かれた形だったが、俺たちは近場のデパートに入ることになった。

ガラスの扉を押し開けてデパートの中に入れば、冷気が身体を包んでくれた。蒸し暑い外と比べると、クーラーの利いたデパートはまさに天国。

心地いい涼しさを感じながら、デパートの中を進み出した。

*

デパートを見上げる。先ほどまで辺りを見て回っていたが、この建物が一番規模が大きいようだった。ここなら、巻き込む人間も多そうだな。と日光のした、煙草を吸いながら男は考えていた。

コートなんかを着ているせいか、男の額には汗の玉が浮かんでいた。かつこつけてコート着るんじゃないかな。でもコートがあると収納が楽なんだよな。

そんな感じの無駄な思考にしばし入り浸る。煙草がもう少しでフィルターに達すると言う所で、煙草を携帯灰皿にしまった。

これから起こる光景に胸を高鳴らせつつ、男はデパートに足を踏み入れた。

*

なんだかんだ言っても、少し経てば険悪な空気も綺麗サツパリと吹き飛んでいた。今は田中と柚木先輩も楽しそうに談笑を繰り広げている。

田中は白いワンピースを着ていて、おもちゃ売り場にある着せ替え人形のようなだった。例えばが悪いけど、概ねそんな感じなのは変わらない。白いワンピースはドレスのようで、田中はどんな服を着ても着こなせそうに見えたから。それで着せ替え人形と形容詞してみただけど、良い得手妙というか微妙な例えだと思う。口に出したらリアクションに困らせそうなので、心の内に留めておく。

柚木先輩はなんというか、小細工がないって感じ。いやけして、田中が小細工だとかそうゆうわけじゃない。

ただ、なんというか大人の着こなしってイメージ。服のセンスも良いと思う。

田中は何か言いたそうな顔をしていた。けど、すぐに笑顔になって、俺たちは歩きながらたわいもない会話に花を咲かせていた。

時間もそろそろ昼時、俺はデパートの内のレストランに行くことを提案する。ふたりは潔く承諾して、そのレストランに向かうことにした。

*

夏にコート姿でデパートを歩いていても、男に視線を向けるものは少ない。大方、紳士服コーナーで服でも買って早速着ているとか、クーラーが寒いからとか思っているのだろう。

後者のそれは間違っておらず、男は寒さで身体を一瞬ふるわせた。

「……冷房利きすぎだろ」

逆に暑さが恋しくなってしまう。

懐からフィルターのついていない煙草に火をつけると、煙草をくわえた。

男はターゲットを探す。

*

レストランで昼食をとっていた。

柚木先輩はナポリタン。田中はチキンサラダとロールキャベツ。俺はからあげ定食。

……俺だけ和風と言うツツコミはご遠慮ねがいたい。スパゲティとかでは、育ち盛りの腹は起きないわけで。

食事中も特になにがあるわけでもなく、たわいない雑談を交わしながら食を進めていた。

今いる席は窓際で、眼下を見渡せば大勢の人で賑わっているのがわかった。

「ん……」

残り少ないナポリタンを口に運んだ柚木先輩が眉をひそめた。

「生茹でだったんですか？」

口に入れたナポリタンを咀嚼した柚木先輩は、頭を振って否定した。いやまあ、一部だけ生茹でとかそんなにあるわけでもないけど。

「なんだか嫌な気配がする」

「嫌な気配？」

そう言われても、俺は特に感じない。

しかし田中も何か感じ取ったようで、眉を八の字にひそめる。

気配に気づいていないのは俺だけらしく、ひとり首をひねる。嫌な気配と言ってもそんなの、

——悪寒が走ったのはそのときだ。

それは背筋を通過して、脳に情報を伝達する。

とつさにレストランの入り口に振り向いた。そこにはこんな暑い日にコートを着ている男がひとり立っていた。

ヤバいと思ったときにはすでに手遅れ。男は不適に笑っていた。

話かける女性の店員には目もくれず、手を盛大に開く。コートの裾が後を追って揺れた。

「さあ、殺陣を始めよう！」

まさに一瞬の出来事。

突如、室内に風が吹き荒れ、すべてを風払っていった。

男の一言の間に俺は力を発動させた。研ぎ澄まされた視力が見たのは、

まず男の近くにいた店員の身体が何頭分にも切り裂かれ、ただの肉塊になった。

暴風は机を、食器を、人を、オブジェを、壁を、ガラスを、すべて風払った。

暴力的な強風は俺たちにも迫っていた。防ぐ手段など一瞬の間に思い浮かばずもなく、両腕で顔を守ることしか思いつかなかった。

音が微かに遠のき、風が身体を襲った。

固形物が当たったような衝撃に、熱いものが口内へこみあがってくる。

吐き出したい欲求を堪えると、風の音が耳に入った。強固な黒い装甲が裂け、庇っているはずの頬が切れた。

凶暴で見境のない風の猛攻は一瞬で幕を閉じる。しかし、その間の時間は遥かに長く感じた。

気を抜いていれば、身体中ズタズタに切り裂かれて原型を残さなかっただろう。

めくれあがった地面に膝をつくと、砕けた背後のガラスがジャリと音をたてる。荒れた地面に胃の内容物を嘔吐した。

相手の追撃を警戒して、口を拭ってすぐに立ち上がる。そのおり目の端に青い長髪が移った。あれだけの強風にさらされながらも、一房も切れてはいない。

不思議な髪だなと訝しむが、俺は田中と柚木先輩のことを脳裏に思い浮かべて考えを打ち切る。

「ふたりとも……無事か？」

視線を横に移せば、力発動させたふたりが立っていた。田中は惚れ惚れするほど美しい剣を片手に。柚木先輩は服を突き破って、白銀の翼が現れていた。

「大丈夫に、決まって、るでしょう」

息を切らしているが、柚木先輩の強気は言葉に胸をなで下ろした。どうでもいいけど、俺は力を発動すると服が一時的に無くなるみたいだ。力を使っているときは、俺の服はどうなっているのだろうかとも思うが、そんなくだらない考えはすぐさま切り捨てる。

「あなたは……」

さきほど返事が無かった田中が、男をみて呆然と呟いた。

「田中？」

俺の呼びかけは耳に届いてないようで、田中はただ一心にコートの男を見ていた。

暴風の中心地にいながら、男はまったく傷を負っていなかった。何がおかしいのか口元を歪める。

「久しぶりだな——三年前は殺される方と思ったぞ」

言葉は田中に向けられているものだろう。でも、殺されるかと思っただけ？

田中は忌々しげに齒をかみしめている。

「あれだけ血を流していたので、死んだと思っていたのですが」

「俺は血の気が多い方なんでね。それでも死にかけたよ、魔力も九割方消費してしまったからな。まさか座天使が大天使に深手を負わ

されるとはな」

さりげなく座天使と男は言った。確か座天使は俺の魔王、柚木先輩の智天使の次に強力なランクのはずだ。そんなに戦ったわけではないが、間違いなく今まで殺りあつた中では一番の強敵だろう。

「私もあのあと死にかけましたよ。完治するまでに半年もかかりました。……それで、目的はなんですか？ 復讐？」

まさか、と男は両手を開いて肩をすくめた。

「そのルシファー、羽間祐二の始末に決まっているだろう。確かに君には借りがある、だが私怨は二の次だ」

ルシファー。聞き慣れない単語だが、男は俺の名前をあげた。柚木先輩が一瞬眉をひそめたことから、ルシファーとは俺を指す単語なのだろう。

なんで俺が始末されなきゃいけないのか疑問はあるが、それは後で良い。

それより、

「オイ」

思ったより静かな声が出てくれた。男が俺になんたと言うように視線を向けた。

「なんで殺した」

俺の一言を理解出来なかったのか、まゆを歪める。

理解できないのなら、何度でも言ってやる。

「なんで関係ない奴らまで殺したッ！」

今度は声を張り上げた。

レストランの中には数分前までは、幸せそうな人たちに溢れていた。

祝日に家族で買い物に来て、昼飯を食べるためにここへ入った人。もしかしたら子供の誕生日かもしれない。

デートに来ていたカップルだっていたんだ。本当に幸せの絶頂のような顔をして。

注文に追われていた店員だって家族もいるし、恋人もいたかもしれない。

それを、こいつはぶち壊した。

被害はレストランの中だけじゃない。男のうしろに見えるデパート内の光景だって、悲惨な状況になっている。

割れたガラスが落ちて、ストリートの人たちにだって被害が及んでいるはずなんだ。

なのに、

「邪魔だからに決まってるだろ？」

奴はここのたまりやがった。

「力も持っていない奴なんか気にしてどうする。無駄に神経を使うだけだろう。所詮他人だ」

堪忍袋の尾つて物が切れる音を、自分のなかで聞いた気がした。

割れたガラスを鎧を纏った足が踏みつぶした。さらに地面をコンクリートをめくれあがる。

ダンツ、と地面をえぐる音のあと、俺の身体は一直線に男へ向けて飛び出していた。

「オオオオ！！」

一瞬で男との距離はゼロとなり、俺は握りしめた拳を振るった。

17：嘲笑の天使（後書き）

毎日投稿するのも最近慣れて来ました。

つか、一週間連続です。こんなに一気に大量の文章書いたのは生まれて初めてかもしれません。

しかし、今回の話での教訓。

服装の描写がよくわからん。柚木先輩なんて何着てるかわかりやしません（汗）

これからは服装の描写を割合します。だって……ねえ（汗）
服飾の名前も対して知らん俺に服装を書けってのが酷ですよ……。

あと雑談内容も書いてません。休日を友人と過ごしたことなんて、ほぼ皆無なんで（爆）

18：ソロイネン

風を切らずに押しつぶしながら、俺の拳は俺の顔面へ迫る。

男の足が地面を削りながら、二メートルほど後退する。しかし拳は片手で受け止められていた。

「んな――」

「熱くなりすぎるなよ、餓鬼がッ」

次の瞬間、男の膝が鳩尾をえぐっていた。身体を覆う甲殻を突き抜けて衝撃が伝わり息が詰まる。

掴まれていた手を離されて、蹴り飛ばされた。俺の身体は宙を舞い、さっきまで自分がいた場所に転げた。

「先輩、大丈夫ですか!？」

駆け寄ってきた田中に肩を預かってもらいながら、俺はゆっくり立ち上がった。

「女に肩を貸してもらうなんて情けないな」

ああ、まったくだ畜生。

田中から離れて、男を睨みつける。

鳩尾のダメージは正直かなり痛むが、致命傷にはなっていない。

この漆黒の装甲は伊達ではないようだ。

「あなた……今度は殺しますよ」

底冷えするような声がしたと思ったら、それは発したのは田中だった。いつもの穏やかな雰囲気は、今の田中からは微塵も伺えない。

声と視線には明らかな敵意が籠もっていた。もしこんなのを俺に向けられたらと想像したら、それだけで恐ろしい。

俺が思わず畏怖するほどの敵意を向けられているのに、男はまったく平然としていた。いや、平然とはしていない。顔には僅かな笑みがりついている。

「殺す、か。愛とは努々（ゆめゆめ）恐ろしいな。簡単にそんな言葉をはけるようにするのだから」

「黙れッ！」

「いいや、黙らない。黙らせたいなら俺を倒してみろ。このソロイネンをな！」

ソロイネン——それは男の本名か偽名かは分からないが。

さきほどの俺のように、田中はソロイネンへ特攻を仕掛けようとする。

だが、柚木先輩が腕を眼前に差し入れて田中を留めた。

「落ち着きなさい。挑発に乗ったら、無様を晒すだけよ」

挑発に乗って無様を晒した俺。

なかなか攻めてこない俺たちに嫌気がさしたのか、ソロイネンは苛立ったように髪を掻きあげた。

「お前たちがこないのなら……こちらから行くぞッ！」

コートをなびかせ、ソロイネンは両手を左右に開いた。

「避けなさい！」

柚木先輩の声が耳に届いた瞬間、ソロイネンの能力が発動された。

——風。

いや、そんな生易しい物ではない。ソロイネンが最初に発動した物と同じ、暴風。

ソロイネンの能力が風、または暴風を周囲に巻き起こす物なのだろう。

なら、これは避けられない。

田中と柚木先輩は俺とは逆の方向へ逃げている。

間に合うか？

違う。間に合わせる。

俺はふたりへと駆け出す。

暴風が到達するまでに、ふたりの前に飛び出した。

音速を超えた速度で到達した俺へ、ぴったりのタイミングで暴風がぶち当たった。

これは避けることは不可能。なら最善の方法は、一番耐久力のある奴が攻撃を防ぐこと。

建造物破壊用の鉄球が身体に激突したような衝撃。そのあまりの衝撃に吐血してしまう。それでも地面に足をめり込ませて、吹き飛ばされないように耐えぬく。

次に風の刃が残虐に身体を切り裂いていく。露出した顔に無数の切り傷が走る。屈強な装甲にも深く切り刻まれていく。

だけど、風が止むその瞬間まで俺は耐え抜いた。

柚木先輩や田中に教えてもらったことがある。覚醒者それぞれ特有の能力を発動するには、どんな人間の身体にも通っている魔力と言うのを使わなくてはならないと。

もちろん魔力は無尽蔵なわけではない。ゆえに、強力すぎる攻撃は短時間で連続して放つことはできない。

俺の背後に声がかかる。田中か柚木先輩かは判別がつかなかった。しかし言葉なんて今は言わなくて良い。

「——行けえッ！」

ソロイネンをぶっ飛ばしてやれ！

最後まででは、身体中の激痛で言い切れなかった。

でも、ふたりには伝わった。瞬時にふたりは、膝を突いた俺の背後から飛び出し、ソロイネンへ攻撃を仕掛けた。

距離が詰まるのは一瞬。

翅をはばたかせ、柚木先輩が真上から弧を描くように踵をふり落とす。

脳天目掛けて落とされたそれを、ソロイネンは片腕で受け止める。地面に足が沈みながらも、柚木先輩の足を振り払った。

田中はソロイネンの正面に到達していた。振り払うモーションとほぼ同時に、田中は刃を水平に凧いだ。

きらめく白銀の刃は、座天使の名前を冠するソロイネンを殺さんと迫る。しかしソロイネンは、もう片方の腕の肘と膝で刃を挟んで碎いた。

「そんな――」

絶句する田中の腹部に、ソロイネンの容赦ない拳が叩き込まれた。

田中の華奢な身体が地面を転げる。

「デメエ――！」

頭の奥で熱くなるものを感じて、激痛を無視して、俺もソロイネンへ駆け出した。

全身に傷を負った俺より、柚木先輩が再び攻撃を仕掛ける方が遙かに速かった。

翅をはばたかせ、白銀の羽を無数に打ち出す。

打ち出された羽はソロイネンへ降り注ぐ。しかし羽は、ソロイネンの周囲で起こった風にほとんど無効化されてしまった。僅かばかりに残った羽も浅い傷を作るだけ。

そして身を低くした俺がソロイネンへと到達する。

斜め下から突き上げるように、拳を放った。

ここまでの攻防は僅かながら、ソロイネンに隙を作っていた。そこを突いて、俺の拳がソロイネンを打ち抜く！

「ガハッ」

腹部に渾身の拳を放ったが、傷ついた身体での一撃は予想以上に弱い。

俺はソロイネンの肘を顎に喰らい、横へ吹き飛んだ。

人体急所の顎への一撃は脳を揺らすには十分で、意識を持っていられそうになる。しかしそれを意志の力で抑えつけた。

地面を転がる身体を瞬時に起こし、すぐさま戦闘態勢を取り直した。

18：ソロイネン（後書き）

今日は余裕をもって投稿。

V S ソロイネン戦は次話が、その次の話で終了です。

しかしまあ、祐二の攻撃方法は打撃しかありません（爆）か。は。波とか出せたら思いしろそうだなあ、とか思ってみたり。

皆さん、感想をありがとうございました！物凄い励みになりました。執筆意欲が向上しまくりです（笑）

そのぶんプレッシャーも（。d）（
が、がんばりますっ。

ではでは。

19：光の剣・EXCALIBUR・

——強い。

ここまでの攻防でソロイネンには拳一発と、翅による裂傷しかない。対してこっちは、大打撃だ。

俺は暴風のダメージを引きずっているし、田中は剣を折られた。斬ることはできるだろうが、手の中にある剣は元の半分以上しか刀身が残っていない。ほとんどダメージを負っていないのは、柚木先輩くらいだろう。

明らかにこちらの劣勢。打開策を思考するが、良い案なんてすぐには浮かばない。クソツたれが。

拳を受けたところを少しさするソロイネンは、余裕綽々と言った様子だ。

「どうしたその程度か？ ——ならこちらの番だッ！」

瞬間、奴は俺の正面に現れた。

速いッ。

ソロイネンが拳を振るう。

風切り音なんてレベルじゃない、むしろ風を裂く音と共に拳が迫る。この一撃もかなりの速度。

腕の内側を叩き拳を払おうとする。しかし、ソロイネンの腕に接触する寸前で、装甲に無数の傷が走る。

拳の風切り音の正体は、腕と拳を覆う風の渦だった。

払えない拳はそのまま俺の右胸につきたつ。胸部の装甲が面白いように抉れていく。ソロイネンの拳が直接、俺の胸を叩いた。

「ア——」

声を発しようとしても、喉からは空気しか漏れない。

ソロイネンは拳を引くと、そんな俺を嘲るように膝を腹部へとぶち当てる。

回避なんて出来るはずもなく、衝撃に身体をくの字に曲げる。

そして、突然頭を掴まれた。次の瞬間、後頭部がデパートの壁に激突した。

悶えようとしても、ソロイネンに頭を掴まれている状況では出来ない。

「羽間先輩ッ！」

「おっと、動くな。動いてみる、こいつを潰すぞ」

踏み出しかけていた足を戻し、田中は歯を噛みしめている。

後頭部への衝撃は俺の意識を奪い去ろうとする。だが、指が頭に

食い込む感触が、俺の意識を覚醒させ続ける。

「ぐ……あ……」

ヤバイ、こいつ田中が動かなくても殺す気だ。最初から俺の始末だかなんだか言っていたし。

多分、田中もそれはわかっているのだろう。でも、俺が人質になっている限り田中は動かないと確信する。あいつは優しい奴だから。

また暴風を放たれば、この場はソロイネンを除いて全滅してしまふ。

……あれ？

なにか、この場に重要な物が欠如している気がする。

なんだ？　なにが足りない？

その答えはすぐに現れた。

「横ががら空きッ！」

割れたガラスの方から柚木先輩が飛び出してきた。柚木先輩は俺にソロイネンの気が向いているうちに、外に飛び出していたのだ。

……ストリートの人はずいぶん驚いだろうな。

「しまっ、」

翅を羽ばたかせ、全速力で飛び出した柚木先輩の蹴りは見事にソロイネンの顔面を捉えた。

ソロイネンの身体が吹き飛ぶ瞬間、

その腕が柚木先輩の足をつかんだ。

「！」

衝撃で吹き飛ぶソロイネンと一緒に柚木先輩の身体も引っ張られていった。

足に力を込め、ソロイネンの後退が停止する。

そして、掴んだままの柚木先輩を壁に叩きつけた。

「ッア」

あまりの衝撃に柚木先輩の目が見開かれる。

「調子に乗るなこのアマアアッ！！」

目を血走らせたソロイネンは、腕を振り回して柚木先輩を執拗に床や壁に叩きつける。

「やめろ……！！」

柚木先輩を暴力の嵐から助け出したいのに、俺の喉からは頼りない声しか出てこない。比例して、身体が効かない。さきほどの一撃が致命傷だったようだ。

代わりに田中がソロイネンへ飛びかかっていた。

折れた剣を振り下ろすと、刀身の半分がソロイネンの腕に埋まった。

「ああっ？」

しかし、致命傷には程遠い。

興味が田中に向き、柚木先輩から手を離れた。

自由になった身体は地面を転げて静止する。柚木先輩の身体は一向に動き出さない。

気絶したのか、死んでしまったのか。

いや、前者だ。覚醒者同士の戦いで死んだら、身体は消えるはずだから。

田中と腕に埋まる剣を見比べ、額に青筋を浮かべた。

「痛いだろうが、何しやがるッ」

ソロイネンの逆の腕に風が集まっていく。その腕を田中に躊躇なく振るった。

田中は避けようとしてうしろへ飛ぶ。

それでも拳を避けることは不可能。

腕を目の前で交差させて、拳に備えた。

拳は田中の腕に当たると、上にしてあった左腕の肉をえぐった。風によって、柔な肉の繊維はブチブチと千切れていく。

骨に拳が到達する前に田中の身体は、風圧で吹き飛んだ。

「田中！」

地面に倒れた田中は、抉れた傷口を押さえている。

「ア、ぐう……」

指の間からは絶え間なく血液は流れ出る。あれじゃあ、左腕は動かない。それに肉が抉れているんだ。痛みは尋常な物ではないはずで、田中がすぐに起き上がるのは不可能に近い。

なのに、返り血を浴びて恍惚に笑うソロイネンは、ゆっくりと田中に向かっていく。

「いい様だなあ。三年前と今の分を合わせて、お前には借りがあるんだ。……楽に死ねると思うなよッ！」

押さえている手ごと、抉れた腕を踏みつけた。

「アアアアアッ！！」

田中が激痛に声をあげた。

そんな姿を見ても、ソロイネンはさらに足へ力を加える。骨が軋むような音を聞いた気がした。多分、あれ以上力を入れると左腕の骨折れる。しかも、二度と使い物にならなくなる可能性だってある。助けにいきたい。でも、足を一步踏み出すだけで全身から汗が吹き出す。亀にも負ける速度。

畜生、動け！ 動けよ！

俺がいくら叱咤しようが、身体は言うことを聞いてくれない。その間にも田中は激痛に声を荒げ、涙で頬をぬらしている。

「ハハ……」

そんな田中を見てソロイネンは、

「アハハハハハハハハッ！！」

本当に愉快そうに笑っていた。

頭の芯が熱くなる。

脳が焼けているんじゃないかと言っほど、熱く。熱く。熱く。

何が楽しい。

何が可笑しい。

笑い続けるソロイネン。

脳から熱が身体中へと駆け巡る。身体が溶けるような熱い。しかし不快ではない。

これは奴への憎悪。

これは自身への怒り。

何をやっている。

この程度の痛みで俺は何をしているッ。

女の子が苦しみ、泣いているのに。暴力に犯され泣いているのに。

この程度の痛みがなんだ。こんなのは痛みの内には入らないだろう。

田中は、俺のとは比べ物にならない激痛に襲われているのに。

痛みのせいにするな。そんなものにすがりつくな。言い訳をするな。

この程度で俺は死にはしない。

さあ動け。

ソロイネンへ憎悪をぶつけ、欲を満たすんじゃない。

——田中を助けるために！

「オオオオオオオー！ーッ！！」

咆吼。

今いる場所から身体を飛ばす。

駆ける。獣のように。それ以上の速度で。

奴が振り返る。遅い。蠅が止まる。

「セエツ！」

顔面へと俺の全身全霊最大最強の拳を解き放った。

ソロイネンの顔面の前には強大な風の壁。

放った拳の外壁をえぐる。一部、肌が露出した。斬りさかれる。痛みが腕から脳へと伝わってきた。無視。

風の壁は拳の威力を弱めていく。気にはとめない。俺の目的は田中を助けることだ。拳は、当たればいい。

「ハアッ！」

足に力を込めると、地面が沈む。踏み込むことで生まれた力をすべて拳へと伝える。

――突き抜ける。

風の壁を腕が突き抜ける。

拳はソロイネンの鼻を潰し、そのまま振り抜くとソロイネンは遙か後方へ吹き飛んだ。

レストランの外装を突き破り、デパートの通路を転げていった。

ソロイネンへの意識を脳内から消し去り、俺は田中へ向き直って膝を突いた。

「ごめん……遅れた」

目の周りがこの短時間で赤く腫れあがっている。頬は涙でグシャグシャに濡れていた。傷口を押さえていた右手の甲には、靴底の跡がクツキリと残っている。挟めた左腕は、骨が見えそうなほど傷口が広がっていた。

あんなに綺麗だった純白のワンピースは血で汚れ、線の細い身体に汗です吸い付いている。

こんなになってしまうまで、俺はこの子を助けられなかった。

なのに、

「大丈夫、です。ありがとう、ごさい、ました」

そんな俺を責めるでもなく、田中は笑った。

次に顔を真っ青にする。

「羽間、先輩……血が、出てますよ……」

俺の右胸を指差しながら、田中は言った。

確かに右胸へのソロイネンの一撃は致命傷だった。無理をしたせいで、血が流れ出すのは当然。

それでも、田中の傷に比べたら些細な物だ。

なんで、こんなに不甲斐ない俺を心配するのだろう。

田中が傷だからになるまで、助けられなかったって言うのに。

さっきとはまた違う熱いものがこみ上げてきた。

唐突に田中の手が頬に触れた。
「先輩、なんで泣くんですか？」

ああ、俺は泣いているのか。

「ごめん……ごめんな……」

謝って許してもらえないはずがない。それに俺は、謝って自分の責任を無くそうとしている。

みつともない。薄汚い謝罪だ。

こんなに汚い俺を、なにがそつと抱きしめてくれた。

動かない左腕以外を賢明に使って。

「羽間先輩……許します。だから、泣かないでください」

柔らかくて、とても慈愛に満ちた言葉だった。

鉄臭い匂いに混じる甘い香り。

俺は、しばしこの優しさに甘えた。

涙が流れる。

悲しくて泣いているのか、嬉しくて泣いているのか、よく分からなかった。

瓦礫が崩れる音が耳に入る。

「才前ラ……全員殺ス！ 殺して尽くしてやるッ！！」

鼻が潰れて、それなりによかった顔が無惨に潰れた男が叫ぶ。

そんな呪詛の言葉も、安っぽい悪役の喚き以上に感じない。

そつと、田中の腰に右腕を回して立ち上がる。とても軽い身体は、きつと力を使わなくても右腕一本で支えられるだろう。

ふたりで二人三脚のように地面に立つ俺と田中は、ソロイネンを静かに見据えた。

「その目は！ その目はなんだ！ 俺をその目で見るんじゃない！
アアアアッ、死ねシネ死ねええええええッ！！」

錯乱したように叫び、吼える。

ソロイネンの周りで空気が爆発する。

質量を獲得した風がソロイネンの周りで渦巻いた。壁を、床を、ガラスを、机を、椅子を、肉塊になり果ててしまった人を風が巻き上げる。

ソロイネンの周りに渦巻く風は天井を喰い破る。ここは最上階で、砕けた天井から外の光が入り込んできた。

暴風、ハリケーンは俺たちの立っている場所も、すぐに飲み込む勢いで増幅していく。

けれども、俺の心は至って穏やかだった。

目の前の光景に、恐怖はまったく存在しない。

右腕に柔らかい感触と、体温を確かめる。

「田中」

「はい」

スツと田中は右腕をハリケーンへ向けた。

右手の中には折れた剣が握られている。折れてしまったはずなのに、剣は以前よりも増して美しく見栄える。

「羽間先輩」

「なんだ？」

少し顔を動かすと、そこには田中の顔がある。

「私、羽間先輩が好きです。大好きです」

真剣で真っ直ぐな瞳が俺を見ていた。

真っ直ぐ過ぎる瞳と、ほんのり赤くなった頬はアンバランスのようで、とても可愛かった。

こんなセリフを言われたら、世の男子は誰であれ田中に惚れてしまっただろう。

けれど、

「ごめん。俺は、他に好きな人がいる」

それを断った。

こんな素直に俺を想ってくれる子を傷つけてしまっても、やっぱり柚木陽子と言う人物が好きなのだ。自分でも呆れてしまっけど。

残念、と田中は苦笑を漏らした。

「やっぱり柚木先輩には勝てないんですね」

……バレバレなのか。

まあ、俺が柚木先輩に好きだって宣言した場に居たんだもんな。

「でも諦めません。羽間先輩が私を好きになるくらい、良い女になりますから」

「ごめんな、と謝ると、田中は頭を振って良いです、と許してくれました。

田中はごめんな、のもうひとつの意味に気づいたんだろうか。

——実を言うと、俺もお前に惚れてるんだ。でも、柚木先輩にはもっと惚れてる。ごめんな。

ハリケーンは規模を増していく。暢気に会話しすぎたかなと思う反面、でも平気か。なんて思っている。

真摯に田中が俺を見つめる。

「羽間先輩、今だけ……私の左腕になってくれますか？」

俺は田中に微笑む。それはとても自然な笑み。

「喜んで」

剣を握った田中の右手に触れ、一緒に剣の柄に触れた。

「そんな折れた剣でえええッ、俺を倒すつもりかゴミ野郎ガアアアッ！！」

何か喚いている。気にはならない。

俺と田中は渦巻くハリケーンを見据える。

巨大化したそれは少し力を抜くと、吹き飛ばされそうだ。逆説、抜かなければ飛ばされることはない。

負けるわけがない。俺の両手には、彼女がいるのだから。

「キイイリキイイイザメエエエ——ッ!!」

ソロイネンの叫びに呼応して、ハリケーンが俺たちへと轟音を引き連れて迫り来る。

両手に力を込める。

田中を離さないようにと。

剣を、手を離さないようにと。

俺たちは剣を振り上げる。

剣に力を込めて、

「消え去れええええッ!!」

振り下ろした。

魔力。生きとし生きる全ての万物に通うもつひとつの血液。

しかし、本来の肉体の身に余るほどの魔力は何処に行くのだろうか

か？

それは身体の一部を増加、強化することにより魔力を強化した部分へと収納している。

蒼に輝く長髪から、力が流れていくのを感じる。蒼い発光はなくなり、髪は本来の黒と言う色を取り戻す。長い髪が短くなっていく。切らずに短くなっていると感じる感覚は、そう味わえる物ではないだろう。

本来の髪に戻り、感じるのは喪失感ではなく充実感。

身体に魔力が漲っているのがわかる。自分に力があると実感する心地いい感覚。

そして得た力を剣へ流し込む。

力が流れ、剣は魔力に満たされていく。

もっと、もっと、もっと魔力を注ぎ込む。

剣が力に応え、その形状を変質させる。

眩しい。神々しいほどの光。明るい。

白銀の刀身は白銀の光に変わっていた。

光の剣——光で出来た刀身を持つこれにはそんな言葉がぴったり当てはまった。

振り下ろされた光の刀身とハリケーンが激突する。

刀身に当たったいろんな物の残骸が光の粒子となって消滅する。

——祝福を。

壊れた物への祝福を。どうか、次こそは幸せに。そんな田中の心が剣に伝わっているようだった。

激しさを増すハリケーン。それでも、俺と田中を倒すには役不足。

「バカなあ——」

ソロイネンの顔には驚愕が張り付いている。

光の剣は、ハリケーンを、

切り裂いた。

「オオオオオオオッ！」

光の渦が、ソロイネンを、空間を、すべてを——飲み込んだ。

19：光の剣 - EXCALIBUR - (後書き)

妙に長くなりました。つか、疲れたOTL

なんだか某方の指摘通り、柚木先輩の影がかなり薄いです(汗)

もう今回は田中中心の話です。なんだろう、田中がメインヒロインに見えてきたよ(泣)

ちなみに、タイトルのエクスカリバーとは光の剣のことです。なんの捻りもございません。何故エクスカリバーかはFateっぽいので割合。

今日はこんな所であとがき終わりです。

20：過去の亡霊

空を眺めていた。

瓦礫だらけの地面に寝そべっていると、背中がゴツゴツしていて寝にくい。まあ、力を発動させたままだから痛くはないけど。

レストランの天井は、先程の一撃で半分以上消し飛んでしまった。だから青く澄み切った空がよく見えた。

柚木先輩は気絶したままだけど、みんな無事だ。田中は治癒能力を高めるとかで、力を解いて、魔力を左腕に集中させている……らしい。集中だとかそういうのはよく分からない。ただこうすると、治癒能力が向上すると言う田中の弁。

それでも、1ヶ月は腕が動かないけどと苦笑していた。あれだけの怪我だ、当然なんだろう。傷も残るだろうし。俺は田中を傷物にしちまったんだな。……卑猥な響きだが気にするな。

そういえば、今回の戦闘でいったい何人が死んでしまったのだろう。

デパート客と一フロアを巻き込んだ戦闘。一〇〇人は余裕で死んでしまっているかもしれない。

自分が不甲斐なくなる。それに巻き込んだのは間違いなく俺で、いたたまれない気持ちで胸が苦しかった。

でも、俺は殺してしまった人達の命を背負うと決めた。だから、

俺は反省をしても後悔はしない。

遠くからサイレンの音が入った。救急車、パトカーに消防車が重役出勤とはいいいご身分だな。やっぱり、日本の警察は腐っているらしい。でも、今回はそれが幸いしているのだけど。

自分の黒髪を掻きあげる。四肢が痛むなか、ゆっくりと立ち上がった。

「よし、帰るか」

気絶したままの柚木先輩は俺が背負うんだろうな。……正直嬉しいのは秘密だ。いったら、田中に睨まれる。

左腕を庇いつつ、田中も立ち上がった。

「柚木先輩は羽間先輩が背負うんですよね？」

お見通しですか。

俺って、そんなに単純思考なのか？

思わず泣けてくる。

そんな俺をみて、田中はイタズラっぽく笑った。あ、今は絶対わざと言いやがったな。

「早く帰りましょう」

「ああ。今日は疲れ——」

俺の言葉は瓦礫が空を舞う音で中断された。

瓦礫が舞った場所は、ソロイネンが最後に立っていた場所だ。瓦礫の間を縫って、一本の腕が顔を現した。破けたコートの裾が確認できる。

「まさか……っ！」

腕が瓦礫を押しつけ、ひとりの男が姿を露わにした。

当たってほしくない予想は、当たってほしい予想より遥かによく的中する。

そこにはソロイネンがおぼつかない足取りで存在していた。

瓦礫を押しつけた逆の腕は血で真っ赤に染まり、身体は裂傷や打撲のオンパレード。生きているほうが明らかに異常だ。

おぼつかない足取りだが、立ち上がったソロイネンには殺気が満ち溢れている。

「お前ら……よくも俺を虚仮こけにしてくれたなッ」

憤怒で顔を染め上げている。

ソロイネンは多分、いやきつと魔力は残っている。少なくとも、暴風一発分くらいは。

暴風を一発放たれたら、こちらに防ぐ手だてはない。間違いない。

死ぬ。

拳の感触を確かめる。あと一発、拳を叩き込めばソロイネンは倒れるはず。満身創痍なのが端から見ても分かる。問題は、俺の拳が暴風発動より早く届くかだ。

奴との距離はだいぶ離れている。力を使っているとはいえ、今では二、三秒かかるだろう。それにくわえて、暴風は音速。分が悪すぎる。

それでも諦める気なんて更々ないが。

「俺は！俺はこんな所では終わらんぞッ！貴様らを殺して、俺は――」

前口上なんて聞いてやる必要はまったくない。

握りしめた拳の感触を感じながら、走り出しかけ、

「いいや。お前はここで終わりだ」

ソロイネンの左胸から真っ赤な手が現れた。

「なっ！？」

走り出しかけた足を留め、その光景に硬直していた。

真っ赤に染めあがっている手には、潰れた赤黒い――心臓が握られていた。

思わず息が止まり、心臓に幻想の痛みが走る。自分の運命が変革した日を思い出してしまっていた。

自然と早くなる心臓の鼓動と呼吸を必死で押し止める。

血と一緒に掠れた声がソロイネンから吐き出される。それには恐怖と言う感情がありありと浮かんできた。

「フェーラー、様……な、ぜ」

問いかけに答えた声は間違いなく青年のものだ。なのに少年のように、とても幼く感じられた。

「何故？ お前がそれを聞くのか」

顔見えない。けれど分かる。今、フェーラーと呼ばれた奴は確実に、

「お前が柚木陽子に手を出したからさ」

笑っている。

ソロイネンの身体が突然発火し、燃えた。

「ギ、イイイイアアアアアアッ！！」

耳をつんざく絶叫。耳が痛かった。塞ぎたい。聞きたくない。なのに、身体は動いてくれなかった。

獄炎に炙られる身体は、肉が焼けて醜く変質していく。

目は水分をなくして萎んで燃える。

髪は跡形もなく燃えて消え、脂肪と筋肉が燃えて骨だけの身体になって、骨は力を無くして崩れるまえに、塵となって風に吹かれて消えてしまった。

俺たちが辛勝した相手をものの数秒で塵にしてしまった人物が、今はそこにいる。

金色の髪は繊細で綺麗。なのに異様。

子供のように澄んでいる無邪気な双眸。だから残虐。

身につけた服装はシャツにジーンズと、ポピュラーなものだけに、とても怖い。

「フェーラー……サタンツ」

近くから言葉だけで呪い殺す気が、と思うほど殺気を込めた女性の声が聞こえた。

それはとても聞き覚えがある声で間違いようもなかった。

それは、気絶から立ち直った柚木先輩のものだった。

柚木先輩を見てフェーラーは卑しく笑った。

「よう久しぶり。三年ぶりだなあ陽子」

無駄に親しげな声に柚木先輩は舌を打つ。

「ふざけるなッ！ わたしがどんな思いで生きてきたかわかったうえで、そんな口を聞いているのかッ！」

計り知れない怒り、そうゆう類のものが柚木先輩の声色から伺えた。

柚木先輩はあいつを知っているのか。向こうも柚木先輩を知っているようだ。

俺には三年前に何があったかはわからない。このふたりしか知り得ないことなんだろう。

柚木先輩にとって、生きる意味に等しいことが三年前に起こったと言っことも分かった。

「はあ？ まだ根に持ってたのかよ。三年も前だぜ、いい加減あんな奴忘れて俺の女になれって……ん？」

こいつは三年前をどうでもいいように踏みにじりやがった。その時になにがあったかなんて知らない。だけど、こいつは三年前を知っていてなお笑ってやがる。

気づけば俺は、あいつから遮るように柚木先輩の前になっていた。

さっきまでが嘘のように恐怖はなく、変わりに怒りが残っている。

「祐二……？」

背後から柚木先輩の不思議そうな声がかかる。それは敢えて無視。

「おいおい、ルシファーもどきがなんのようだよ？」

問題は奴だ。

息を肺いっぱい吸い込み、声を張り上げた。……ストリートの人には聞こえませんが。

「いいか耳の穴かっぽじってよく聞けクソ野郎ッ！俺を差し置いて、柚木先輩に俺の女になれた？ふざけんじゃねえぞッ！身の程を知れ！」

その場に沈黙が落ちた。

……自分でも、このタイミングで言う言葉じゃないのは分かっている。けど、こいつには言うておかなければ気が済まなかった。

「ゆ、祐二？いきなり何を……」

「あ、あの羽間先輩？」

女性陣がふたりが呆氣にとられたように、しどろもどろに言葉を紡いだ。

て、また告白を田中に聞かれてしまった。

「く、ハハッ。ハハハハハッ！ちょっとお前最高！いきなり告白かよオイッ！」

フェーラーが腹を抱えて笑い出した。自分で言ったとはいえ、相手にまで笑われると非常に恥ずかしい。

やがて笑いが空気に溶けていくように、消えていく。

フェーラーが顔を上げると目尻に涙が浮かんでいた。そこまで笑うなよ。

「ああ、笑った。そこらの芸人より面白いわ、お前」

目尻の涙を拭い、

「だけどな——調子乗ってると殺すぞ」

奴の目が猛禽のように鋭さを増した。

20：過去の亡霊（後書き）

眠いです。

集中力が続かずに後半は文章が（汗）

なんだかリズム感がありません（爆）

ではまた明日。

21：幻想夢

背筋を這う寒気がフェーラーの危険さを間接的に告げてきた。だけれど、ここで退くわけにはいかない。いくら俺が弱体化してと言っても、一応俺は最強ランク。視力に感覚を集中すれば、相手の動きを見逃すはずはない。

「お前今、俺の動きを見えると思ってるんだろ」

フェーラーの胸元に下がる、赤黒い石を付けたペンダントが薄く煌めいた。

刹那、

目前にフェーラーが仁王立ちしていた。

驚く間もなく、腹部にフェーラーの五本の指が突き立てられる。熱を持っているらしい指は、軽々と強固な漆黒の防壁を溶解させ、内の身体に指が接触した。

「アアア——ッ!？」

高熱が腹部の肌を焦がし、肉を焼く。その激痛は脳に電気ショックでも送り込まれたように、鋭く痛覚を刺激した。

いったい何百の高熱を持っているのかわからない指で、思考が蹂躪されていく。ああ、こいつの能力は炎を操るんだな。とか脳の隅で考えるが、そんなのはまったく意味をなさない。

フェーラーが嘲笑うように、地べたを這いずる虫畜生をみて愉悦するように、笑う。子供のように無邪気な笑みは、この状況を明らかに楽しんでいる殺人快楽者のモノに違いなかった。

「お前は知らないだろうがな——俺も魔王だ」

最初はなんの話か理解できなかった。魔王？ なんのゲームだよでもそれは、自分も魔王級、つまり最高ランクの覚醒者だと言っているのだ。

確かに、ソロイネンとは格違う。視力を研ぎ澄ましていたのに動きがまったく見えなかったのだから。

魔王とはこんなに強いものなのか。俺とランクは同じなはずなのに。戦闘能力は段違い。

「じゃあ、脆弱さに絶望したところで死ね」

瞬間、全身を燃え盛る炎に包まれた。

もはや口から言葉は漏れない。炎が俺の周りの空気を燃焼させ、酸素が肺に入らない。変わりに炎が入りそうだった。

俺のものではない絶叫。柚木先輩と田中のだろうか。それともフェーラーの驚喜？ 今の俺にはそれさえ理解不能。

目を焼かないために瞼を閉じていた。最後の理性がそうさせているんだろう。

身体が燃える。走行はろうそくのように溶解していき、肌を高温

が炙る。

露出した肌が焼け爛れていく。

意識が炎で犯されていく。身体中を舐めつくしていく高温が感じられなくなっていた。もうそんな神経も消えかけているのかも知れない。それでも、身体が訴える。

——熱い。

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱いッ！！

もう待っているのは、死。

——こいつに殺されなければいけないのか。

そんな言葉が脳裏をよぎる。よぎっただけで何も起こらずに、炎はなおも俺を炙り続ける。

肌に何かが触れる。

まだそんな上等な神経が残ってたのか。我ながら関心してしまう。触れたのはなんだろう。焼けて折れた腕か、身体が形を消していつてるのか。感触が背中から広がっているあたり、首が折れて背中に頭が当たったのかもしれない。

バカらしい想像しか浮かばず、自嘲する。口ではできないので、内心だが。

耳元で声がした。

「……祐二」

ついに幻聴まで聞こえてきた。しかも柚木先輩のじゃないか。俺の偶像の柚木先輩が形を成してくれでもしたのか。ああ、想像の柚木先輩なら俺に優しいのかな。死ぬ間際に柚木先輩の声を聞けたし、思い残すことは、

「……祐二」

——あれ？

おかしい。肌に触れている感触が柔らかい。まるで人肌のようにだ。

耳元で声ができる。直接耳に届き、脳が音を拾っていた。

ま、さか。

未だに燃え尽きてない俺は腕を伸ばす。背中へ伸ばした腕は、確かに人間のものである肌に触れた。

「——ッ！？」

おいおい、嘘だろ？　なんで柚木先輩が炎のなかにいるんだよ！

「な……何してんだよ、陽子！」

さすがに予想外だったのか、どうなのか、殺人快楽者なフェーラ——も狼狽していた。

柚木先輩はその声には耳を貸さない。ただ——俺の身体を抱きしめている。

そんなわけないけど、痛みが消えていく気がする。身体は燃え続けているのに。

「祐二……こんなんで死ぬんじゃないわよ……」

ああ、死にやしませんよ。クソツ、何が思い残しがないだ。ありまくるじゃないか。柚木先輩を残して死ぬなんて、御免被る。

だけど意志に反して、四肢にはまったく力が入らない。もう閉ざした瞼を自ら開くこともままならなかった。

「クソツ、白けた」

炎は身体から跡形もなく消滅した。

俺の足から力が抜けて、倒れそうな所を柚木先輩が受け止めてくれた。

「あー、白けた白けた。また殺しにくる」

辛うじて開いた俺の瞳が捉えたのは、悔しげに唇を噛み締めて去っていく青年の姿。だが、それもすぐに怪しい笑みに変わった。

大勢の足音が階段から登ってくる音が耳に入る。

遠くの方で柚木先輩と田中の声を聞きながら、俺の意識は闇へと沈んだ。

＊

——夢を見ていた。

ただ悲しくて虚しい、青年になりかけていた少年の夢。

少年の感情は俺の感情とでも言いたげに、俺と少年の感情はシンクロしていた。

昔はみんな四人だった。

彼女が笑い、彼が笑い、あいつも笑い、俺は三人の話題を上手くいなして悪乗りを防ぐ。

彼女は長い黒髪がとても綺麗で、美しくて、知的な雰囲気醸し出していた。でも知っている。冷静沈着を装っていても、感情の起伏は人一倍激しいことを。笑うときは、それはとても可愛く笑うことを。

彼はメガネを掛けていて、少しばかり顔立ちが幼かった。彼は知らないが、その顔立ちで年上、年下の女性になかなかの人気を誇っているのだ。勉強が出来ることも要因のひとつだろう。でも、知っている。こいつは人一倍、影の努力家だと言うことを。

あいつは外国からの留学生だった。髪を金色に輝き、瞳は気紛れな猫そのものだった。イタズラ好きな騒がしい奴で、誰隔てなく親しくしている。特に俺たちとは親友だ。命令されるのが嫌いで、先輩には煙たがられていた。けど、今年は俺たちが最上級生なので心配はない。

俺は……こいつを知っていただろうか？

勝手に思いこんでいただけかも知れない。

あの一時はとても楽しかった。でも今思うと、俺たちは出会わなかった方がよかったかも知れない。もしくは、俺が——にならなければ。

少年の言葉が突然欠落した。重要な言葉な気がするのに、そこだけが空白で埋められる。

彼女と彼はいつの間にか付き合っていた。……いつの間にか、ではない。俺は確かに彼に宣言されていた。

僕は——に告白する。

再度の欠落。欠落部分の答えはすでに知っている気がするのに、何故だか思い浮かばない。

彼女はそれを潔く承諾した。ふたりは完璧なまでに両思いだったのだから。

彼女と彼がふたりで行動し始めてから、俺たちの関係は次第に壊れていった。

こんな、こんな力に逃げなければ、

彼女を、悲しませてしまうことなんて、なかったんだ。

目の前が白く霞んでいく。

——夢から覚める時間だ。

待つて！ 待つてくれ！

発声器官のない俺からは声が発せられない。

お前はだれなんだよ。

答えは無論帰ってこない。

21：幻想夢（後書き）

タイトルの読みは『げんそうむ』……で合ってると思いますよ？（え

さて、そろそろ伏線を開放しなきゃいけない頃合いです。多分次辺りでかたられるんじゃないでしょうか。

……ん？どんな伏線張ったっけ（爆）

えー……では、今日はここまでで。

感想・ご意見お待ちしてます。

22：起きればそこは（前書き）

すいません。今日は私用で時間をとれなかったので、文字数が超短いです。

22：起きればそこは

やけに薬臭い匂いが鼻についた。

無理やり室内を清潔にしている匂いに眉をしかめると、うつすらと目を開いた。

最初目に入っただのは、これまた真っ白な清潔感漂う天井だった。ここが何処かと考えようとしても、目覚めたばかりで脳がなかなか動き出さない。

何処からか秒針が時を刻む音がしている。

しばらくしても動き出さない脳に腹がたってきた。白いシーツから出した包帯だらけの手で頬を抓る。

痛たたたたた……。

ようやく目が覚めてきた。まさか俺がこんなに低血圧だとは思わなかったな。

目が覚めたことで、現状を理解し始める。身体は包帯だらけで、左手には点滴の針。それに漂う薬臭さ。間違いない、ここは病院だ。多分気絶した後に救急車で運ばれて来たんだろう。

ひとまず起き上がろうとすると、節々に激痛が走った。

「いつう……」

痛みで起きあがれずに、頭をふたたび真っ白なまくらに沈めた。

もう一度起き上がろうとする。また激痛が全身を突き抜けた。構うものかと腹筋に力を込め、上半身を起こそうとする。だけど、腹筋だけでは起きあがれそうにない。腕で身体を支えながらで、やっと上半身を起こすことに成功した。

無理をしたせいか身体が痛んだが、先ほどの比ではないので平気だった。

ふと、視界に白以外の色が入った。そちらに目を移せば、そこにはパイプイスに座って、瞼を下ろしている柚木先輩がいた。

しばし啞然。

締め切られたカーテンからは明るい日の光が侵入してきていた。明るさから考えて朝頃だろうか。柚木先輩が寝ているということは、少なくとも一日は経過しているわけで。

……俺は柚木先輩と一夜を共にしたと言っわけですか。

「どうしてももう少し早く目覚めなかった俺え……っ」

早く目覚めてどうなるものでもないけど、なんかかなり惜しいことをした気分。夜の病院で男女がふたり……卑猥な想像が脳裏を大量によぎる。

いや、夜中に目覚めてたら柚木先輩帰ってるんじゃない？　と言う考えに突き当たって、妄想は儚くも散ってしまった。

でもなんで柚木先輩、わざわざ泊まり込みなんてしてくれただろう。首をひねって思考してみるも、妥当な答えは一向に見つからなかった。

そうこうしているうちに、柚木先輩がうつすらと目を開けた。

虚ろな瞳が俺を捉えると、数回まばたきをして意識を完全に覚醒させた。

「ああ、やっと起きたのね。いったい何日眠り続ける気かと思ったわ」

そう言いながら憎まれ口を叩きながら、柚木先輩は僅かに口元をほころばせていた。

「おはようございます、柚木先輩。もう何日も眠り続けるわけ……何日？」

なんとなく次の言葉がわかった気がした。まあ予想通りの言葉が柚木先輩から返ってきたわけで。

「そう。三日三晩眠り続けてたのよ、あんた」

うそーん。

身体の痛みが増した……絶対増した。思いこみでなくて。

23：彼女の悩み

肩に重みを感じつつ落ち込んでいると、突然手を掴まれた。

「柚木先輩？」

「動かないで。……多分痛いわよ」

へ？ と俺の口が発する前に柚木先輩が、腕の包帯を勢いよく肘のあたりまで剥がした。

炎症した肌に張り付いていた包帯が剥がされる痛み、俺は奥歯を噛みしめた。目の端に涙が滲む。そりやもう、かなりの激痛だ。もっと丁寧にしてください柚木先輩！

柚木先輩の細い指が素肌を露出した腕を滑った。痛いけどくすぐったく、なによりその突然の行動に驚いて顔を熱くした。

「い、いきなり何を！？」

俺の言葉に耳を貸した様子もなく、柚木先輩は柳眉をよせて俺の腕を見つめていた。

ぼそりと呟く。

「……治ってる」

「……治ってる？」

治ってるって何のことだろう、と首をひねって、痛みに顔をゆがめた。もしかして治ってるって、火傷のことだろうか。

「なにが治ってるんですか？」

「……火傷よ」

「いや、まだこんなに……」

柚木先輩が首を左右に振る。

「違うわ。もうこれだけなのよ。三日前のあんたの火傷はこんな物じゃなかったわ。もっと酷くて……生きてる人間の肌と思わなかったもの」

苦々しげに柚木先輩がうなった。

包帯から露わになった腕は確かに赤く腫れているが、柚木先輩が言ったような面影はほとんどない。

そんな風に言われても、ひどく現実味がなかった。

それと、と言って柚木先輩が人差し指を立てた。

「あの子、由里奈が見舞いに来たらお礼言っときなさい。彼女あんなのことですごい心配してたんだから」

「田中が？」

「そうよ。あのあと、一晩中泣き続けてたんだから。泊まり込むっ

て、聞かなかったのよ？ わたしが泊まるって、ことで家に返したけど。学校もあるし」

告白した相手が、その日のうちに死にかけたら、ショックなんだろうな。俺も柚木先輩が死にかけたら、卒倒してると思うから。

心労を負わせてしまった田中には、ちゃんとお詫びをしておこう。

……あれ、『わたしが泊まる』？

まてまて。前後の文脈からいろいろと検討しよう。うん、これってつまり柚木先輩は三日間も止まっててくれたと！？

しまった、柚木先輩と夜を三回も過ごしてたのかっ。あれ、つまり今の柚木先輩は三日間同じ服を！？

「……目が血走ってるわよ」

「そんなことはありません！」

「言っておくけど、一日一回は家に帰ってたから」

なんでみんな、俺の考えがわかるんだよ！

俺の嘆きは、虚しく心の中でこだまするだけだった。

*

病室の扉が開かれたのは、それから半日ほど経過した夕方の五時頃だった。

扉からは制服姿の少女、まあ田中だ。が、入ってきた。心なしか田中の周りだけ暗い気がする。面会時間をとくに過ぎていて、明かりが少ないだけが原因ではないだろう。

田中は無言のまま、後ろ手で扉を閉めた。未だに俺の寝た振りに気づくことはない。

腰を丸椅子に下ろした田中は、俯いてリノリウムの床を見つめている。きっかり三分ほど経って、嗚咽が聞こえてきた。

気づくと思ったけど、流石にこれ以上は酷だろう。つか、なんでこんなことしてんだ？

上半身を痛みには耐えながら起こすと、田中の頭にぽんと手を乗せた。

「え……」

顔を上げた田中は、ハムスターのように目を丸くしていた。現状が理解できていないらしい。

だから髪を流すように撫でて、

「おはよう」

と笑ってみた。火傷が残る顔で笑っても、うまく出来た自信はないけど。

田中が現状を理解して、涙腺を決壊させた。堰を切って涙が溢れ出してきた。

「羽間先輩ッ！」

田中が俺に抱きついてきた。正直かなり痛いんだけど、言わないのが花だろう。

胸に顔をうずめて嗚咽を漏らす田中をできるだけやさしく抱きしめてやる。

着替えを取りに行ってる柚木先輩が帰ってきたら、どう説明しようかな。なんて考えつつ、身体を這う激痛を無視し続けた。

田中が泣き止むまで、およそ一〇分の時間を要した。

*

目の前には扉がある。中の様子は扉の隙間から伺い知ることができた。

中では祐二と田中お互いに包容しあっている。しかし、よく見れば分かるが、これは嗚咽を漏らす田中を祐二が落ち着けている行為だ。祐二のことであるから、他意は無いと思われる。

この状況を理解しているのに、柚木の心の中では言葉で言い表せない不思議な感情が渦巻いていた。

まさか、嫉妬？ バカらしい。なんでわたしが嫉妬なんてしてないはならないのか。

その気持ちの行方がわからなくて、柚木は苛立たしげ扉を開いた。

＊

勢いよくスライドされて開けられた。扉と枠が当たって、ダンツという大砲さながらの轟音が病院に響いた。その音の発信源は間違はなくここであり、俺と田中は弾かれたように離れた。

ついさきほど泣き止んだ田中と一緒に、恐る恐る扉の方に視線を向けた。

「なに？」

そこには服を着替えた柚木先輩が仁王立ちで存在していた。眉が思いつきりつり上がっているというか、絶対怒っているのに無理やり声を抑えているのが、恐ろしさを倍増させていた。って、いうか、あんなに勢いよく引き戸開けたらガラスが割れ……てない。防火ガラスか何かか。

それにしても、なんでこんなに怒ってるんだ柚木先輩は？

視線を横にそらして震えてる田中とアイコンタクト。なんだか知らんが、ヤバいぞ！ 田中はど、どうにかしてください、と助けを求めてきた。ごめん、無理。

何故かそんな俺たちが気に食わなかったらしく、田中が座り直したのとは違う丸椅子に腰を下ろした。不機嫌オーラが余すことなく放出されている。

この状況から脱するには、柚木先輩から話すようなネタを振ればいいはず。俺は話のネタを探して、気になっていたことを口にした。

「柚木先輩って……あの金髪、フェーラーを知っているんですか？」

23：彼女の悩み（後書き）

回復力の速さは伏線……なのかな？説明を忘れたらどうしょ（汗）

なんだか、30話行きそくな気がする刹那でした。ではでは。

24：真相解明

ビクリと、一瞬だけ柚木先輩の肩が震えた。それを合図に柚木先輩から垂れ流されていた怒気が消滅する。

これは、何かある。

「そ、そうです。私も気になってました」

田中が俺の問いに便乗してきた。ナイス援護射撃。

「それとルシファアとかサタンとか何ですか？ …… 柚木先輩ひとりだけ知ってるみたいだし」

ついでに他にも疑問だったことをぶつけてみると、柚木先輩の顔が俯いた。すこし肩が震えている。十中八九、柚木先輩は何かを隠しているようだ。

「前に柚木先輩から話してくれるまでは聞かない、そう言いました。でも、今回ばかりは我慢できそうにありません。なんだか柚木先輩にも危険がありそうじゃないですか」

確かに屋上の時は聞かない、と言った。だけど、柚木先輩に火の粉がふりかかるような事なら問答無用で聞き出す。そう決めていた。

柚木先輩はすこし顔をあげた。目は髪で隠れて確認できないけど口は見える。

何かを言おうとして口を開けるが、柚木先輩は結局何も言わずに

口は閉じてしまった。

一分ほど経過しても柚木先輩の口はたまに動くだけで、言葉は一向に紡がれない。早く聞きたいのは山々だが、決して急かさない。無理に答えを急かされると、逆に喋りにくくなるからな。

俺の考えがわかっているのか、田中もけして喋ろうとはしない。

病室は重い沈黙に支配された。数が少ないセミの鳴き声がやけにうるさく、耳へと届く。

さらに数分が経過したとき、消え入りそうな声で、だけど今の病室にはよく響く声で喋りだした。

「……あれは、小汚い覚醒者。それだけよ」

話してもらえるかと思ったけど、そんなにうまくはいかなかった。けど諦めずに少ない柚木先輩の言葉から会話の糸口を探し出す。

小汚い覚醒者、前に屋上で覚醒者を侮蔑する暴言を吐いていた。しかし、最近はこの手のことを口にしたことはない。つまり奴は、柚木先輩の覚醒者への嫌悪に少なからず関係していると言うことだろう。

「柚木先輩の、その……覚醒者への嫌悪は、あいつが原因なんですか？」

自分自身の言葉に、なんだか詰問しているみたいで気分が悪くなった。

俺の推測に反して、柚木先輩は首を左右に振って、それを否定する。

「違う。覚醒者を嫌悪だなんて、してない」

「なら、『小汚い覚醒者』なんて言っただんですか？」

「覚醒者が憎いとか、そんなじゃないわ。憎いのは、サタンと……ルシファーだけよ」

サタンとルシファーに僅かな間があった。

確か柚木先輩はフェーラーをサタンと呼んでいた。ルシファー……は一応俺を示していたはずだ。確かに勢いで田中に怒鳴っているのとは違って、俺には憎悪のような感情を向けていたが気がする。つまり、柚木先輩は俺を憎んでいるのか？

憎まれるようなことをした覚えなんて、もちろんまったくない。

柚木先輩の返答に気が重くなるのを確かに感じる。けれど、理由を知るために質問を続けることにした。

まずはサタンとルシファーについて考えてみる。柚木先輩から聞き出すのは骨が折れそうだから。

なんでサタンとルシファーなんて、フェーラーと俺が呼ばれるのか。あの僅かな時間に対面したフェーラーと俺の共通点を模索する。

サタンとルシファー……確かゲームとかで、魔王とかラスボスで結構見かける名前だ。魔王……確かフェーラーも魔王級の覚醒者と

言っていた。俺とフェーラーの共通点は魔王級と言うこと。少ない情報では、これ以外はわかりそうにない。いったん思考を止めて、それを柚木先輩にぶつけてみる。

「サタンとルシファー。これは魔王級のあいつと俺を示している単語と考えて良いんですね？」

「え？ ええ、そうよ……」

饒舌に語った俺に驚いたのか、柚木先輩は顔をあげた。

どうして憎んでいると言われて、それを平然と口にできるの？

柚木先輩の目から、そんな言葉を問いかけられたような気がした。

饒舌に語った自分に俺もすこし驚いたけど、別に平気ってわけではない。しかも柚木先輩に推測が肯定され真実になったのだ。内心かなりへこんでいる。だけど、この程度で落ち込んではいられない。俺には知らなければいけないことがあるのだから。

サタンとルシファー。強大な力を持つ魔王の名前。皮肉られて付けられたような名称を記憶に刻んで、質問を再開する

「それでフェーラー、サタンの方がいいですか？ ……サタンとはどういう関係なんですか？」

柚木先輩はまたしても言葉を詰まらせた。言すべきなのか、言わざるべきなのかを。

数秒の沈黙。意を決して、柚木先輩が口を開いた。

「サタンは、わたしの高校での同級生」

高校の同級生？ それはおかしい。

柚木先輩は現役高校生。

それに対してサタンの顔つきは、すでに青年のものだった。高校の先輩だった、ならわかる。けど、同級生と言うことは同じ学年で一緒の学校にいないといけない。記憶力がいいほうではない俺には、高校の生徒をすべて覚えるなんて芸当は到底できない。それでも、あんな目立つ奴が先輩にいたなら絶対に覚えてるはずだ。

このことをを尋ねようとしたが、柚木先輩の言葉はまだ続いていた。

「そして——わたしの恋人の仇」

一瞬、

最後の単語が理解できなかった。

24：真相解明（後書き）

未だに病室から抜け出せません。どうも、今日も今日とて刹那です。

この病院から舞台が移った途端に、一気にラストバトルまで駆け抜けます。多分、少々強引な展開になるでしょう。

ちなみに現在の悩みは、当初の予定通りにハッピーEDか、適当に思いついた傷だらけの帰還EDにするかだったり。後者はいろいろとなあ……パクリっぽい気がしないでもなかったり。

感想・批評 お待ちしております。

25：ルシファー

恋人の、仇？

恋人がいたことに関しての驚きはさほどなかった。柚木先輩ほどの人なら、男のひとりやふたりなら付き合ったことはあるだろう。だけど仇って、

「彼は死体も残らなかった。覚醒者同士の戦闘だったから」

恋人が覚醒者だったことに驚愕させられた。だが、それよりも注目するべきは覚醒者が死ぬときは身体が消滅するということだ。

それは、つまり、

——柚木先輩は恋人の死を目撃してしまった。

俺の背後で、田中も絶句しているのが気配で伝わってきた。

どんなに残酷で辛い事なのかは、まるで想像ができなかった。目の前で恋人が、愛する人間が強大な暴力に立ち向かい、蹂躪され、蹴散らされる。そして身体は空気に溶けるように消滅してしまったときの想い。

想像なんて、出きるはずがなかった。

愕然と、言葉を紡げない俺に、柚木先輩はもう目を向けていなかった。ただ唇を噛みきれんばかりに噛み締め、リノリウムの床を睨んでいた。

白く、清潔に整えられた床には、照明が反射しているだけのはずだ。それでも柚木先輩の目はどこか遠くを見つめているようだった。

喉の奥から唸るような声が漏れた。

「……シファーが……宏一が、戦いなんて挑んでこなかったら、あんな事にはならなかったのに……」

柚木先輩は、そのときのことを思い返していたのだろう。唇を噛みしめている。

……待て。宏一が挑んでこなかったら？

記憶を探るが、柚木先輩の口から漏れた名前には、聞き覚えがなかった。こんなに自分の記憶力が不甲斐なく思ったことはない。

いや、それより気になるのは宏一が挑んでこなかったら、というところだ。柚木先輩の恋人を殺したのはフェーラー……サタンのはず。しかし柚木先輩の様子からは、宏一もサタンも同列に憎んでいるように見える。

サタンと宏一。どちらが柚木先輩の恋人と戦ったのか……違うな。両方と戦ったのだろう。なら状況は二対一だったのか。そしてきっかけを作ったのは、宏一と言われた人物。

それが分かれると新たな謎。柚木先輩はなんで宏一と言う名前を知っているのか。わざわざ名乗ったわけでもなさそうだった。そして宏一をサタンのように異名で呼ぼうして、言い直していた。俺は異名なんて、サタンとルシファーしか知らないけど。

なぜだか、胸が締め付けられるように苦しくなった。突き放されたような虚無感が心を支配する。だが、俺はそれをすぐに振り払った。なんで俺がこんな感情を持たなければいけないのか。

問題は宏一の異名だ。最初は声が小さくて何を言っているのか聞き取れなかったけど、ルシファーと言ってるように聞こえた。

ルシファーは俺を差して、宏一は柚木先輩の仇のひとり。思考を凝らしてみても、ルシファーと宏一の共通点は到底見つかるはずもなかった。俺は宏一と言う人間を知らないのだから、当然かもしれない。

宏一について、柚木先輩に尋ねたい。だけどそれは、過去の傷をさらに蒸し返すみたいで気が引けた。

考えに没頭していて、気付けば柚木先輩の身体はもう震えてはいなかった。

唐突に柚木先輩が口を開いく。

「……祐二。アンタにも関係ある話だから、言っておくわ」

声色はいつもの冷静な柚木先輩のもの。なのに無理やり閉じ込められたような、少し触れれば壊れてしまいそうなほど、揺らいでいた。

「アナタの使っている力は……本当は生まれつきあったアナタのものではないの」

柚木先輩の言葉に注意を払っていなかった俺は、一瞬理解するのが遅れた。

「ちょっと待ってください！」

やっと意味を理解して、柚木先輩に尋ねようとしたら、田中が声を荒げた。

「覚醒者の力は生まれつき持っているもののはずです。本当の力じゃないとか、そんなのおかしい」

「分かってる。だから話すわ」

俺が口を挟む間もないままに、柚木先輩が語りだした。

「祐二は確かに力を持っていた。だけどそれは、最弱の天使クラスのもの。魔王の力を祐二が手に入れたのは、三年前よ」

——三年前。

今思うと、最近の俺の周りには三年前と言う言葉が溢れていた気がする。

「三年前にわたしの恋人——雪村樹が殺された。そのときに樹を殺した人間も死んだのよ」

淡々と事実を語る声は、妙に落ち着いている。それが少しばかり怖く感じてしまった。

「そのとき死んだのが、わたしのクラスメイト……牧村宏一。ルシ

ファアの覚醒者よ」

「……ルシファアの、覚醒者？」

「そうよ。つまりアナタが使う力の本来の持ち主。宏一は樹に戦いを挑んで、戦いの最中に乱入したサタンに樹と一緒に殺されたの」

話に理解が追いつかない。

柚木先輩を入れた樹さん、宏一、サタンはクラスメイト。宏一は理由が何かは知らないが、樹さんに戦いを挑んで、隙をつかれサタンに殺された。こう言うことなのだろうか？

「でも、なんでルシファアの力を俺が……」

一緒だけ、柚木先輩の眼孔が鋭くなった。だけど、それもすぐに消え、また淡々と語り始める。

「宏一は、力を使うと戦いを楽しむ戦闘狂になるの。さらに力を使いきると、力を使わなくなつて戦闘狂の一面が現れるようになった。……宏一は死んだときに、自分と性質が似通っている覚醒者にルシファアの力を与えたのよ」

「つまり、それが俺」

柚木先輩はなんの感慨もなさそうに頷いた。

自分と性質が似通っている人間に力を与えた。それはつまり、俺が覚醒者で戦闘狂になる可能性が一番高い言うことだ。

戦闘狂。ふと、海での一件を思い出した。確かあのときの俺は、あの二人組を叩きのめした。しかも楽しんで。

これで納得がいく。柚木先輩が俺のことを監視し、憎悪した理由が。そんな危険人物を監視しない理由がどこにある。身を持って知った柚木先輩には、その危険性が身に染みているのだから。それに、恋人を殺す一端となった奴の力を使う奴なんて、憎いに決まっている。

だから柚木先輩は海であんなことを聞いてきたんだろう。なんだか、バカみたいだ。柚木先輩と話せるようになって浮かれていた自分が。

「デタラメを言わないでくださいッ！」

田中が身を乗り出して、柚木先輩の胸ぐらを掴んだ。失意の俺には止めることができなかった。

「力が他人に移るわけがない！ デタラメな推測を振りかざさないでくださいッ！」

掴まれた本人は驚いた様子もなく、首をふった。柚木先輩は自らの手に視線を移す。

目をそつと細めて、

「この力だつて……樹のものだから」

田中は胸ぐらを掴んでいた手を緩めた。正確には緩んだ。

場は重い空気の独壇場と化した。

25：ルシファー（後書き）

最近、手抜き文章が目につきますね（爆）

ここで新たな伏線、回収しなかった伏線などがあります。伏線回収仕切れるかなあ？ 忘れないか不安だ……。

なんだか後半はグダグダしましたが、また明日。

26：去らば、白き箱

また、夢を見ていた。

きつとこれは、宏一の記憶なんだろう。今度の俺は宏一と感覚を完全に共有していた。

目の前には消えていく死体と消えない肉塊。

漂う腐臭の中で俺は笑っている。堪えられない笑みは、やがて大きな歓喜へと変わっていた。

愉しかった。この上ない達成感が心地よかった。

目の前の死体を見下ろす。思わず口を手で覆う。

なんで俺は笑っているんだ。

なんで覚醒者じゃない死体が存在している？

このときに気づいたのは、自分自身が殺人を楽しんで、関係ない人を殺した事実。

宏一は苦しんでいたんだろう。日に日に変わっていく自分に。そしてきつかけは、彼と彼女——樹さんと柚木先輩。

変わっていく自分に恐怖していた宏一。それに手をさしのべたのはサタンだった。宏一はそれを受け入れてしまった。

四人の時間はなくなり、樹と柚木、俺とフェーラーで行動するようになった。

樹が憎かった。俺にはできないことをして、俺が手に入れられないものを手にしたこと。楽しかった日々はもう戻りはしない。それはすでに思い出に変わっていたから。

憎悪が内から這い出ようと蠢いた。憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い。

殺してやる。俺は、樹を、彼を殺す。

なのに、なにに何故、

——俺の手の中で柚木が死んでいるんだ。

俺の意識が宏一から引きはがされた。手を伸ばしても、夢の俺には手は存在しない。

わからない。

宏一の手の中には、血にまみれた柚木先輩の身体が横たわっていた。心臓を何か太い物——例えば腕に貫かれたようにして。間違いなく、完膚無きまでに柚木先輩は絶命していた。

だけど、柚木先輩は今も生きている。

なあ、教えてくれ、宏一。アンタの手に入れられなかったものってなんなんだ。このあと、いったい何があったんだよ。

俺の問いは、虚しく虚空に消え去るだけ。それはそうだろう。これは宏一の記憶の残滓、答える人物はすでにいない。

でも、答えが返ってこなくても、これだけは聞きたかった。

アンタはもしかして――だったのか？

答えはやはり返ってはこない。

*

あれから二日が経過していた。

柚木先輩の泊まり込みはあれ以来なくなり、お見舞いに来てくれることもなかった。

田中は泊まると言い張ったが断っておく。火傷も睡眠をとる度に良くなっていたので、心配をかけたくなかったのだ。……理性を保てる自信もない。

そして日曜の今日は俺の退院日。これでクソマズい病院食とはおさらばだ。

ちなみに、完治したと言うわけではない。けれど、前代未聞の再生力は火傷が目立たないまでに治癒してくれていた。もちろん言わずもがな、医者達は目を丸くしていた。果ては、一部の医者やナーズには化け物扱い。間違っちゃいないのがアレだけど。

きつとこの驚異的な治癒力はルシファアの賜物だろう。確か田中が魔力で治癒力を早めていたから、睡眠中に魔力を治癒に回してい

たようだ。田中の傷は治りきっていないのに、もつと重症だったはずの俺はもうこの状態。魔王の魔力はそれほどまでの力があるんだと、改めて実感させられた。

しかし、今日伝えられたことだけど、俺の持ち物は炎で全焼したらしい。つまり、財布とか携帯やらがなくなってしまったと言うことで。俺的には精神的ショックが凄まじい。

病院の入り口にいた田中がこちらに手を振って、駆け寄ってきた。柚木先輩の姿はない。少しばかり期待していた俺は肩すかしを喰らった気分だ。

「羽間先輩、退院おめでとうございます！」

「ありがとう」

そう言って、田中が満面の笑みをを見せてくれた。しかし俺の様子に気づいて、田中はかわいらしく首を傾げた。

「どうかしましたか？ 病院生活って、そんなに辛かったんですか？」

病院食はつらかったけどな。量が育ち盛りの俺には少なすぎるし、一回だけゲテモノみたいな料理が出てきたし。なおかつ味付けが酷い。二日間だけだったけど、今なら自分で作った料理がレストラン級に感じるだろう。

「確かに病院食は酷かったけど……その、柚木先輩がいなくなつて」

田中の顔を直視できずに目をそらす。いきなり二人きりのときに、

別の女の話なんてされたら嫌だと思っし。

恐る恐る横目で田中の表情を見てみる。怒るとか悲しそうとか、そんな顔ではなかった。目を白黒させて、啞然としていた。なんだか、俺が的外れなことを言ったようなりアクション。やっぱりマズかったのか？。

「柚木先輩って……先輩なら、横にいますけど」

え？ 田中の横を確認するが、左右どちらにも柚木先輩の姿は無かった。

「違いますよ。羽間先輩のとなりです」

視線を横に向けるが、そこには誰もいない。老人や親子が診察待ちのソファーに腰をかけているだけだった。なんとなく、視線を下に向けると苛立たしげに眉をひそめている人物。紛れもなく柚木先輩だった。そしてバツチリ目が合う。

「……なに？」

「いやその、なんでもないです——っか、なんでいるんですか！？」

「退院するから来たのよ。なにか問題でも？」

いやまあ、来て欲しかったけれど、不意打ち気味な登場は正直ビビります。

二日前の面影を微塵も残していなかった柚木先輩に安堵しつつ、

俺は病院を後にした。

ただひとつ。夢の中で見た柚木先輩の姿だけ、脳裏に焼き付いたかのように離れなかった。

26:去らば、白き箱（後書き）

ムリやり気取ったようなタイトルです。ネーミングセンスが欲しいっ（爆）たまに、神が舞い降りたかのような名前を思いつくんですけど（え

ちなみに『箱』は逆コの字に甲が入ってるのにしたかったんですけど、はこで変換できませんでした。他になんて読むっけか……。

はい、結構長く病院にいましたが、ついに退院です。実は病院なんて、父親のばあちゃんに会いに行っただけで入院経験はありません。故に無駄に臭いことしか覚えてません。

……って、いうか、俺が言った病院は汚かったんだけど。都会の病院なのに木々に囲まれて暗いし。

さて、ついにラストスパートです。……お楽しみに（？）

27：日常の中の非日常

翌日。

俺は学校に来ていた。いや、月曜日だから学校に来るのは当たり前なのだけれど。それにしても、先週は月曜しか学校に出席しなかったから、今日で二回連続の月曜日と言った感じで、なんだか奇妙な感覚だった。

教室の雰囲気は、近い夏休みに向けて、その手の会話で賑わっていた。今度どっか行こうとか、宿題写させてだとか。ここ最近でいろいろとあった俺は、夏休みの存在を忘却しかけていたりする。夏休みの存在を思い出したら、急に夏休みが待ち遠しくなった。さあ、早くこい大型休日！

脳内で章に宿題を写させてもらいつつ、夏休みを遊び倒す計画を立て始めるが、すぐに思考を中断させた。

今現在の問題にサタンと言うものがある。奴は俺を狙ってくるだろう。入院中に襲われなかったのが奇跡に近かった。それをなんとかしないと、俺の自由を獲得することはできない。

だけど、あんな化物に勝てるのか？

同じ魔王級なのに、段違いな力。これはつまり、他人の力であるルシファアを俺が使いこなせていないってわけだ。

考えれば考えるだけ、泥沼に足を沈めていつてる気がする。ため息をついて、机に突っ伏した。とりあえず考えるのはよそう。

「なにため息なんてついてんだよ。似合わないぞ」

頭上から声がかかった。まあ、とても聞き覚えのある悪友の物だった。

「心外な。俺だって悩みごとくらいあるわ」

「恋わずらいか？」

章がからかうようなニュアンスで言った。あ、こいつ絶対に楽しんでやがる。口元で笑ってるし。

……一応、悩みには恋わずらいもあるんだけどさ。柚木先輩には樹っという死んだ恋人がいる。柚木先輩は樹さんをずっと思い続けているんだろう。じゃなきゃ、復讐なんて考えても実行しようとはしない。

何処にも俺の入る隙なんて存在しえなかった。だいたい柚木先輩が俺に近づいたのは、俺がルシファーだからであって、俺自身ではなかったんだから。

最初から恋が成就するとは思ってなかったけど、現実に変更して直面すると陰鬱になるものだ。

そんな俺を知ってか知らずか、章はいつものように気軽に喋りかけてくる。だけど、今はそれが、日常が堪らなく心地よかった。

「んで、三日も学校バツレてたけど、なんかあったのか？」

「バックレてねえ。寝てただけだ」

病院で。

「学校サボんなら、もっとマシなことしろよ……」

「例えば？」

「それはだな、」

「オチが読めたからもついい」

「まだ何も言つてねえって！」

二人してゲラゲラと笑った。

周りの連中は笑っている俺たちには特に注意を払わない。それは、ここが笑っていて不自然じゃない場所だから。バカな話をして笑ったり、たまに真剣な話をして一緒に悩んでみたりするのが当然のここ。こうして笑っていたのが、何年も前のように思えた。俺は教師が入ってくるそのときまで、ひたすら笑い続けた。

*

昼休みになると、変わらずに柚木先輩と田中が俺の教室にやってきた。クラスの連中もはや慣れたようで、ふたりと俺に注意を払う奴は極少数だけだ。

俺はもう来ないかと思って、章と侘びしい食事を送ると覚悟していたんだが。でもよく考えれば、柚木先輩が俺を監視して、田中が柚木先輩を見張ると言う行為が続くかぎり、この状況は無くならな

いと言っわけか。

俺は章との会話を切り上げると、柚木先輩と田中に合流した。今日の食事場所は花壇側のベンチらしい。……嫌な出来事が脳裏を掠めるが、まあそれは無視しよう。あのときの事は思い出したくない。

花壇の周りに設置された多数のベンチには、何組ものカップルが座っていた。うわぁ、なんだかイチャイチャオーラ全開なんですけど。って、なんか女の子同士で弁当食べ合ってるグループが……。

前回とは違い、周りを見回す余裕がある俺は様々なものを見てしまった。もしかして、柚木先輩と田中はこんな状況の中で暴れまわったと!?

恐るべし女人ハート。

俺たちは空いたベンチを見つけて、真ん中が俺、右手側が田中、左側が柚木先輩の順でベンチに腰掛けた。

「あ、羽間先輩。ちょっと作り過ぎちゃったんで、食べて貰えますか?」

購買に行くのも億劫で、通学路にあったコンビニで買った焼きそばパンを開けようとしている時に、田中が俺に弁当を差し出した。紺色の布で包まれた弁当は、とても輝いて見えた。

「お、ありがとな」

「どういたしまして」

ニコニコと笑顔を顔に浮かべる田中から弁当を受け取る。ちなみに言うと、前に食わせてもらった田中の弁当は、コンビニに売っているのよりも遙かに美味だった。

料理が得意で、こんなに尽くしてくれる奴はそう居ないだろう。田中を振るような見る目がない奴がいたら、俺は殴り飛ばしている………そういえば、振ったのは俺でした。

弁当の包みを開いて、蓋を外すと中には料理のオンパレード。出汁巻き卵にきんぴらゴボウ。唐揚げ、ポテトサラダ。極めつけに、冷え切っていても美味そうな白いご飯が詰まっていた。

まずは、出汁巻き卵とご飯を頬張る。出汁の染みた卵焼きと、ご飯が口の中で絶妙に絡みあう。まさに最高の味わいだ。

よく味を噛み締めた後に飲み込むと、満足げに息を吐いた。食事で幸せだと思えることはそうないと思う。ベタな嘘までついて渡されたこの弁当には、愛のエッセンスが仕込まれているんじゃないかと勝手に想像。

「お茶もどうぞ」

魔法瓶から紙コップに注がれた麦茶を受け取ると、お茶を喉に流し込んだ。ちょうどいい苦味と、冷たさが夏の暑さを吹き飛ばしてくれた。ここまで用意周到とは恐れいる。いい嫁になるのは間違いないな、田中。そんな時は、心の底から祝ってやろうと、これまた勝手に決心してる俺。

「もう話してもいい？」

俺の隣でクリームパンを頬張っていた柚木先輩が声を上げた。柚木先輩が弁当じゃないのは、朝から料理するのは面倒だかららしい。俺は柚木先輩の料理を見たことがないので、少しばかり興味があったりする。

田中は少し不服そうだったけど、しょうがないと柚木先輩の言葉を促した。柚木先輩が話そうとしているのは、あいつの事に違いはない。

事実、俺の予想に違わず、柚木先輩はサタンのことについて話始めた。

「サタンの今後のことだけど……。きっと近いうちにまた現れるわ」

「でしょうね。しかも、俺を狙ってきそうです」

「ええ、そうね。だから今日からは、登校、下校時はわたしと……」

「私もお供します!」

「……由里奈と一緒に行動してもらっわ」

「わかりました」

柚木先輩の申し出を俺は潔く受けた。ここで変に意地を張ったって、無意識だからだ。

それに一人の時にサタンに襲われて、勝てる見込みなんてまったくない。だから柚木先輩の申し出はとても頼もしかった。

「どうせなら、羽間先輩の家に泊まり込んで……」

「由里奈。あんな小さい部屋で一緒にいたら、サタンじゃなくて祐二に襲われるわよ」

「冗談になってませんよ、柚木先輩っ！」

「わ、私は別にそれでも……」

「そこでもじもじしながら、顔を赤くするな田中あつ！」

シリアスな雰囲気は田中からの一言で完膚無きまでに砕け散った。でも深刻な雰囲気は気を重くして、精神的につらかった俺は田中の冗談に心を励まされた。

…… 本当に冗談だったのかは、この際言及しないことにする。

27：日常の中の非日常（後書き）

ちよつと時間的に足りないかなあ？と思って、書きたい所まで書き切れませんでした。やろうと思えば出来たかも知れませんが、推敲に手が回らなさそうだったんで。

で、今回も未だに日常の中です。もし戦闘シーンを期待してくれている方がいたら、すいません。日常シーンばかりです。しかも、その日常シーンの描写がヘタだと救いようがないです。

それでは、また明日。

28：宣戦布告

スピーカーから伝わる鐘の音で、今日の授業が終了したことを告げた。

放課後。早速三人で帰宅することになった。……と改めて言ってみるものの、別に三人で帰るのは初めてじゃないわけで。俺は章に夏休みの宿題を写させてもらう約束を取り付けて、集合場所であるげた箱に急いだ。

げた箱に到着すると、柚木先輩が先に来ていた。田中はホームルームが長引いているらしい。

俺はげた箱からスニーカーを取り出すと、上履きから履き替えて田中を待った。

一〇分が経過しても、田中が現れる気配は一向になかった。

「……遅いですね」

「……そうね」

沈黙。

ふたりきりになると、妙に気まずい。会話のネタが見つからないというか、むしろ話かけるなと言われているような。ああ、田中よ早く来てくれ。

すると、俺の悲痛な願いが通じたのか、階段を急いで駆け下りて

くる足音が耳に入ってきた。助かったと安堵して、でも聞こえてくる足音に首を傾げた。

階段からひとりの女生徒が現れる。まだ少し中学生の面影を残しているあたり、田中と同じ一年生だろう。まあつまり、結論を言うのと降りてきたのは田中ではなかった。田中を期待していた俺は、ガクリと肩を落とした。

階段を降りた女生徒は何故か俺と柚木先輩の方に駆けてくる。柚木先輩になにかようだろうか？

しかし予想は外れて、女生徒は俺の前で足を止めた。

「なにか用？」

「あ、はい。由里奈ちゃんから伝言が」

「伝言？」

「『茶道部の部長に捕まって、どうやっても逃げられそうにありません。だからふたりで帰ってください』……だそうです」

茶道部の部長って、あの女部長か。なんだかよく分からないけど、素質を発見した生徒をしつこく勧誘することて有名な人だったり……。田中が茶道なんて覚えたら、完璧に大和撫子になる気がするから、部長が目を付けるのも無理はない。

田中の伝言（もとい嘆き）を伝えてくれた女生徒にお礼を言っと、俺たちはふたりで帰宅することにした。女生徒が去ったあと、柚木先輩がポツリと言葉を漏らした。

「……あの人に捕まるなんて災難ね」

「……同感」

俺が田中にできることは、心の中で応援してやることだけだった。
がんばれよ、田中。

*

忘れそうだったが、頑張るのは俺も同じだったりする。

柚木先輩と二人っきりの帰り道。すこし前ならよっしゃー柚木先輩と二人つきりだつ！ と、内心ガッツポーズを決めていたのだけ
れど。

今の俺と柚木先輩の間にあるのは重い沈黙だけだった。

……气まずい。

柚木先輩の話かけるなオーラは健在で、話かけることなど出来なかった。その前に会話のネタなど、今日はいいい天気ですね、しか浮かんでいない。ちなみにこの台詞をさっき言ってみたら、もうすぐ日が沈み始めるのになに言ってるのよ、と一蹴された。

もはやこの状況は苦痛でしかなく、一刻も早く自分の住むマンションに到着してくれないか、と足を動かし続けた。

ここの角を曲がればマンションは目前だ。というところで、背筋に悪寒が走った。思わず足を停止させる。この、細胞が脳に危険だ

と訴える感覚。

柚木先輩に視線を送れば、同じくこの悪寒に気づいているようで、俺の視線に頷いた。この先になにがあるか、それはだいたい想像できている。

恐怖で足が竦みそうになるが、それをこらえる。どっちみち遅かれ早かれ起こることだ。どうせなら早い方がいい。

自らに言い聞かせながら、俺は角を曲がるべく足を踏み出した。その俺に動揺を見せた柚木先輩だったが、意を決したのか俺と同じく足を進める。生唾を飲み込み、俺は角を曲がった。

そこにいた者を見た瞬間、胃がキリキリと締め付けられたのを感じた。

輝く金色の髪に、猫のように鋭い双鉾。サタンが立っている場所までは、僅か一〇メートル弱。奴からすれば、ないに等しい。俺のうしろで柚木先輩も緊張で固まるのが分かった。同時に湧き上がる怒りの感情も。

「サタン……ッ！」

長年の憎悪が籠もった声。しかし、サタンはそれをもろともせず、不適に笑みを浮かべたまま。

「よう、陽子。六日振りだな」

親しい友人に言うように、柚木先輩の言葉を軽くいなした。確かにサタンと柚木先輩は友人だったようだが、それはもはや過去の話

だ。

サタンの言葉使いが逆鱗に触れたらしい。柚木先輩がサタンに殴りかかるうと、拳を握りしめた。

柚木先輩の掴みかかってきそうな様子に、サタンが困ったように両手をあげた。

「おっと、ストップストップ。今日はお前に会いに来たんじゃないねえんだよ。そのルシファーもどきに用があんだ」

サタンの視線が俺に向いた。ルシファーもどきと言う言葉に俺は眉をひそめた。

だがサタンはそんな俺に気づいた様子はない。

「……俺になにか用かよ」

「ああ、お前にようがあんだよ。お前、陽子からオレのこと聞いてんだろ？」

「ああ」

「なら話は早い。オレがルシファーを殺したのはよ、俺と同じクラスの力を持つてるアイツが目障りだったからさ。つまり、ルシファーの力を受け継ぎやがったオマエも邪魔なんだよ」

簡単に言うと自分に匹敵する力を持つ俺が邪魔ってことか。勝手なこと言いやがる。自分の方が強いと分かっているクセに。だけでもっと気になることがあった。

俺と同じクラスの力を持ってウザかったから。

気に喰わない。俺は柚木先輩の恋人を殺した宏一の肩を持つつもりはない。でも、あいつは苦しんで苦しんで、手をさしのべたサタンにすぎた。なのに、それをウザイで切り捨てやがった。

「それで、だ。オレとしてはルシファーもどきのオマエに死んでほしいんだよ。そうしたら、安心して暴れ回れんのよ」

「……暴れ回る？」

「そうさ。オレは覚醒者の犯罪支援団体なんてものを作ってるのよ。まだ所属してる奴は世界で一五人にも満たない。だがこれで十分なんだよ、一般人を殺しまくるには。ルシファーの力を持ったオマエが消えれば、気兼ねなく世界中で殺戮の限りを尽くせる！」

サタンは両手を広げて、滔々と自分自身の理想語った。奴の一挙一動が気に喰わない。

「なんで人を殺す？」

あくまで冷静になろうと声を抑えて尋ねた。俺の問いに迷うでもなく、あっさりとサタンは答えた。

「決まってるだろ？ 楽しいからだよ！ 弱者が地面に這いつくばって命乞いをして、そいつを殺したときの絶望に染まった顔ツ！ 肉が燃えて、血液が蒸発する臭い！ それを気兼ねなくできるなんて……想像するだけでたまらねえ」

——決まりだ。

こいつはただの殺人快楽者で、人間の神経なんて微塵も持ち合わせちゃいない。完璧に俺の逆鱗に触れやがった。

俺の中で憤怒の感情がとぐろを巻いているのが分かった。宏一と言う人間を裏切って殺し、人を絶望させ、それを嘲笑うサタン。あのときのように、恐怖という感情は一瞬で消え去った。恐怖なんて感じていた自分がバカに思えてくる。

「……けんな」

怒りのボルテージがすでに臨界点を突破していた俺は、自然と言葉を漏らしていた。

「ああッ？」

聞き取れなかったらしいサタンが眉をひそめる。今度は聞き逃させはしないように、息を吸った。

「ざけんじゃねえって、言っただよこの猫目野郎がッ！」

この時点でどうやら怒りが爆発した俺は口が悪くなるとやっと自分で理解した。が、それを止めるつもりは毛頭ない。

「なにが人を殺すだ……簡単に言っただよけんえよ！ 人を殺して愉悦に浸るなんて、人間のクズがやることだッ！ オマエ単に構ってほしただけじゃないのか？ まあ人を殺しまくれば、いやでもみんなオマエに構うよな。けどな、それを楽しいと偽って、その行動をしているオマエはただの寂しがり屋な弱虫なんだよッ！！」

自分で言っている言葉が分からなくなってきたが、どうでもよかった。ただ怒りをサタンにぶつきたい。それだけしか頭にはなかった。

あらかた暴言を吐き連ねると、サタンの目がつり上がっているのが分かった。別に怖いとは思わない。この場で今すぐに戦闘が始まっても負けるつもりはない。

俺は身構えて、サタンの行動を見つめる。こんなのでサタンの動きを捉えられるとは思わないが、やらないよりマシだ。しかし俺の予想に反して、サタンはなにもしてこなかった。

「……いいぜ。そこまで言っんならやってやる。三日後……この近くにある工場跡で相手をしてやる」

「今すぐやらないのか？」

「そうしてえのは山々だが、オレも暇じゃないんだよ」

「そこに俺が行かなかつたらどうする？」

「オマエの周りの人間でも殺すさ」

「デメエ……」

怒りに震える俺をみて、サタンは鼻で笑った。

「あばよ」

たった一言だけ言い残したサタンは、音もなく姿を消した。

28：宣戦布告（後書き）

久々にギリギリ投稿です……。

今日は徳島のはあちゃんが家に襲来して、小説に時間が取れませんでした（しかもばあちゃんは一ヶ月まで家に泊まります）。

でも、ここまで書いておかないとキリが悪いっ！ と無理やり書き上げました。おかげで後半はグダグダです。すいません…… って、毎回謝ってるなあ俺。

それでは、次の戦闘がラストバトルです。ではでは。

29：廃工場潜入

三日、というものが過ぎ去るのは意外と早いものだ。

翌日、帰宅道であつた出来事を田中に伝えて謝られたり、章と雑談を交わしたりしているだけで、あつという間に今日が三日目だった。時間の流れは人の感情によつては絶対ではないと、改めて相対性理論を自覚させられた。

そして今、学校を仮病で休んで、工場跡へと向かっている。今考えると、サタンは時間までは指定していなかった。なのでどのタイミングで行けばいいかはわからない。

なのにこんな時間から向かっているのはとりあえず、サタンは気が短そうだから、と言う理由だったりする。もしサタンが朝のことを指していたのなら、学校に行っている俺たちに痺れを切らして暴れ回るかもしれない。まあ、こんなときにイタズラに注目を集めるようなことをしないとは思うが、あながちないとは言いい切れなかった。

早く行くに越したことはない。昨日三人で出した結論はこうだった。

もうすぐこの街唯一の廃工場、秋田山製鉄工場に到着する。この秋田山製鉄工場は危険な機械類をすべて撤去し、なのに取り壊されなかった工場だったりする。噂によれば、取り壊しの資金をケチつたらしい。セコい話だと内心呆れるが、周辺には民家がないため、お陰で誰も人を巻き込まずに済むのでこのときばかりは感謝する。

そして、サタンがいるはずの廃工場にたどり着いた。

と、思ったら廃工場の入り口前に三人の男が仁王立ちしていた。

男三人がこちらに気づき、

ニヤリと笑った。

「——こいつら覚醒者だッ！」

俺の絶叫とほぼ同時に俺たちが飛び出した。目標は間違いなく俺たちで、移動速度は人間では到底だせるものではない。

俺たちも力を発動させて、奴らを迎えうつ。

男のひとりが美しく白銀に煌めく剣を宙から音も無くとりだした。田中が使う物と同一の物で、柚木先輩に聞いた話だと大天使しか使えない剣らしい。つまりあの男は大天使クラス。

他の二人にはまるで変化が現れない。だが力は常人を遥かに凌いでいるから、最低ランクの天使だろう。

天使がひとりずつ柚木先輩と田中に向かい、大天使は俺へと掛けてきた。

「大物頂きイッ！」

大天使が俺へと切りかかってきた。近くで見ると男の顔立ちはある男性のそれだった。こんなことにかまけてる暇があったら、社会に貢献しろってんだ。

大天使の剣を俺はいとも簡単に掴むと、手首を捻って刀身をへし折った。今までこんなことはなかったと言わんばかりに、男の顔が驚きにゆがむ。

未だに素人な俺でも理解できた。こいつの動きは力に任せて、適当に剣を振るっているだけ。きっと今まで自分より弱い奴か、さもなくば虐殺しか行っていなかったんだろう。

そんな奴に遠慮なんて生まれるはずもなく、俺の拳が大天使の心臓を貫く。男は一瞬で絶命し、死体は溶けるように消えた。

柚木先輩と田中の方も一瞬で片が付いたらしく、二人とも無傷だった。俺は宙に向かって叫ぶ。

「出てこいサタンッ！」

意味もない叫びに見える。だけど聞こえるはずだった。わざわざこんなのを俺たちにけしかけたのだから、何処かから見物でしているはずだ。

予想は見事に的中し、廃工場の方からサタンの声が響いた。

「へー、なかなかやるじゃねえか。でも簡単に殺して良かったのか？」

「あんな程度にやられてたまるか。それに俺は命を背負うと決めた。今更躊躇なんかするか」

それが殺人快楽者なら尚更、迷うことはない。

「とんだ偽善者だ」

「勝手に言ってる」

しばしの沈黙。

「まあいい。俺はこの最上階のフロアにいる。とつとときな」

それっきり、サタンからの言葉はなかった。

ふう、と柚木先輩が息を吐いた。

「この調子じゃ、あの中にもこんなのがいそうね」

多分この連中はサタンの犯罪者支援団体とかの連中だと思う。こ
の中にも俺たちと言う獲物を牙を剥いて待っているに違いない。

「こちらを消耗させるつもりでしょうか？」

「ただ単に戦いを鑑賞したいだけよ」

サタンとの面識がそんなにあるわけじゃないが、俺も柚木先輩に
同感だ。例えこっちの消耗を誘うつもりだったとしても、サタンに
とっては二の次だと思う。俺の直感がそう感じたのか、それともル
シファーの力が告げたのかは分からない。まあ、サタンならこちら
の消耗を誘わなくても勝てそうなものだし。

「ここでのこの言っても仕方ない。行くしかないんだからな」

この一言で自分に気合を入れ直して、廃工場の中へと足を踏み入れた。

29：廃工場潜入（後書き）

今回は文字数短いです……（爆）

今日はあとかきのネタが思いつかなかったり（汗）日付が変わった
ら、今日はまた更新するかも？

30：廃工場戦闘

敵の襲撃を警戒しながら廃工場にゆっくりと足を踏み入れた。

錆びた鉄の臭いと、長年放置されていてできたカビの臭いなど、不快な臭いばかりが鼻孔に入り込む。俺はむせそうなのをムリヤリ押し込める。

割れた窓から朝日の光が入り込むが、宙を舞う埃をキラキラと照らすだけで、工場の中を照らすには不十分だった。

暗闇に向かい目を細める。視覚に魔力を集中させて、暗闇が支配する空間を凝視する。本来見えないもののように目に力を込めた。

視界が広がるような清々しい感覚が脳に伝わり、工場の中の状況がすべて確認できた。

その中には動き出した覚醒者の姿も見つけた。

「前に一人、左右に二人ずつッ！」

隠れていた覚醒者の肩が跳ね上がった。まさか見つかるとは思わなかったらしい。俺の力を舐めすぎて油断したのか、それとも敵のことを教えられなかったのか。なんとなく後者な気がする。

そして先ほど動いていた人物——きつと囃役だろう覚醒者が前方から飛び出してきた。

一瞬目を疑ったが、出てきた人物は女性だった。まあよく考えれ

ば、ただ単に女性と相対したことがないだけで、女性がいても不思議ではないのだから。

女性は、両手に刃を黒光りさせる片刃の剣を持っていた。大天使の剣とはまるつきり正反対。確かこの二本の剣は権天使の目印だったはずだと、脳の隅で考えていた。

俺は二本の剣を腕を交錯させて受け止める。ズツと刃が少し鎧に沈みこむ。とんでもない切れ味だ。確か権天使は力天使の一ランク上だったつけ。

よく見れば日本刀に見える剣……いや、刀を受け止めながら声をあげる。

「左右の奴らは任せたッ！」

田中が右に、柚木先輩が左に飛び込んでいった。刀を受け止めてからの一連の動作はすべて一瞬のうちに終了した。前の俺だったら、こんなに早い対応は出来なかっただろう。

二対一を椎ってしまった二人のことが気になるけど、今は目の前の相手に集中する。こいつは、さっきの三人とはまるで比べものにならない。

権天使の女性が一旦後方に下がり、間合いを測りあった。

距離は凡そ五メートル、ふたりには無いに等しい距離。しかし、攻撃のタイミングによっては命とりになるだろう。あの刀の切れ味は相当なものだった。

女性が動くたびに、肩より少し下の辺りまで伸ばされた黒髪が揺れる。壮麗な美女と形容詞しても良いであろうこの人が、何故サタンに荷担するのか理解できない。

「なんでアンタはサタンに協力する？」

俺は、襲ってくる覚醒者を殺す覚悟は海の時に固めた。だが無駄に殺生をするつもりは毛頭ない。だから、女性に俺は尋ねた。

返ってこないとも思ったが、女性の口からは答えが返ってきた。

「絶望したのよ、この世界に」

「なんで？」

言葉を交わしても隙を作らぬようにと、気を緩めることはしない。

「この世界に生きる人たちは、皆自分勝手に生きている。ひとりひとりに感情と言うものがあり、個性を持って生きているのはいい。だけど、皆自分の価値観を押し付けあって、相手を踏みにじって生きていく。自然も壊すし、世界も壊す。後で産まれてくる人間の迷惑を省みない。そんな人間たちなんてウンザリ。どうせなら一回滅ぶべきだと思うの」

声質からは真剣な思いがひしひしと伝わってきた。これは本気の決心。けして揺らぐものではないだろう。

この女性は二十代後半といったところか。俺より何年も多く生きて世界を見ていて、そして導きだした答えなのかもしれない。だけど、そんな解決は絶対に間違ってる。

「それは間違ってる」

「そうだと私でも思うよ。だけど一番手っ取り早く人を救える」

「俺はアンタほど生きていないけど、それでもやつぱり間違ってる」

再度の否定に女性の動きが止まるが、そこに隙はない。剣術でも習っていたのだろうか。

ふたりの間に沈黙が落ちる。柚木先輩と田中が戦っている轟音が耳に入った。本来こんなことをしてる場合ではないんだろうけど、俺は動けなかった。

女性がふたつの刀を再度、力を込めなおして強く握る。

「私だって世界のすべてを見たわけじゃない。二十年程度で理解できているわけでもない。それでも、苦しんでいる人間が世界中にいる。なら、まずは腐った世界を変えるべきでしょう」

俺は迷わず首を振った。

「それは違っただろ。なんで世界中の人間を助けようなんて思うんだよ。なんで高望みなんてするんだ。まずは目の前の人間を助ければいいだろう？ 確かに世界は腐ってるのかも知れない。だったら壊すんじゃなくて、次の世代が幸せになれるような世界にしようと思えば良いだろ！ なんで簡単に投げ出すんだよッ！」

「うるさい、お前に何が分かるッ！」

「分からない！ だから、分からないなりに自分が正しいと思ったことをするんだッ！ だから俺はサタンを倒すためにここへ来たんだ…… だからここを通してくれ」

「断らせてもらっ」

「なら、倒す」

もう言葉はいらない。

人間ならば、主義主張が食い違うのも致し方ないだろう。だから戦う。自分の意志を貫くために。

何を合図にしたわけでもなく、俺と彼女は一生に前へと飛び出した。

「はあッ！」

武器を持つぶん相手の方が間合いが広い。片手にもった刀を斜め上から振り下ろす。

まともに受けてはダメだ。俺は拳で剣の腹を叩きあげ、刀の軌道を逸らした。髪の毛が数本切れて宙に舞うが気にしない。

次は俺の番と、拳を振り抜いた。空気を切る轟音と共に女性の顔面へ迫る。

しかしそれをもろともせず、上体を逸らして交わした。女性のもう一刀が俺の腕を切るべく振り降ろされる。

魔力を腕の一点に集中。刀が腕に食い込みが、装甲に傷が入っただけ。

牽制に蹴りを放つと、舌打ちと鳴らして後ろに跳んで避けられた。もう間合いを取り合う時間はない。

俺たちはただがむしゃらに前へ進むため、足を踏み込んだ。

二刀の刀を交差させ、そのまま×字に振り降ろしてきた。俺は迷わず前進する。防御はせずに拳を引き絞る。

首の装甲に漆黒の刃が触れる。刃は吸い込まれるように装甲に埋まっていく。同じ漆黒のため、まるで刀と鎧が一体化してるようにも見たが、凄まじい切れ味で装甲を裂いているだけだ。

それでも俺は前進し、前へ足を踏み込む。刃が首に到達する寸前、俺は力の限り手加減なしに拳を振るった。

お互いの全力の一撃。

地面に落ちる音。

俺は女性を見下ろしている。彼女の刃が首に到達した瞬間に俺の拳が、顔面を捉えていた。

「肉を切らせて骨を絶つとは……よく言ったものね」

仰向けに倒れた女性は天を仰ぐが、そこには汚れたコンクリートの壁しかない。

まだ彼女の手の中にあつた刀が音もなく消失する。

「私の負けか……。やっぱり、間違つてたのね」

「さあな」

俺も上を見上げた。やはりそこには汚い天井しか存在していない。

「最後は自分で決めろ」

無責任ね、と女性の言葉を最後に彼女は声を発しなくなった。死んではおらず、単純に気絶しただけ。

確かに無責任だと自分でも思う。さっきは彼女の考えを全否定したけれど、俺には人の考えを否定する資格なんてない。いや、世界中の人間にだってありもしない。だから最後に自分で決めると、無責任に言葉を投げた。

まったく無責任だな。

「わたしたちも無視して感慨に耽るなんて、いい度胸ね」

「羽間先輩、酷いです。私はまだ腕治つてないのに」

いつの間にか柚木先輩と田中が俺の前に立っていた。なんかご立腹気味で。いやまあ、理由は分かりきっているんだけど。

「えっと……すまん」

「すまんて済むわけないでしょ。小物だったから良かったものの、由里奈は大変だったのよ」

「そうです。私は最初から負傷済みで、天使より一ランクしか違うない大天使なんですよ！」

「なんだかんだ言っで、このふたりも大分仲良くなってるなあ。最初のころは睨みあいの連続だったのに。」

「だからすまんって。今回は完全に俺が悪かったから。ほら、次行くぞ次」

ふたりの不満が聞こえてきたが、敢えてそれを無視して階段へと向かっていった。待っている、サタン。

30：廃工場戦闘（後書き）

OTL

なんだかおかしいな展開になってきましたね。しかし今回はかなりダメになりました。冗談抜きですいません。

やけに中ボスなことを言う脇役。

妙にあっさりばっさり倒される敵。

……あちゃー。

最終話に近づくにつれて駄作臭が強くなるのは、もう終わってます。読者数を見るのが怖いですよ（汗）

ってか、俺のモチベーション通称、俺ベーションがネタと一瞬に底をつきかけてます。

まあ後三話程度で終わるっばいですけど（え

31：廃工場決戦

今更だが、この工場は四階建てだ。

つまり目の前にある扉を開けて中に入れば、そこは二階。最上階とすることはさらにふたつ上がらなければいけない。サタン戦前に体力を消費させたくないんだけれど。ゲームにでるような回復薬があればいいと、このときばかりは本気で思った。

グダグダ言っても仕方がない。錆び付いて開きにくい扉を、腹の辺りまで溜めた足で蹴り抜いた。

扉はものすごい勢いで吹き飛ぶと思っていただけ、扉近くで待ち構えていた覚醒者ひとりに当たって動きが止まる。

扉を押しつけて、鼻血を垂らした男が飛び出してきた。すかさず裏拳。それだけで男はあっさりと消えた。弱すぎだろ。

一階より光が入っていて、部屋の中はふつうに見渡せた。数はふたりだけしかいなかった。障害物が無いここでは、他に隠れている可能性はない。

この階は楽勝かと思ったが、すぐに前言を撤回させてもらっ

ひとりの男は両手に銀色の籠手がついていた。手から肘までを覆う巨大な籠手の姿はトゲトゲしく、歪。美術館にでも行けば置いてありそうな呪いの品かと思ってしまう。多分……こっちが主天使。

もうひとりの男は西洋風の剣を手に使っていた。しかし田中のは

違つて、洗練されたように細い白銀の刀身。切るのではなく、突くもの。世に言うレイピアと言うやつか。

「主天使に能天使……」

柚木先輩の眩きでは、レイピアを持った方が能天使らしい。どっちにしろ、先ほどの女性より両方とも強いだろう。

「あらら、下の連中やられたんだ。じゃあ、残るは僕たちふたりだけだね」

「そつみたいだな」

籠手をつけた主天使がおどけた様子で言えば、それを能天使は感慨なく返した。

「まあいいや。ボスと戦わずして死んでもらおう。ああ、ボスって一回言つてみたかつたんだよね！」

能天使は無言でレイピアを構えるが、動く様子はない。何か作戦があるのかもしれないが、主天使の方は知った風でもなく、俺たちに向けて駆け出した。

ひとりでの特攻、よつぱど自分の腕に自信があるんだろう。事実、主天使の動きは速く、俊敏。しかし、ソロイネンやサタンに比べればまだまだ遅い。

柚木先輩が翅を羽ばたかせて、数えるのも億劫になる数の羽を主天使へ降らせる。広範囲に渡る羽の雨は避けることは不可能。

主天使は走りながら、巨大な籠手を頭上に翳した。頭上に翳された籠手に命中した羽は、ひとつの例外なく跳ね返されて地に落ちた。巨大な籠手によって羽はひとつも身体には命中せず、主天使はこちらに疾走する。

「喰らえッ」

子供のような高い声。なのに打ち出された拳は正確だった。

白銀の軌跡を宙に残しながら、籠手に覆われた拳が俺を襲う。

避けても、もう一方の拳が来るし、隙を作ってしまう。なら相手が予想だにしない行動をとるだけだ。

籠手に覆われた拳を俺は両手で受け止めた。

「嘘お!？」

ミシッと鎧の節々が軋むが、それ以外に目立った点はなかった。俺の身体は頭部を除いて、強固な甲殻に覆われている。だからまともに受けなきゃ、この攻撃はさして驚異ではない。単純に相性の問題。

後はこのまま殴ればいいだけ。でもことはそう上手く運んではくれない。

レイピアを携えた能天使が、主天使の脇から現れた。主天使の行動は完全に独断。でも能天使は、主天使が作った隙を縫うように行動する。

突く攻撃に特化しているレイピアは、鎧を打ち抜くために作られた武器。さらにこれは力で具現化された最強のレイピアだ。それは俺の強固な装甲さえも打ち抜くだろう。

しかし横から田中が割り込み、そうはならなかった。田中の剣がレイピアを払いのける。攻撃を防がれた能天使は僅かにだけど、体制を崩した。

そして、柚木先輩の蹴りが能天使のわき腹にぶち当たった。

「ガハアッ」

能天使が衝撃に吹き飛んだとき、主天使がもうひとつの拳を振るった。

それは俺ではなく、攻撃を逸らさせた田中にだった。迫る剛腕の存在に田中も気づくが、時すでに遅し。拳は田中の背中に見事に決まり、身体を地に転ばせた。

「野郎オッ」

受け止めた拳を外に払い、俺は主天使の懐に入りこむ。重心を下に預けての一撃。斜めしたから繰り出された拳は、力により強化された主天使の身体につきたった。俺はその腕に魔力をこめる。

魔力をくわえた腕は、まるで羽のように軽く、力強い。俺の拳での一撃は、主天使を貫いた。

今までにないほど充実した一撃は、主天使に呆気ないほど簡単な

死を提示させた。

主天使の身体が空気に溶け、消える。消えてなにもなくなった空間からは、ゆらりと幽鬼のように立ち上がる能天使の姿が伺えた。

ゆったりとした動作でレイピアを構える。表情からは感情は分かつた。それにはなにも移ってはいなかった。

でも、俺は能天使を尻目に田中に駆け寄った。

立ち上がろうとする田中に手を貸す。

「大丈夫か？」

「は、い。なんとか」

剣を杖代わりに、田中は頼りなさげに立ち上がった。能天使は俺と田中の行動に割り込もうとはしない。柚木先輩が警戒しているのだから当然か。

田中がひとりで立てるのを確認して、俺は能天使に向き直った。

俺が向き直ったと同時に、能天使はレイピアを槍のように正面に構えて駆け出した。

一直線に俺を狙ってくるルートには一寸の狂いもない。スピードも主天使よりも速かった。

だが間には柚木先輩がいる。柚木先輩は翅を内側から開くように羽ばたかせた。烈風が巻き起こり、矢のように打ち出された羽が

能天使を打ち抜かんと迫る。

その猛攻を諸ともせず、能天使はなおも全身。身体に裂傷が走り、突き刺さっても見向きさえしない。まるでそれ自体に興味がないように。

止まらないレイピアの軸線上にいる柚木先輩は、能天使の立派な標的だ。とっさに横へ飛び回避を試みるも、僅かながらに遅く、レイピアの先端が柚木先輩の横っ腹を切り裂いた。

「クッ」

傷口を抑えながら、柚木先輩は地面に膝を突いた。抑えた指の間からは赤い血液が滴っている。なのに能天使はそれでも視線を動かすことはなかった。

繊細な闘牛は、もう俺の目前。レイピアは俺よりリーチが長く、先に一撃を加えるのは至難の業。避けるのもタイミングがもう際どい。防御は論外。

結局答えはさっきと同じで。

向かってくる細い刀身を、俺は両手で掴んだ。

力強く掴んでいるはずなのに、刀身は手の中を滑っていく。止まれと力をこめる。

止まった時は、レイピアが俺の体内に侵入したときだった。刺されたことに対して痛みはもちろんある。けれど串刺しには至らず、致命傷にはならない。俺が蹴りを放つと後ろへ跳び、衝撃を吸収す

ると共に間合いを開けられた。

信じるに値するか分からないが、先ほどの会話からしてコイツが最後のひとりだろう。だが、三体一の状態でコイツは俺たちに引けを取っていない。ソロイネンより一ランク下の覚醒者のはずだけど。

コイツとの戦闘を長引かせれば、サタン戦に確実に響くはずだ。それだけは避けたかった。圧倒的な戦力差のうえ、満身創痍だったなんて洒落にならない。

思考を巡らせていると、田中が俺の前に一歩踏みでた。

「オイ、田中？」

田中が能天使に向けて、剣を構える。

「羽間先輩は柚木先輩と一緒に、先に行ってください」

「は？ いきなり何言って――」

「こんな所で体力を使う必要はないでしょう。だから先に行ってください。こっちはなんとかしますので、先に上へ」

前から思っていたけど、田中は俺の思考でも読めるのか？ いや、俺が読まれやすいだけか。

確かにこんな所で体力を食うのは避けたかった。だけど、仲間を置いてけぼりにしては行けない。

「駄目だ。それじゃあ、お前が……」

ゆっくりとした動作で田中は頭を振り、俺の言葉を無言で遮る。

「羽間先輩、私は後で行くと言ったんです。少しは信じてくださいよ」

「田中……」

ここで俺が残ったら、田中を信用していないことになってしまう。もちろん俺は田中のことを信頼している。だから頷き、すまん、と言いついて走り出した。

斜めに階段へ向けて走り出すと、数メートルと言う距離で能天使とすれ違ったが、なにもしてはこなかった。

途中、柚木先輩と合流して四階へと急いだ。

*

「茶番だな」

能天使の男がレイピアを構えたまま、呟くように言葉を吐いた。

遠ざかっていく足音のみが反響するここでは、能天使の声はよく通り、田中の耳に言葉を伝わった。

「かもしれませんね。でも、アナタは何故ふたりを止めなかったんですか？」

白銀の刃を流れるような動作で構えた田中が尋ねた。

能天使の表情に始めて感情らしいものが浮き上がった。それは薄い笑みのようで。

「足止めをしろ、とは言われていないのでね」

「そうですか」

相手に応えるように田中も小さく笑みを作ると、ふたりはお互いに前へと踏み出した。

*

階段を駆け上がる。

錆び付いたキャットワークは踏むたびに、俺の甲殻に当たり鈍い金属音を上げる。

下では剣と剣同士がぶつかり合い、これとはまた別の金属音あげている。その音に応えるように、俺と柚木先輩は登る足に力を込める。

三階に入るための鉄扉を躊躇いなく蹴破る。中に入っても気配さえも感じず、そして視界には人影も入らない。誰もいないのだ。

さっきの奴らの言ったことが本当に助かり、俺たちは新たな階段を駆け上がった。通常ならとつくに息が切れ、足に錘がついたようにダルくなるのに、今はまったくそんな苦しさとは無縁。

ついに階段を登りきった俺は、四階の扉を蹴破った。

そこには金髪で、俺たちの最大にして最強の敵が中央に悠然と立っていた。

「待ってた——さあ、殺すぜ」

サタンは妖しく笑う。

31：廃工場決戦（後書き）

なんつーか、主天使はかませ犬感バリバリでしたね（汗）能天使もなにがしたいんだか……。そして柚木先輩がまるで空気のような（爆）なんで田中ばっか目立つんだろうなあ。やっぱり、田中って名前が小学生時代の片思いの相手だからか（え

まあ性格は似ても似つかないし、眼鏡をしてませんが。ちなみに某女子に引きずられ、無理やり告白させられて玉砕されたのは言ってもありません（爆）

さて、次回はやっとVSサタンです……。

32：生死の間

金色の悪魔とついに対峙する。

「サタン……ッ」

俺と柚木先輩はすぐさま戦闘体制をとった。

サタンが俺たちの方に手を向ける。俺と柚木先輩は弾かれるように左右へ跳んだ。

直後、俺たちが立っていた場所から紅蓮の炎が噴き出す。あそこ
にいたままなら、また丸焼きにされるところだった。

横に跳び、着地した柚木先輩が翅を振るい、無数の羽をサタンに
向けて打ち出すと同時に、俺はサタンへ駆け出した。

到達速度は羽の方が幾分か早く、無数の羽がサタンに襲いかかっ
た。

流石に避けせないだろうと思った時、サタンの眼前に炎が生ま
れて壁となった。羽は炎に接触すると一瞬で燃え上がり、消えた。

羽の攻撃が防がれた直後、俺はサタンの元に到達する。

「セエッ」

限界まで溜めた拳を前方へ打ち出した。打ち出された拳は炎の壁
を突き破り、サタンの顔に迫る。

サタンは俺の拳を一瞥すると、手のひらでいとも簡単に拳を掴んだ。驚愕している間に、掴まれた拳をうしろに引かれる。身体がサタンの方に引っ張られて、炎の壁に身体が包まれた。

「――アアアッ」

声に鳴らない呻きが口から漏れ、次にサタンが無造作に放った拳が腹を突いた。その簡単な一撃に装甲はひび割れて陥没し、俺の身体は後方へと一気に吹き飛ばされた。

何十メートルも跳ばされ、さっきまで俺がいた地面の上を転げた。勢いは止まらず、コンクリートの壁に背中を激突させた。

コンクリートにはひび割れが走り、俺は拳の衝撃に息を詰まらせる。

「祐二、平気？」

サタンから目を離さずに柚木先輩が言った。それに大丈夫ですと返すと、壁に手を突きながら立ち上がった。

立ち上がる一連の動作を笑いながら見るサタンは完全に余裕。追い討ちを掛けないのは、その必要なんてないと言わんばかりだ。実際、サタンは隙あらば俺に攻撃しなければいけないほど脆弱ではない。

自分の弱さに思わず舌打ち。

こちらの方までゆっくりと下がり、柚木先輩は俺に耳打ちをする。

「ふたり同時に接近戦するわ。上位ランクふたりとの近接戦闘はサタンにも辛いはずよ」

「わかりました」

頷くと、柚木先輩は翅を羽ばたかせ、俺は地面を蹴ってサタンに向けて飛び出した。

迎撃や対策もせず、サタンは無然と立っているだけでなにもしない。

俺と柚木先輩が接近したとき、始めて動き出した。

柚木先輩が助走をつけて放った蹴りを、腕で受け止めるが、腕にダメージを負った様子はない。次に俺の拳。こちらも簡単に受け止めた。一発で攻撃を止めずに、俺はもう片方の拳を振るう。掴んでいた手を離して、それをまたしても受け止められた。

俺は開いた方の拳をまた振るうが、それもまた掴んでいた拳を離してサタンが受け止める。拳の連打連打連打連打。しかし、俺の放った拳はすべてがいとも簡単に受け止められた。

柚木先輩も宙で何度も何度も蹴りを放つが、すべてサタンに片手で防がれている。

「おいおい、弱すぎんだろ」

ため息混じりにサタンが膝を放ち、俺の鳩尾に突き立てた。息が詰まり、一瞬意識が遠のく。そんな俺に追い討ちをかけるように、

裏拳が顔面を直撃した。呻き声を上げる前に再び放たれた蹴りが身体をたたいた。俺はサタンの左手側に吹き飛ばされて、コンクリートの壁に身体をうち付けた。

鎧に付けられたひびがさらに広がり、ほぼ全身にひびが生まれた。コンクリートの壁にも俺を中心にコンクリートが陥没し、大量のひびが走る。

四肢に力が入らずに俺の身体が地面に倒れた。壁が揺らいでコンクリートが剥がれる。剥がれたコンクリートは俺の頭上に降り注ぎ、俺を下敷きにした。

*

大量のコンクリートが倒れた祐二に降り注ぎ、身体を押しつぶした。

「祐二ッ！」

灰塵が舞い、そして大量のコンクリートが邪魔をして、祐二の姿は伺えない。

「すまねえなあ、陽子。オレはあいつをタイマンで殺してえんだよ。……だから、ちょっと寝てろ」

サタンは柚木の頭部を掴み、柚木を地面に叩きつけた。

後頭部に走る激痛に、呻き声を上げる間もなく柚木は気を失った。腕を掴み、サタンは気を失った柚木は邪魔にならないところへ投

げた。地面に転げた柚木を一瞥すると、崩れたコンクリートの山を見据える。

「とつと出て来いよ……ルシファーもどき」

*

夢だ。

そう、これは夢。

残酷で悲しい悲劇の。

サタンと戦い、敗れた。なぜ、俺がサタンに敗れたのか。なんであんなに強くなっていたのか。

時折光るペンダントは、力を増幅させる物だと容易に想像できた。

笑いながら、あいつは俺を殺した。

あのとき、

俺は――

*

瓦礫が跳ね上がった。

重力の赴くままに地面に落下するはずの瓦礫は、高温で熱されて溶岩として落ちた。ドロリとした煮えたぎる液体は、コンクリート

の地面を溶かして下の階へ落下する。

燃やす。命を生命を魔力をすべてすべて燃焼させる。

力、俺の力。

コンクリートの瓦礫を溶かしながら、俺は立ち上がった。

視界は蒼く染まっている。

蒼、青より澄み渡り吸い込まれるように淡い。

身体を包む蒼い焰^{ほむ}は、熱くはなく、身体の一部の用に神経が行き届いていた。

ルシファアの力、蒼炎燃焼。赤よりもさらに高温の炎を起こす力。

長くは俺の命が持たない。俺が死ぬ前にアイツを殺す。

サタンの胸元で赤黒い石のペンダントが鈍く煌めく。そんな物に頼っているオマエに、負けてなるものか。

「往くぞ」

「こいルシファアもどきが」

サタンの周りからに赤い炎が立ち上った。紅蓮の炎はもはや驚異でもなく。

「俺は——羽間祐二だ」

そして、決戦。

*

蒼い軌跡を残しながら駆け出す。踏み込む度に地面は溶けて窪む。

お互いの間合いに入るのに一瞬すら必要なかった。

蒼炎と紅蓮が絡みあい、貪りあう。

右拳を放った。サタンも同時に拳を放つ。

激突。

右腕の装甲が砕けたり、地面に落ちた。拳を放ったサタンの腕から、血が吹き出す。

お互い同時に蹴りを放った。大量の空気を喰いながら身体にまわりつく蒼炎と紅蓮が激突し、蹴りを放った足同士がぶち当たる。

臍から下の鎧が砕け散った。サタンの足は蒼炎に襲われ、足は守る紅蓮を無くし、燃やす蒼炎が支配した。流石のサタンも苦悶の表情を浮かべる。

蒼炎に焼かれながら、サタンは拳を放つ。俺もまた拳を、蹴りを、すべてを放つ。

拳と蹴りと肘、膝、技の応酬。

今はお互い、ただただ殴り合うだけ。

しかし優勢はサタンで、俺は鎧を砕かれながら窮地に追い込まれていく。

サタンの赤いペンダント。あれは魔力を増幅、制御する魔石。あれのせいで、こちらを僅かばかりサタンが凌駕していた。

だけど今できることは、本気で殴り合うだけだ。

装甲が崩れ、肉が裂け、爪が割れる。

指が折れ、内臓が出血する。

死闘。

弾かれたように俺たちは離れると、また接近。

コンクリートの天井や地面が溶けて空洞を開ける。炎によって酸素が燃烧され、酸素不足になった部屋に酸素が流れ込む。酸素の影響で蒼炎と紅蓮が勢いを増した。

「サタアアアンツ！！」

咆吼。

「ルシファアアアアツ！！」

咆吼。

吼えて、殴り、傷つけあう。

負けない。勝ってやる。そう心で思っているのに、鳩尾に入った一撃で想いは脆くも崩れさった。

身体が吹き飛ぶ。足について、蒼炎で地面を溶かしながら動きを止めた。

意識が消えかかる。薄れた風景は白濁とした色に染まっていく。赤い炎がこちらに向かっていてのだけは分かった。

すべてがスローモーション。死ぬ寸前は景色がすべて遅くなるとは本当らしかった。

もう俺に力はない。命も消えかかって、すべてが紅蓮に犯されている。

蒼炎では勝てない。でも力はもう――

いや、ある。

右手に拳を作り、ありったけの魔力を込め始めた。最後の魔力を、すべて右手に送り込む。

それは本当に充実した感覚で、魔力の流れ込む感触が拳に伝わる。

なあ、知ってるか。声には出さず、サタンに尋ねる。俺は魔王なんかじゃないだぜ。

俺は、最弱の天使。

地面に足を踏み込み、腕を振りかぶる。

天使の力は、本当にちっぽけで弱い。魔力を注ぎこんだ部位の能力を上げる、その癖魔力は少ない。ちっぽけで脆弱な役立たずの力。だけどな、

そこに最強の魔力を注ぎ込めば、どうなるかわかるか？

「——オオオオオオオオオッ！！」

最弱は最強の力になる。

溢れ出した魔力は指向性を持って、前方に吹き出した。

蒼炎が天使の力を纏い、ひたすらに前へと進む。先にはサタンが存在した。

避けられない力の渦はサタンを飲み込む。

「——アアア」

絶叫は声にはならず、蒼炎に焼き尽くされた。

サタンを倒した達成感に包まれながら、

俺は死んだ。

32：生死の間（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
—— by レナ

はい、そんな内容です。

本来やらない所まで書きました。もう後一話とエピローグで終わります。

それにしても、使われなかったルシファールの力と、祐二自身が持つ天使の力も伏線張ってたけど、デウス・エクス・マキナ感が否めませんね（汗）

33：助けたいと願った時

吹き荒れる熱風で、柚木陽子はうつすらと目を開けた。覚醒したばかりで朦朧とする意識を推して上半身を起こす。

揺れる頭を手で支えながら、辺りの状況を確認した。

廃工場の一室は見るも無惨に破壊されいる。あまりの熱に溶解したり、砕け散った床や壁。

何が起こったのか理解出来ずに視線をさまよわせていると、視界に金色の髪が入った。柚木は反射的にそちらを見やる。

そこにあるのは、身体が透けていくサタンの姿だった。

唸然と消えゆく様子を見て、鈍く動き出した脳が真実を導き出す。

サタンが、死んだ？

身体が消えていくと言うことは、つまり同じ覚醒者に殺られたと言うこと。サタンに匹敵する力を持つ者は、この場にひとりしかない。

柚木はサタンに匹敵する力を持った少年の姿を探す。自分で手を下せなかったのは少しばかり残念だったが、サタンは死に絶えた。それだけで気分が弾んだ。

だから復讐を果たしてくれた彼を見つけた時、柚木陽子の声は驚くほど弾んでいた。

「祐二！」

瓦礫の間に探し求めていた少年の姿を見つけた。立ち上がると貧血になったのかのように、頭が揺れるが気にはせず、柚木は駆け出した。

祐二が近づいてきたとき、漸く異常に気がついた。なんでか身体が透けていた。ゾクンと、心臓が波打つ。嫌な予感ばかりが脳内をよぎる。それを振り払い、柚木は祐二に近づいていった。近くに行けば間違いとわかると、そう思いながら。

しかし、淡い想いは脆くも崩れさる。

目の前に転がる羽間祐二の身体はゆっくりと、大気に溶け出し、消えていく。身体は透けて、向かい側が見えてしまうほどだった。

「嘘……」

ぺたんと弱々しく、地面に尻餅をついた。荒れたコンクリートに座りこんだせいで尻が痛むが、気を払っている余裕など存在はしていない。

透けていく身体に手を伸ばすと、まだ触れることができた。それなのに、体温だけはまったく感じる事が出来ない。

手が震える。

消えてしまう。

羽間祐二と言う少年が消えてしまう。

接点を持ったのは、ここ数週間程度だけだ。なのに、この少年が消えてしまうと想うだけで、震えが止まらなくなった。

また目の前で、人が死んでしまう。

「――させない」

解けていた力を再び発動させた。白銀の翅が背中から出現する。

消えゆく祐二の身体の上で、自らの両手を重ねた。

死なせない。絶対に。

あるとき、彼がしてくれたように、自分もこの力を使おう。

頬を伝いながら涙が一筋の線を作った。涙は祐二の身体に落ちるはずなのに、身体を通り抜けて地面を濡らす。

小さな声で呟く。

「まったく……簡単に死ぬんじゃないわよ」

顔に苦い笑みが浮かんだ気がした。

柚木の裳から、圧倒的光量を持った光が放たれる。光は祐二を、柚木を包み込む。

*

これもまた、夢。

夢、そうこれは夢のはずなんだ。

だけど、いつもの夢とは違う。目だけを動かし視線を変えれば、戦いあうルシファーとサタンが見えた。俺は今、宏一とは違う人物になっている。

「陽子……」

頭上を見れば、そこには見知らぬ少年。弱々しそうで線が細い少年は、なのに意志の力が満ちあふれていた。脳内で誰か理解する。この人が、樹さん。

悲しそうで、顔は今にも泣き出しそうなのに、樹さんはけして泣き出さなかった。

「ごめん……巻き込んだじゃって」

俺の——柚木先輩の口が言葉を出そうとするが、口は動かない。死んでいるみたいだ。いや、柚木先輩は死んでいる。胸を貫かれ、大量の血が流れ出しているのだから。

「せめて、陽子だけでも……」

樹さんの両手から、目を開けていられないような、凄まじい光が現れた。眩しい光は不思議と心地いい。

「君だけは——」

光が収まったとき、身体が動くようになっていた。胸の傷まで完壁になくなっている。傷跡さえも残ってはいなかった。

これは――樹さんの力？ 樹さんに視線を向けると、身体が空気に解けるようにして消え始めていた。

「樹ッ！」

柚木先輩が駆け寄って、手を伸ばすがもう樹さんには触れられない。

樹さんがかけらも残さず消えたとき、ルシファーもすでにその姿を消していた。失意の柚木先輩の耳には、遠ざかっていくサタンの歓喜しか聴こえてはいない。

周りの景色が薄れていく。この夢から意識が目覚めようとしているようだ。

これは、宏一の夢ではない。柚木先輩の憎きあの日の記憶。宏一の攻撃から樹さんを庇って死んだ、柚木陽子と言う名の人物のもの。

三年前、高校三年生時代の。ようやく矛盾が解けた。なら、今の柚木先輩の年齢は――

*

目を開ければそこは、壊れた廃工場だった。

おかしいな。確か俺は死んだはず、なんで生きているんだろう？

自分で自分が死んだと理解している、と言うのは奇妙な言葉だとは思っけど、俺はサタンとの戦いで絶命した。蒼炎燃焼は発動している限り魔力を喰らい続ける――と何故か脳が力を理解していた――力のはずだった。俺は限界まで魔力を使い切ったせいで死んだのだ。魔力は少しでも残っていれば、自動的に回復するが、魔力が完全に。になると人間は死ぬようになっていく。

だったら、なんで生きているのか。思考を巡らせてはみるものの、答えを見つけないことは出来なかった。

まあ、今はいいか。と思考を切り替える。後で考えればいい。

まずは柚木先輩を見つけないければ、と立ち上がろうと上半身を持ち上げたとき、

透けていく見慣れた身体を目にした。

「――柚木先輩!？」

自分のすぐ近くに柚木先輩の身体が寝ころんでいた。それだけならよかったのだが、柚木先輩の身体は徐々に消えていつている。つまり、柚木先輩が死んでしまおうと言っていること。

柚木先輩に触ろうとしても、虚像に手を伸ばしているように、俺の手は虚しく宙をさ迷うだけ。

「そ、んな……」

なんで柚木先輩の記憶が見えたのか、分かった。柚木先輩は樹さ

と同じことをしたんだ。樹さんの力をあのときをきっかけに引き継いだらう、柚木先輩が。この二人の力は、死んだ相手に莫大な魔力を送り込んで蘇らせると言う、強力な力。でも、あまりの魔力を放出するために、使った本人は死んでしまう。

柚木先輩は、俺なんかはその力を使ってしまった。そのさいに、記憶の一部が流れ込んで来たんだらう。

結果的に、柚木先輩を殺してしまったのは俺なのか。

樹さんが命懸けで守り抜いた命を、俺が摘み取ってしまった。

ただどうすることも出来ず、消えていく柚木先輩を見ていることしか出来な——いや、違う。まだ出来る。

俺も柚木先輩に同じことをやればいい。魔王の強大な魔力を柚木先輩に注げば……。

身体が消えかかっている柚木先輩の頭上に手をかざす。手のひらに魔力を集中させるのをイメージ。答えるように魔力が手のひらに集まり、柚木先輩に降り注いだ。

この調子で行けば、蘇らせることも可能かもしれない。期待と不安で胸を膨らませながら、魔力を注ぎ続ける。

だが、物事と言うものは簡単には済んでくれない。

髪の毛が蒼色から黒になり、長さも同じになるまで魔力を放出しても、柚木先輩が消えないようにするだけで精一杯だった。

クソッ、と俺は吐き捨て唇を噛み締める。強く噛みすぎて唇が切れても注意を払う神経なんて残ってはいない。

駄目だ、魔力が足りない。最強の魔力を持っても、人を蘇らすことは出来ないのか？

……それもそうかもしれない。魔王の次に魔力の強力な智天使が、力の特性を借りても命を犠牲にするほどの荒療治。消耗して、なおかつ力を使い切れてない俺ができるわけがない。

でも、諦めるわけにはいかない。

そのとき、視界の隅で何かが鈍く煌めいた。

視線を光がしたほうに向けてみれば、赤黒い宝石が埋め込まれたペンダントが落ちていた。紛れもなく、そのペンダントはサタンが付けていた魔力増幅装置兼制御装置だった。

「ナイスタイミングッ!!」

俺は駆け出し、落ちていたペンダントを拾い上げる。触れた瞬間に、全身に信じられないほどの充実感が生まれた。きっと魔力を増幅させ、そのうえ制御できるようになったからだろう。

急いで柚木先輩の方にUターンし、再び魔力を注ぎだした。魔力の放出速度と密度がさつきとは桁違いだ。

これなら、いける。柚木先輩が生き返る確信が胸に広がっていく。

魔力が放出されていくに増して、柚木先輩の身体の輪郭が鮮明に

なっていった。

後一步、そう思ったときにペンダントの宝石にピシィ、とひびが入った。瞬間、身体から魔力の充実感が少しばかり薄れる。宝石のひびが広がるたびに、魔力が薄れ、制御が困難になりだした。

「もう少しなのに……！」

頼むから、後少しだけ持ってくれ！

願ひむなく、俺の手の中で宝石は崩壊していく。

俺の魔力が底をつき始めているのが分かった。あと少し、あと少しなんだ。頼むから、頼むからあと少しだけ俺に魔力をくれよ！
なあッ！

頬を熱いものが伝った。一滴流れ出したら、我慢することはできなかった。堰を切ったように流れ出す涙を、俺は止めることができない。

「あ……ぐ、クソ……クソッ！　なんで！　なんでなんでッ！　なんで目の前で死にかけてる人間を助けられないんだよ！　誰か……誰か柚木先輩を助けてくれよ……」

もはや他力本願。

涙を流しながら、姿のない誰かに向けて俺は声を張り上げる。聞いているのだったら、助けてくれ。神様……このさい悪魔でもなんでもいい。柚木先輩を助けてくれ。

みつともない。本当にみつともない。男が泣きながら誰かに助けを乞うんだ。でも今はプライドなんていらぬ。ただ柚木先輩を救いたかった。

魔力を消えかけて諦めかけていたとき、

俺の手に誰かの手が重なった。

顔を上げると、当時のまま線の細い少年、樹さんがそこにいた。さらに隣には、柚木先輩を間違えて殺し、そしてサタンに殺された少年——宏一。

最後に居心地が悪そうに顔を背けつつ、無愛想に——と言っても表情が見えないサタン。

柚木先輩の輪郭が明確になっていく。

ああ、そうか。唐突に、完璧に理解する。俺たちは全員この人が好きなんだ。

この人自身は宏一やサタンの好意には気づいていないかも知れないけど、ふたりも紛れもなく柚木陽子を愛している。

まったくもって、凄い人だと思う。無意識に四人の男の好意を勝ち取り、奪い合いをさせてしまう始末なのだから。罪な女とは、この人を示すのかもしれない。

自分の口元に笑みがあるのに驚き、それでも笑みを隠さずに俺と三人は魔力を送り続けた。

33：助けたいと願った時（後書き）

時間がないので、すぐ投稿するエピソードに続く！

終：エピローグ

声が聞こえた。掠れてはいるが、俺を呼ぶ声だとは分かった。

まだ眠い。

「――……。祐二」

ああ、うるさいな。俺はまだ眠いんだから、寝かせてくれよ。

掛け布団を掴み、声のしたほうに背を向けた。

「いい加減に起きなさいッ！」

まったく容赦無しに背中を蹴り飛ばされた。床に引いた布団から身体がはじき出されて、冷たいフローリングの上に転げた。

「痛たたたたた……」

背中というものは、叩かれると結構痛いし、息ができなくなる。下手をすると叩かれた人物が死んでしまうこともあったりと、危険な場所だったりする。

俺を容赦なく蹴り飛ばした人物――柚木先輩は、満足そうに鼻を鳴らした。

「ほら、早く起きなさい。夏休み明けの初日に遅刻するつもり？」

「わかってますよ……眠っ」

あの事件から、早くも1ヶ月が経過していた。当初は、廃工場、謎の大爆発！？なんて記事もたびたび見かけたが、今は影も形もない。それと、あの廃工場は早急に県が取り壊しを表明した。まあ爆発事故なんかがあって放置してたら、面子にも関わるのだろう。爆発事故を起こしたのは紛れもなく俺なんだけど。

柚木先輩を部屋から出し、手早く制服姿に着替えて、筆記用具と宿題を入れた鞆を持ち上げた。夏休みの課題は、所々を章に写させてもらったんだけど、ほとんどは柚木先輩と田中に教えられながら自分で説いた。そういうのは自分でやれと、ふたりに説教されたから。なんでこのふたりは息が合うんだろうか。

学校指定のスニーカーに履き替えて玄関をでると、制服姿で鞆を持った柚木先輩が待っていた。

「遅い。もう少し早く着替えなさいよ」

「これでも結構早いと思うんですけど」

「口答えしない。ほら、行くわよ」

この夏休みの間に、俺と柚木先輩は恋人同士に……なるわけもなく、友人関係がダラダラと続いている。告白しようにも、チキンハートの持ち主である俺には到底無理であって。

しかも、なんだか柚木先輩の俺に対する対応が母親臭い。まあ、柚木先輩の実年齢は二一だから、俺なんてガキにしか見えないのかもしれないけど。しかし、ルシファアの力を持ったのが高校生だからって、わざわざ高校に入学してくるのはどうかと思うわけで。

も、そうしてくれなきゃ俺は柚木先輩に会えなかったんだけどさ。

階段で一階に降り、入り口に行くと田中が両手で鞆を持ちながら待っていた。

「あ、羽間先輩に柚木先輩！」

こっちに気づいた田中が手を振ってきたので、俺と柚木先輩も手を振ってそれに答えた。

あのあと、田中はボロボロになっていたが、ちゃんと生きていた。なんでも、能天使がトドメを差さずに、どこかへ行ってしまったらしい。また会ったら、お礼を言ったあとにトドメを差さなかった理由を聞きたいそうだ。生死を賭けて戦った敵にまた会って、しかもお礼を言いたいなんて、まったく田中らしいといふかなんというか。

こうして、俺と柚木先輩、田中の三人は夏休み明け一日目の学校に向かって歩き出した。

通学路はまだ俺みたいに眠そうにしてる奴らや、恋人同士だろう生徒たちが、続々と学校に向かって歩いていった。こういうのを見ると、つくづく平和な日常がどれほどいいか実感する。

まだ夏の日は暑く、登校中の生徒たちも暑い暑いと不評を漏らしている。もちろん俺も暑い。

三人で雑談を何気なく交わしながら学校へと歩いていく。なんだろう、この時間がかけがえのないものに思える。俺は柚木先輩に告白とかはできていないけど、それでも今がとても幸せだと感じた。

校門前に到着すると、女友達に田中が捕まり、どこかへ連れ去れていった。それを見送ると、俺は校門をくぐり、柚木先輩がいなかったことに気づいた。

振り返ると、柚木先輩は田中と別れた場所から動いておらず、空を見上げていた。

「柚木先輩？」

「空、綺麗よね」

唐突にそんなことを言ってきた。

俺も見上げれば、青く広大な空が視界一面に広がった。手を伸ばせば届きそうだと誰もが思い、だけど届かないと誰もが気づく。

「日常って、こんなに幸せなものなのね」

柚木先輩がポツリとつぶやく。

「そうですね」

非日常を体験したからこそ、日常のかけがえなさが実感できた。

他の生徒に聞こえるかもしれないけど、俺は今、あの言葉を言うてみることにした。

「柚木先輩」

「なに？」

「俺は柚木先輩が好きです」

「……そう」

それっきり会話が途切れた。ふたりの間には沈黙が流れて、周りの生徒達の談笑しか耳には入らなくなった。なのに、この沈黙は嫌ではない。いや、多分俺はこの沈黙さえも好きなのかも知れない。そう、柚木陽子が作り出すすべてが愛しいんだ。

「そろそろ行きましょうか」

「そうね」

空を見上げるのを止めて、俺たちは歩き出した。答えは今聞かなくてもいい。答えなんていつでも聞けるんだから。

青い空を頭上に感じながら、俺は夏休み明けの授業を受けるべく、学校の中へと入っていった。

おわり

終：エピローグ（後書き）

長編小説 初完結！

みなさん、今までご声援ありがとうございましたっ！ いざ最後のあとがきとなると、いろいろ書きたかったはずなのに言葉が思い浮かびません（汗）

とにかく、初めて長編が書き切れて嬉しいのです。一時期まったく小説を書けなくなった時期がありました。ですが、ひとつの感想によりモチベーションが再燃。そして一日一更新で、ついに最終回を飾りました。33話のように日が変わる残り1分のときに更新するときもありましたけど（汗）

今日、エピローグの最初の一文を書いたときに、いきなりエピローグの内容を変えたりとかもありました（爆）

所々に至らない所々が多々ありますが、それでも初めて長編を完結させた達成感はいろいろと胸にくるものがあります。

それにしても、小説家になろうで何か書こうかな？ って、思ってた適当に書き出したのがこの作品です。マジメにプロットなんて組みませんでしたよ。お陰で後半はボロがでまくりですよねえ。

ひとまず小説を書くのは一旦休憩。

某所に投稿した『夏とあいつと偽物ロケット』の修正版をこっちに投稿する予定です。いつときますが短編で、ファンタジー要素皆無

な作品です。

舞台が部員ふたりだけのオカルト研ですけど（笑）修正版じゃないのは、自HPのTOPにあるバナーをクリックすればこの小説がありますので。

長編はまたもや現代ファンタジーになる……予定です。それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8228a/>

青の少年

2010年10月9日01時25分発行